

1 文語では動詞及び動詞型の助動詞の終止形、形容詞及び形容詞型の助動詞の未然形に附いて、未だ成立しない條件を逆説的に假定することを表す。但し、現代の文語文には用ひられない。

繪にかくと筆も及ばじ少女が花の姿を誰に見せまし。(堀川後百首)

嵐のみ吹くめる宿に花すゝきはに出でたりとかひやなからむ。(蜻蛉日記)

あいぎやうなくと詞しなめていへば、いはるゝ人も聞く人も笑ふ(枕草子)

2 口語では活用言の終止形に附いて次の如き用法をなす。

(1) 未成立の條件を順説的に假定するもの。

あまりしやべると疲れるだらう。(口)

長いと折れるでせう。(口)

早く歸らないと心配するでせう。(口)

(2) 既に條件の成立したものととして順説的に假定するもの。(1)と比較してその差異を認める必要がある。

あまりしやべると疲れる。(口)

長いと折れる。(口)

早く歸らないと心配する。(口)

(3) ある事實と事實とが同時に存在するといふことを表すもの。順説的に述べるのであるが、條件の意味は無くても單なる接續的の用だけをなすのである。同時の列叙である。

旅行から歸ると病氣になつた。(口)

内へ入ると雨が降り出した。(口)

復習を始めさせるとすぐるねむり出す。(口)

この「と」は古く用ひられたる時の意味をあらはす名詞の「と」と同じものであらうといふ説がある。

吾が背子をなこせの山の喚子鳥君よびかへせ夜の更けぬとに。(萬葉集、一八二二)

吾がやどの松の葉見つゝあれ待たむはや歸りませ戀ひ死なぬとに。(萬葉集、三七四七)

「かひはかくありけるものをわびはてしてしぬる命をたすけやはせぬ」とかきはつると絶え入り給ひぬ。

(竹取物語)

若し果してさうであるならば「と」の上位語は連體形であるといふことになる。

(4) 後に述べる「とも」と同じやうに未だ成立しない條件を逆説的に假定する。

どこへ行かうと心のまんだ。(口)

死なうと生きようと捨てておいてくれ。(口)

行かうと行くまいとお前の勝手にするがいに。(口)

(三) とも

前項の「と」に係助詞「も」が加はつて出來た助詞である。文語にも口語にも用ひられる。

1 文語では前項の「と」の「と」同様に用ひられる。

我が盛りいたくくだちぬ雲に飛ぶ薬はむともまた變容めやも。(萬葉集、八四七)

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。(古今集)

夏引の手びきの絲をくりかへし言しげくとも絶えむと思ふな。(同)

たゞし、萬葉集の中には上一段活用の「見る」といふ語に限つて未然形から「とも」に連つて同様の意味に用ひ

られてゐる例がある。(外に二〇二四、二五〇九、四〇三七、四四八一の例がある。)

萬代に見とも飽かめやみ吉野のたぎつ河内の大宮どころ。(萬葉集、九二一)

君が家の池の白浪磯に寄せしばしば見とも飽かむ君かも。(萬葉集、四五〇三)

2 口語では動詞・助動詞の終止形及び形容詞の未然形に附いて、未だ成立しない條件を逆説的に假定する。

(1) 動詞・助動詞の終止形についたもの。

何を買ふとも買ひ手の勝手だ。(口)

どうするとも自由にするがい。(口)

待たれるとも待つ身になるな。(口)

よからうとも悪からうとも實行するがよい。(口)

この場合に「も」を省いて「と」とすることは前項口語の「と」の(4)の條下で述べた通りである。

(2) 形容詞の未然形についたもの。

どんなに早くとも三日間はかゝる筈だ。(口)

顔が美しくとも心が醜ければ駄目です。(口)

今晚は遅くとも必ず歸ります。(口)

同じ「とも」といふ形の語で「言ふまでもない」「勿論さうだ」といふ意を表して文の終りに用ひられるものがある。

三つながらあるか。あるとも。(口)

今晚行きますか。行きますとも。(口)

しかし、これは接續助詞ではなくて終助詞であるから混同しないやうにする必要がある。

3 「とも」が動詞に接續する時は、右に述べた様にその終止形につくのが常則であるが、連體形につく用例も多い

ので、例の「文法上許容ニ關スル事項」十一に次の如く定められてゐる。

てにをば「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルルトモ。

強ヒテ之ヲ遵守セシムルトモ。

右の理由の説明は、「現行普通文法改定案調査報告之一」(二八頁—三一頁)に次の如く出てゐる。

反接ノ意ノともハ、中古文ニ於テハ、動詞及ビ多數ノ助動詞ニハ終止形、形容詞及ビベシ、まじ等の助動詞ニハ連用形ニ附クヲ通則トス。然レドモ現行普通文ニ於テハ、ラ行變格ノ動詞及ビすなりたりノ助動詞ニハ終止形ニ、形容詞及ビベシまじノ助動詞ニハ連用形ニ附クモノトシ、其他ノ動詞・助動詞ニハ皆連體形ニ附クモノト定ムベシ。

例	中	古文	普通文
活四段	往	ゆ	とも
活四段	押	お	とも
活一段	見	み	とも
活一段	着	き	とも
上二活	盡	つく	とも
上二活	報	むく	とも

理由 此もニツキテハ、「廣日本文典」ノ「ともども」ノ條ニ、

「ともハ本文ノ規定ノ如ク、必ズ動詞ノ第一活用ニ接シテ、「受くとも」「得とも」「歴とも」「寝とも」「來とも」「爲とも」「ありとも」「居りとも」ナドナルベキヲ、動モスレバ「受くるとも」「得るとも」「歴るとも」「來るとも」「あるとも」「居るとも」ナド第二活用ニ接シテ用ケルコトアルハ非ナリ。或ハ「と」ヲ省キテ「恥を受くも恥とせず」「年を歴るも成らじ」「志あるも遂げざらん」ナド用キ、剩へ「とも」「と」トノ意ヲ混用スルハ、殊ニ非ナリ。必ズ未定既定ノ用法ヲ別ツベシ。殊ニ「も」ハ附屬物ナレバ「も」ノミニテハ、「雖」ノ字ノ意ヲ成サヌコトヲ牢記スベシ。又形容詞ニテハ、「善くとも」「悪くとも」「未定」「悪しけれども」「既定」ヲ用キ分クベシ。「善くも探らず」「悪くも捨てじ」ナドハ極メテ非ナルコトハ、前項ニイヘルニ同ジ。

トアリテ、固ク禁ゼラレタル所ナリ。サレドモ、中古ヨリ絶エテ之レニ類似セルモノ無キニハアラズ。ソハ、動詞ノ連體形ニ附クモノニテハ

將來云毛不來將有乎不來云乎將來常者不侍不來云物乎。(萬葉集四)

みやこへと思ふものゝ悲しきはかへらぬ人のあればなりけり。(土佐日記廿七日の條)

はかなき花もみちといふも、おりふしの色あひつきなく、はかしくしからぬは、露のはへなくきこえぬるわざなり。(源氏帯木)

ナドアリ。形容詞ノ連用形ニ附クモノニテハ

あしくもよくもあひそひて、とあらんをりも、かゝらんささみをも、みすぐしたらむ中こそ、ちざりふかくあはれならぬ。

とがなきもわがものとうちたのむべきをえらむに、おほかる中にも、えなん思ひきたむまじかりける。(源氏帯木)

ナドアルニテ之ヲ知ルベシ。而シテ全ク今日ト同一ナルモノハ、鎌倉ノ初メヨリアリテ、足利ノ末ニ到リテ最モ多クナレルモ

ノノ如シ。即チ、

我身ノ切ル、モ不知引ケム。(不昔物語廿三ノ廿二語)

せめては、今一たびかくおもふ事をもいはんなど思ふもかなふまじきかなしき。(俊成家の集の内)

人ハイミジクタケクモ力及バマ事也ケリ。(愚管抄六)

同じ御子豫王を立てられしも、又捨て、自ら位に即き給ふ。(神皇正統記三ノ三十八代)

ふりはへくだる道なればとかくいなび侍るもかなはずして。(宗碩佐野のわたり)

ナドニテモ之ヲ證スベシ。

抑モ此もハともども等ノとどノ省カレタルモノニシテ、其もハ感動詞ノもナレバ、とどヲ省クトキハ、反接ノ意ナキニ至ルヨシノ「廣日本文典」ノ説ハ如何アラン、若シ其説ノ如クナラバ、何故ニ終止形トニハ附カズシテ、連體形ニ附クニカ、又もノミニテハ、反接ノ意ナシト言ハレタレド。然も、少も、聊も、云々してもハ、シカレドモ、少シデモ、聊デモ、云々シタトテノ意ナルニ、若シ、此もヲ除カバ、忽チ反接ノ意明カナラズ、願フニ、此もハ、亦ノ意ノもニシテ、

一箇所當百夫不レ敵

國滅 不レ告レ敗勝 不レ告レ克

一日不レ見如三月

時のまもなくさめつらむ君はさぞゆめにだに見ぬれぞかなしき。とをつらの馬ならねども、君のれば、車もまに見ゆるものかな。

ノ類ノもト同一ニシテ、只名詞ニ附クト連體形ニツクトノ差ノミナラン。ソハスベテ連體形ハ常ニ名詞ニツク天爾乎波ヲ取りテ名詞狀トナルベキナレバ、もガ名詞ニ附キタル時ト同一ノ意ニテ、連體形ニ附クハ當然ノ事ナルヨリ考フレバ、此もハとどノ省略ニアラズシテ、名詞ニツク亦ノ意ノも、其受クルトコロノ詞ノ正反ノ意義ニ由テ、比較ノ意トモナリ、反對ノ意トモ

ナレルモノナルコト疑ナシ。故ニ中古文法ニ於テモ、コノ類ノヲ以テ、全ク連格ナリトシテ斥クベキニアラザルベシ。但シ中古ニ在リテハ、此モハ亦ノ意ニ用キタルガ、知ラズ識ラズニ、反接ノともどもノ意ノ輕キ場合ニ當ルともども出來タルモノニシテ、今日ノ如ク、亦ノ原意ヲ忘レテ、其意ノ輕重ニモ拘ハラズ、反接ノ意トシテ之ヲ用キルニ至レルモノトハ稍其趣ヲ異ニセリ。而シテ之ヲ全ク反接ノ意ニ使用スルニ至レルハ、何故ソト云フニといへどもとも云フハ、其義重クシテ餘リニ耳立ツ場合アルヨリ、之ヲ避クルガ爲メニ、右ノ反接ノ場合ノモヲ取ルモノアリテ、イツシカ今日ノ如ク總テノともどもノ場合ニ、用キルコトトナレルナラン。既ニ右ノ如ク當然ノ理由アリテ、漸次ニ其意ヲ轉化セルモノナルガ上ニ其習用ノ久シキコトハ白石、益軒等ハ勿論、古學者中殊ニ義門ノ如キモ往々ニ之ヲ用キ、現今ノ法令文、著書新聞雜誌ニ之ヲ用キルコトノ夥シキ、其新聞ノ何タルヲ問ハズ、取リテ之ヲ檢スレバ、一篇ノ論說中、二三個以上此モヲ見出サザルモノナシ。既ニ斯クノ如クナル以上ハ、ソノ語格ノ不合ハ姑ク之ヲ措キ、斷ジテ本項ノ如ク、此モヲ以テ正格ト定ムベキハ當然ノコトト云フベシ、或ハモヲ反接ニ用キルトキハ、常ノモト紛ルル恐アルガ上ニ、將然ト已然トノ區別ヲ滅却スル虞アリ、故ニ之ヲ禁ゼザル可カラズト云フ説モアラン。然レドモ形容詞ノ如キハ、既ニ連用連體二形ニヨリテ之ヲ區別スルコトヲ得レバ言フニ及バズ、動詞、助動詞ニ於テハ、既に、今、將に、若し、一旦等其他時ヲ示ス副詞ニ依テ、分明ニ之ヲ區別スルコトヲ得ベケレバ、毫モ難者ノ所謂將然已然ノ區別ヲ滅却シ、常ノモト紛ルル等ノ憂モナカルベシ。

以上述べた所だけに就いて順説及逆説に應じて假定並びに確定の條件を示す文語の接續助詞を配してみると次表の通りになる。

順説	假 定 條 件	確 定 條 件
	(未 然 形)ーば	(已 然 形)ーば

逆 説	(動、終止形)∨とも (形、未然形)∧とも	(已 然 形)∧ども
	(連 體 形)ーも	(連 體 形)ーも

なほ松尾捨治郎氏の「國語法論攷」(三六〇頁―三八八頁)中には「既定假定の呼應論を排す」といふ論がある。

五に、を、が

いづれも活用言の連體形に附いて、確定の條件を逆説的に表す接續助詞である。「に」「が」は文語にも口語にも用ひられるが、「を」は文語だけにしか用ひられない。この「に」「を」「が」が逆説的の條件を示すといふことに就いては異論がある。山田博士の「日本文法論」(六〇七頁)には次の如く見えてゐる。

「が」「に」「を」この三者は從來共に齟齬をあらはすものといはれてありしかど、決して然らざるなり。……………
 簾の内に矢をつまよる音のするがその矢の來て身に立つ心ちして。
 今日明日にても唐へ歸らむと思ふに君の來らむをまちつけてわたらむ。
 椎の木常磐木はいづれもあるををそれしもはがへせぬためしにいはれたるもをかし。
 これ等いづれも齟齬にあらずして俱存の事實なるは論なし。すべてこの助詞は前提後件共に事實なることを示すに用ひるなり。その齟齬的用法ある如く見ゆるは俱發俱存の事實間にたまくかゝる現象ありたるにて「が」「に」「を」の力によりて齟齬の意あらはれたるにあらず。

この點は、逆應・因果的順應の外に序接的順應を立てる説のあることに顧みても、重要な問題であつて、たとへ逆説的條件を示す接續助詞であるとしても、共存事實の序接的表示のあることには十分なる注意が拂はれなければ

ならぬと思ふ。

1 「に」の用例

大船の思ひたのみて、天つ水仰ぎて待つに、いかさまに思はしめせか、(萬葉集、一六七)

あき風に今か今かと紐ときてうら待ち居るに月かたぶきぬ。(萬葉集、四三一)

庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなくすめる月かな(新古今集)

世の中は我が身の上も苦しきに人の上さへそへてかなしき。

あれほど頼んでおいたに忘れてしまったのか。(口)

はやく天気になればよいに、雨ばかり降つてゐる。(口)

なほ次の「に」は「によりて」の意だと言はれてゐる。

夜の更くるに、急げや進め。(平家物語)

あまり憎きに、その法師をば先づ切れ。(同)

2 「を」の用例

雪とのみ降るだにあるを櫻花いかに散れとか風の吹くらむ。(古今集)

皆人は花の衣になりぬるをひとり頭に雪のけごろも。

待ちつけし花も咲けるを庭の梅のむすばむ實をば今はまつかな。

二つなき物と思ひしを水底に山の端ならで出づる月影。(古今集)

3 「が」の用例

既に絶え入り給ひしが、定業ならぬ命にてまた生き出で給ひけり。(保元物語)

木曾は越後の國府にありけるが、これを聞いて五萬騎にて馳せ向ふ。(平家物語)

はるく尋ね行きしが、折悪しく不在なりき。

運動はするが、あまり健康でない。(口)

字は上手だが、書は下手だ。(口)

顔は美しいが、心が曲つてゐる。(口)

日本は氣候もいが、風景もすぐれてゐる。(口)

あの本は僕も讀んだが、中々面白い本だ。(口)

私は知らないが、君は知つてゐるか。(口)

口語の「が」は右の外に、推量の助動詞について二つの事柄を列擧して、そのいずれもまだ成立しない條件として逆説的に假定する場合に用ひられることがある。

長からうが短からうが構はない。(口)

雨が降らうが風が吹かうが行くと言つたら行く。(口)

新聞だらうが雑誌だらうが病床で讀んではいけません。(口)

又、次の如く用ひられた「が」は、接続する下の語句が省略されてゐる結果、念を押す意味の終助詞に變つてゐるやうに見えるものである。これも口語に限られた用法である。

たしかにこの箱の中にしまつておいたのだが。(口)
無い筈は無いが。(口)

そんなものなら何處にでも賣つてゐませうが。(口)

「が」の下に餘情がひゞいて、その中に疑の意味も含まつてゐるやうに思はれる。

4 文語に於ける「に」「を」「が」は、同じ形の格助詞もあるから、格助詞の上の體言が現れて居ないであらうに活用言の連體形が表れてゐる場合を、**接續助詞**と混同してはならない。

いとやむことなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。(源氏物語、桐壺)
夜すでに明けはなれぬるを、知らざりき。

人がらのたをやぎたるに、強き心を強ひて加へたれば、(源氏物語、帯木)

右に就いては拙稿「語格と解釋の一關係」(國語・國文)昭和九年八月號) 參照。若し連體形の下に體言を加へることが出来るのであれば、その下にある「に」「を」「が」は接續助詞ではなくて格助詞と見なければならぬ。

中古の文章には屢々現れる形である。

六) 「ものを」ところが

これはいづれも口語にのみ用ひられる接續助詞で、活用言の連體形について確定の條件を逆説的に表すことは前述の「に」「を」「が」と同様である。「の」に「は格助詞」「に」に接續助詞「に」のついて出来たものであり、「ものを」は體言「もの」が形式語化して、それに接續助詞「を」の附いたものであり、「ところが」も體言「ところ」が形式語化して、それに接續助詞「が」の附いて出来たものである。前後の齟齬してゐない時同時的列叙に用ひられるのも文語と同様である。

1 「の」の用例

呼んでゐるのに返事もしない。(口)

大變むつかしいのに易々と出来上つた。(口)

2 「ものを」の用例

何も知らないのに偉さうな顔ばかりしてゐる。(口)

人が深切でするものをありがたいと思はぬ。(口)

世話などやかなくてもよいものをいらぬおせつかいばかりしてゐる。(口)

醫者でさへなほせぬものをしやうがあるものか。(口)

「ものを」の代りに「もの」を用ひることもある。同様の接續助詞と見るべきものである。

黙つてはゐるもの悲しきで一杯です。(口)

苦しいもの又たのしみなところもある。(口)

折角来たもののこれではしやうがない。(口)

この「ものの」は平安朝時代に用ひられた「ものから」「ものながら」と同意の「もの」と同語である。

空蟬の世の人ごとのしげければ忘れぬもののかれぬべらなり。(古今集)

君來むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まれぬもの戀ひつつぞふる。(伊勢物語)

なほこの外に、次のごとき「こと」も一見接續助詞の様に思はれるが、これは體言「こと」の下に格助詞「を」の附いたものとすべきである。

一人でも出来ることを五人もかゝつてゐる。(口)

言はなくてもいふことをしやべつてゐる。(口)

覺えれば覺えられることを勉強しないからいけない。(口)

3 「ところが」の用例

あの人はいくらやつたところが駄目だ。(口)

一生懸命讀んだところがつまらぬ本だった。(口)

昨日公園に行つて見たところが花はもう散つてゐた。(口)

左の「が」「ところが」は文の頭に用ひられてゐるので、**接續助詞**ではなく、**接續詞**に品詞が轉成してしまつてゐるのである。

旅人はその傍を通る度に嘲笑の聲を送つた。が、市九郎の心はその爲に須臾も撓むことはなかつた。(口)

彼は一生懸命努力した。ところが、誰もその努力を認めなかつた。(口)

これを次のやうに言ふと**接續助詞**になるのであるから、品詞を混同せしめないやうに注意する必要がある。

旅人はその傍を通る度に嘲笑の聲を送つたが、市九郎の心はその爲に須臾も撓むことはなかつた。(口)

彼は一生懸命努力したところが、誰もその努力を認めなかつた。(口)

(七) も、でも、でも

この「も」は係助詞の「も」でないのだから口語特有の接續助詞である。「でも」「でも」「でも」も共に口語だけの接續助詞である。山田氏の説によれば「この『も』は文語に用ひる『とも』『ども』『も』の特別に發展したものである。元來これらの『も』には反接の意味はないものであつたが、『とも』『ども』『も』の慣用が久しくなるにつれて、いつしか『も』にこの意のあるといふ意識が生じて、この『も』で反接の用をするに至つたものと考へられる。」(『日本口語法講義』一八二頁)といふことである。

1 「も」は單獨に用ひられて反接の意味を表すことはあまり多くはない。併し次の如き例は**假定の條件を逆説的に表してゐると見ることが出来る。**

いくら遅くも來年の春には歸朝します。(口)

あの人の足がどんなに早くもまだ到着してゐますまい。(口)

形容詞の連用形についてゐるのである。

2 「でも」は「も」が接續助詞「て」について出來たもので、**活用言の連用形について未成立の條件を逆説的に表すのである。**

いくら努力しても成功はむづかしからう。(口)

理由はたとへよくても實行は不可能でせう。(口)

誰にやらせてもこれ位より出來ない。(口)

どんなに褒められても慢心を起してはならない。(口)

「でも」は假定ばかりでなく確定にも用ひられる。次の「でも」は**確定の條件を逆説的に表してゐる例である。**

これ程待つても出て來ない。(口)

雨が降つても道はちつとも悪くならないね。(口)

あの人は病氣が治つてもまだ臥つてゐるらしい。(口)

なほ次は「でも」が上の活用言の語尾の音便で「でも」となつたものである。前に述べた係助詞又次に述べる「でも」と混同しないやうにする必要がある。

たとへ死んでも御恩は忘れません。(口)

君がいくら讀んでもあの本は解るまい。(口)

どんなに力を入れて嚙んでも嚙み切ることとはむづかしからう。(口)

いくら研いでも切れるやうにはなるまい。(口)

なほ山田氏の「日本語法講義」(一八三頁)では、次の例をあげて、

顔は人でも心は鬼だ。(口)

もとは君のでも賣れば人のものだ。(口)

今は穩でも安心は出来ぬ。(口)

この「も」は格助詞「で」の賓位を示すものに附屬して反接の用をしてゐると説いてある。反接の用をしてゐることは右に述べた1に當るので間違はないが、上の「で」は格助詞ではない。「人でも」「君のでも」の「で」は指定の助動詞「だ」の中止形であるし、「穩でも」の「で」は「穩だ」といふ形容動詞の中止形の語尾である。これは本講本項の1の部類に入るべき例である。

3 「でも」は活用言の終止形について未成立の假定條件を逆説的に表す。

見ないでも見たと同様によく分つてゐる。(口)

そんなことを言はないでも事はすむだらうに。(口)

(八) けれど、けれども

共に口語だけの接續助詞である。これはもと形容詞の已然形に文語の接續助詞「ど」「ども」を連ねたもの、たとへば、

道遠けれど峻しからず。

山高けれども登り難からず。

の如きものが、形容詞の語尾の「けれ」から中斷されて下の「ど」「ども」と結びついて獨立したものとされる。

而して「遠いけれども」「高いけれども」と形容詞の終止形につくやうになり、更に動詞にも助動詞にもひろく連ることになつたのである。

「けれど」「けれども」は共に文語の「ど」「ども」と同じ意味であつて、共に活用言の終止形について確定の條件を逆説的に表すのである。

一生懸命に覺えるけれどもすぐあとから忘れてしまふ。(口)

ことわるけれどもおして頼んだ。(口)

大分忙がしいけれども手傳つてあげよう。(口)

見たけれども何だか分らなかつた。(口)

毎日練習させるけれども一向上達しない。(口)

御役には立ちますまいけれどもお使ひ下さい。(口)

便利な處だけれども騒々しい。(口)

右の「けれども」の代りに「けれど」を用ひても意味は變らない。地方に依つては之を簡略にして「けど」といふが標準語ではない。

又「けれど」「けれども」が獨立して文の頭に使はれるやうになると、助詞ではなくなつて接續詞となるのである。助詞は決して獨立して文の頭に使はれることは無いのである。左の例は接續詞である。

春になつた。けれども、まだ暖くならない。(口)

時間が參りました。けれど、誰も集つてはをりません。(口)

右を次の如くいへば接續助詞となるのである。

春になつたけれどもまだ暖くならない。(口)
 時間が参りましたけれども誰も集つてはをりません。(口)
 品詞を混同しないやうに注意すべきである。

(九)から

文語口語ともに用ひられる格助詞の「から」が接續助詞となつて後には口語にだけ用ひられるに至つたものであらう。活用言の連體形について原因となる條件を順説的に示すことによつて上のものを下のものにむすびつける接續助詞である。

なまけてゐるから仕事か捗らないのだ。(口)

あまり可笑しいから笑つたのです。(口)

海が穏だから今日は出帆しませう。(口)

行く途中ですから御届けしませう。(口)

まだよく読んでゐないから内容は分らない。(口)

質問されるからよく読んでおきなさい。(口)

「から」は「に因つて」「故に」といふ意味があるから上のものを下のものの副詞的修飾語にする。併しこれを以て接尾辭とする説(「口語法別記」「大日本國語辭典」の説)には賛成出来ない。接尾語はある單語の下についてその單語と一單語になつてしまふもので單語以下のものである。單語以下のものが決して單語から出來てゐる文を接續する力は有つてゐないのである。

「から」の下に係助詞「は」若しくは「は」と格助詞「に」がむすびついて「からは」「からには」となり「上は」「

「以上」はの意味の一つの接續助詞となることがある。

會を開くからは立派にやらなければならぬ。(口)

もはや兩人が参らぬからは別に参る者もござるまい。(狂言、盗人連歌)

返事が來ないからには不承知にちがひない。(口)

見つけたからには咎めないでおけない。(口)

(10)で

格助詞「の」と格助詞「で」とが結びついて一つの接續助詞となり、口語にだけ用ひられるのである。「で」は格助詞本來の性質を失つてゐるから他の格助詞「の」の下に附くことが出來たのである。

活用言の連體形について「から」と同じく原因となる確定的條件を順説的に示すことによつて上の語句と下の語句とを結びつける用をなす。

一日立つてゐるので腰がいたくなる。(口)

あまり寒いので外出する氣にはならぬ。(口)

子供が丈夫なので何より安心です。(口)

時間が遅くなりましたので伺ひませんでした。(口)

ちつとも存じませんので失禮いたしました。(口)

長らく行かないので勝手が分らない。(口)

(11)

口語にだけ用ひられる接續助詞で、佐行變格活用「爲る」の中止形「し」から來たものであらう。活用言の終止形

に於いて、同時又は異時の列叙を示すことによつて上下の語句・文を接続する用をなす。

読みもするし書きもする。(口)

分量も多いしむつかしくもある。(口)

行つても見たいし内にもゐたい。(口)

酒も飲まないし煙草もきらひだ。(口)

下に「し」をもつた文が二つ以上重なり「……するから」「……ので」「……の意となつて順説的の條件を表すやうになる。

朝は早いし夜は遅いし暇がすこしもない。(口)

花は咲くし鳥は囀るし面白い春になつた。(口)

雨も降らうし風も吹かうし海上は難儀であらう。(口)

倒されるし踏まれるしつらい目にあつた。(口)

この「し」が否定・推量等の語の下に来ると、「ものを」とか「のに」とかかの意味を表すことになる。

お互に敵同士ではあるまいしそんなに罵詈するものではない。(口)

三つ子ではなからうしこれ位の理窟は分りさうなものだ。(口)

専門の學者ちやあるまいしむつかしい理由の分らう筈がない。(口)

(三)

文語にも口語にも用ひられる接続助詞である。活用言の連用形(但し「なり」「たり」といふ形には附かない)に附いて、ある動作・状態が終つて他の動作・状態に移ることを表すのが本来の意義であるが、他のいろ／＼の意に

も轉じて用ひられる。この「て」は本来は文語の完了の助動詞「つ」の連用形であるが、それが完了の原意を失つて接続助詞に轉成したのである。然るに、この「て」を本来の完了の助動詞の一活用として扱はうとする説がある。(山田孝雄博士が複語尾と見てをられるのも同考である。)併し、これは接続助詞と見るべきものであると思ふ。その理由として次の數項が挙げられる。

(1)「て」は本来の完了の助動詞としては接続することの出来ない形容詞に連ることが出来る。

眞小蘆の節の間近くて逢はなへば沖つ眞鴨の歎ぞ吾がする。(萬葉集、三五二四)

私は嬉しくてたまらない。(口)

(2)「て」は本来の完了の助動詞としては接続することの出来ない或る種の助動詞の連用形に連ることが出来る。

久方の雨の降る日を我が門に蓑笠きすて來る人や誰。(萬葉集、三一三五)

萬代にいまし給ひて天の下まをし給はね朝廷去らずて。(萬葉集、八七九)

そんな所へ行かなくてよかつた。(口)

併し、私は行きたくてたまらなかつた。(口)

(3)格助詞「と」又は「に」の下に附くことが出来る。

かたときのまどてかの國よりまうでこしかども。(竹取物語)

上へおはしますとてかくれたるかたに侍らひたまふ。(宇津保物語)

髪は少しいろにてこちたうはあらず。(狭衣物語)

尤も右の「にて」の「に」は指定の助動詞「なり」の中止形と見ることが出来るかも知れない。

(4)「て」は又助動詞としては接続することの出来ない或る種の副詞の下にもつくことが出来る。

身をうしと思ふに消えぬものなればかくも経ぬる世にこそありけれ。(古今集)
など。その人とは知らせじとはかくいたまへりしぞ。(源氏物語、夕顔)

(5)「て」はその上の語句・文を中止させるのでなく、一つの副詞的修飾語として下の語句・文に従属させるつとめを有つるのである。これ「て」が接続助詞となつてゐるからである。

風が吹いて二百十日らしい。(口)

右の文に於て「て」は上の「風が吹く。」といふ事實と、下の「二百十日らしい。」といふ事實とを單に結びつけるだけではなく、「風が吹くので二百十日らしい。」といふ條件の意味をも加へてゐるのである。

又右の「て」の下に「こそ」といふ係助詞を加へて、

風が吹いてこそ二百十日らしい。(口)

ともいへる。これはちやうど、

風が吹けばこそ二百十日らしい。(口)

といふ如く「ば」の下に「こそ」の加へられるのと似てゐる。これ即ち「て」が「ば」といふ接続助詞と同範疇の助詞であるからである。若し單なる中止の場合、

風は吹き、雨は降る。(口)

の「吹き」であればその下に「こそ」を加へる事は出来ないのである。且つ決して「風は吹き」は「雨は降る」を修飾してはゐないのである。

(6)動詞の連用形に「つ」の連つてゐる場合の中には、完了の意味の残存してゐるものも認められるが、同じ動詞の

連用形に連つてゐる場合でも、次の如く全く完了の意味を有つてゐないものも多いのである。即ち意義に於ても變化を來してゐるのである。

川を隔てて花を見る。

馬に乗つて運動する。(口)

右の「て」を意義の上からいくらかこじつけて考へても、完了の助動詞の連用形・中止形とは考へられないのである。完全なる接続助詞である。

松尾捨治郎氏は「國文法論纂」(一九六頁―二二二頁)及び「國語法論攷」(四二頁―四二二頁)の中の「て」についての章に於て「品詞の分類上より言へばは元來助動詞の連用形から出たものではあるが、決して純粹の連用法や中止法ではない。助動詞から分離させて天爾乎波若しくは助詞の中に入れるべき性質がある。意義の上から言へば助詞としての(1)時の前後を表はすが本體であつて、(2)ばの意、(3)どもの意、(4)中止法のないの同意、(5)程度の意、(6)との意などに用ひられる。」と述べて、「て」意義の轉化に就いて、「一體吾人が客觀の事實を主觀に移し、更に之を言語に移す時、人によつて其の事實の見方及び表はし方が違ふのは怪むに足らぬ。今こゝに『雨ふる事』と『風やむ事』とあるとして、之が文になつて表はるゝ場合に大凡左の五種あると思ふ。」

甲 雨ふり、風やむ。

○○ 並立的關係

乙 雨ふりて、風やむ。

○—○ 繼續的關係

丙 雨ふれば、風やむ。

○↓○ 因果的關係

丁 雨ふれども、風やむ。

○↓↑○ 反戻的關係

戊 雨ふるは、風やむなり。
雨のふる程に、風やむ。

◎ 包含的關係(從屬的關係)

此の五種の表現法は其の根本事實に於ては共通の點がある。その爲に此の五種の方法は動もすれば相互に代用されようとする。……此から推して考へればてを用ひた句（即ち乙）が甲・丙・丁・戊等の意を含むに至るといふことは怪むに足らぬ。」と論じいろ／＼例證を示して「て」の接續助詞である所以を明かにしてをられる。本講に於ても大體に於て松尾氏の所論に賛成を表したいと思ふ。

かくの如くにして、並立列叙の「て」、「ば」の意味を有する「て」、「ども」の意味を有する「て」或は「と」の意味を有する「て」の如きものがあることは、「て」が完了の助動詞の意味を失つてゐる實證と見るべきものである。

〔國語法論攷〕（三九六頁―四一九頁）參照

1 「て」の用例の概要を示しておかう。

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山。（萬葉集、二八）（推移繼續）

花が落ちて實が出来た。（口）（同）

冬は晝短くて夜長し。（並列、列叙）

彼はいつも人に笑はれて平氣でゐます。（口）（同）

雨降つて地固まる。（原因結果）

あかりが暗くてよく見えない。（口）（同）

八日さほる事ありて猶おなじ所なり。十四日の曉より雨降れば同じ所にとまれり。（土佐日記）（同）

抱きおろされて泣きなどはしたまはず。（源氏物語、松風）（「ども」の意）

心の中では思ひ出してゐて口には言へない。（口）（「の」に「の」の意）

この扇のたづぬべき故ありて見ゆるを、（源氏物語、夕顔）（副修化）

中々様かへて思さるゝに。（同）（同）

2 右の例中からもうかゞへるが、「て」が用言の中止法について用ひられてゐるか、副詞法について用ひられてゐるかといふことは、「て」の意義を究明する上に非常に大切な點である。しかも、その兩者のいづれとも見られる場合が少くはない。

玉梓の道行く人もひとりだに似てしゆかねば、（萬葉集、二〇七）

あれたるくづれより、池の水、影見えて月だにやどるすみか、（源氏物語、帯木）

をこがましようて人に見つけられんよりは、（源氏物語、手習）

をかしき額つきの透影、數多見えて覗く。（源氏物語、夕顔）

荒れたる門の忍草茂りて見上げられたる、たとしへなくこ暗し。（同）

これ等に類する「て」の用法に就いてはなほ十分の歸納的研究が必要である。後攷を俟つこととする。（國語・國文）昭和九年十一月號所載、吉澤義則博士「雨夜の品定の一節」參照）

3 なほ口語の「て」が「父が死んでかなしくないわけがない。」の如く、上の活用言の音便形のために影響されて「て」となる場合がある。意味は「て」に變りが無い。この現象は「て」がガ行・バ行・マ行・ナ行の四段活用に連る時に起る。然るにこの「て」が否定の助動詞「ない」の下に来る時にはその終止形からついて音便のためになく「で」となる變つた現象がある。この「で」もやはり「て」と同意の接續助詞である。格助詞「で」の轉化かも知れないがよくは分らぬ。（本講否定の助動詞の條參照）

ちつとも地震を知らないでよく眠つてゐました。（口）
本をよく見ないでいたづらばかりしてゐる。（口）

右の「で」を「て」に代へれば、上の終止形「ない」が連用形「なく」となること、次の如くである。
ちつとも地震を知らなく。よく眠つてゐました。(口)
本をよく見なく。いたづらばかりしてゐる。(口)

この「て」が今一つの否定の助動詞「ぬ」「ん」の下につく時も「で」となること次の如くである。
そんなに泣かんで早く帰りなさい。(口)
公式も知らんで試験がうかるものか。(口)

右の「で」は上の助動詞「ぬ」「ん」が撥音便の結果と同様の撥音であるから、その影響をうけて「て」が「で」となつたもので、變つた現象では無いと思ふ。

4 用言及び助動詞の未然形について打消の意味を表す「て」「すて」の約()に就いては否定の助動詞の條下で述べた通りである。(本講五五四頁参照) 接續助詞とも見られさうであるが合體語の助動詞としておいた。

5 「て」が動詞と補助動詞や補助形容詞とを接續することは既に述べた補助動詞や補助形容詞の例で分るであらう。
書いてしまふ 來て貰ふ 持つてゐる 買つておく 聞いてみる 尋ねて下さい
探してあげる 作つてない 落ちて候 承りて候

三して

これはサ行變格活用の動詞「す」の連用形「し」に接續助詞「て」の連つて出來た一語の接續助詞である。

秋去れば置く露霜にあへずして京師の山は色づきぬらむ。(萬葉集、三六九九)
獨りのみ着ぬる衣の紐解かば誰かも結はむ家遠くして。(萬葉集、三七一五)
正成は忠臣にいて正行は孝行なり。

風靜かにして浪穩かなり。

水天髣髴としてその境を知らず。

右の「して」はいづれも接續助詞「て」と同じ意味と用法に立つてゐるもので、最後の例を除く外は「て」と置き換へることの出來るものである。併し、形は「して」であつても、なほ「し」に動詞の意味を含んでゐるものは接續助詞に扱ふことが出來ない。

頼朝義經をして(使して)義仲を攻めしむ。

今にして(至りて)わが思慮の足らざりしをさとりぬ。

げにそのいるよりして(はじめて)あいなく見ゆるを。(枕草子)

刀して(を用ゐて)削る。

中將の君して(を)使として(を)聞えたまふ。(源氏物語、薄雲)

いひぼして(を用ゐて)もつつるとや。(土佐日記)

右の例は山田博士の「日本文法學概論」(六五五頁—六六六頁)に見える例であるが、いづれも動詞の意味があつて、その連續も體言又は格助詞の下に附いてゐるものである。同書には更に次の例をあげ、

秋深くして滿樹金よりも黄なり。

春の花にはほひ少くしてむなしき名のみ秋の夜のながきをかこてれば。(古今集、序)

こゝにして家やもいづくしら雲のたなびく山をこえてきにけり。(萬葉集、卷三)

これ等は「あり」の存在の意なるものの連用形を代表してゐるとしてある。この中「こゝにして」は別として、「深くして」「少くして」の二者は本講では動詞の代用とは見ずに接續助詞と扱はうと思ふ。同書(六五六頁—六五七

頁)では更に次の數例をあげて、

天地たゞ平和にして、四顧たゞ寂寞たり。

草は緑にして、花は紅なり。

水淼茫として、舟搖々たり。

次の如く説いてある。

然るにこゝにその「して」が更に一步を進めて陳述の力をあらはすのみに用ゐられ陳述の「あり」の連用形の代用をなすに至れるものあり。而してこれらは主として説明存在詞「なり」「たり」の連用形の代用として頻繁に用ゐらるゝものなり。元來この「なり」「たり」の連用形は複語尾につづくるのみにして連用形としての主たる用、即ち語を重ぬる用法は缺けたるものなるが、さる場合にはその「あり」の代りにこの「して」を用ゐることあり。さてその「なり」「たり」は本來「にあり」「とあり」の合體語なるが故に、かゝる場合にはその「に」「と」と「あり」とを分解せしめてその「あり」の地位に「して」を置き「にして」「として」といふ形をなさしめ、それを以て「なり」「たり」の連用形の代用をなすなり。

併し、本講では「平和に」「緑に」「淼茫と」はいづれも形容動詞の連用形(こゝでは中止形)と見て、それに接續助詞「して」が連つてゐるとするのである。(従つて「平和に」「緑に」「淼茫と」の中に「あり」の意は含まれてゐるとするのである。)

更に「にして」の約略されたといはれる「にて」の例として同書(六五八頁—六五九頁)に擧げられてゐる例の中、

春の夜は曇がちにて朧月おほし。

は本講では「曇がちに」といふ形容動詞の連用形(中止形)に接續助詞「て」のついたものと解し、

昔博士にて大學頭明衡といふ人ありき。

は、指定の助動詞「なり」の連用形(中止形)「に」に接續助詞「て」の連つたものと解し、

東京にて見たり。

筆にて書く。

は、「にて」を一語の格助詞と見るのである。

④ながら

活用言の連用形(形容詞は終止形)をうけて、上の事實と下の事實とが並び行はれること(相應しないことが同時に存在する場合も含む)を示す口語の助詞である。(尤も同様の用法が「方丈記」とか「増鏡」とかに見えないことはない。)これを接續助詞に入れることは山田博士も述べて居られる通り(「日本語法講義」一八四頁—一八五頁)問題である。本講でも假りにこゝに出しては置くが、或は副助詞に入れるべきものであるかも知れない。

外の事を考へながら話を聞いてゐる。(口)

物を食べながら新聞を讀んでゐる。(口)

歳はまだ若いながら中々しつかりしてゐる。(口)

苦しいながら辛抱してゐる。(口)

人に肩を揉ませながら眠つてゐる。(口)

何も知らないながら感心して聞いてゐる。(口)

この「ながら」の代りに「もて」「もつて」を用ひることがある。

泣きもて笑つてゐる。(口)

遊びもつて仕事が出来たものか。(口)

又この「ながら」が體言・用言・助動詞・副詞等種々の語について副詞的語句を形成することがある。この場合には活用言にはその連用形若しくは終止形からつく。

梨を皮ながらたべる。(口)

我ながら恥かしい。(口)

三日ながら雨天だった。(口)

寝ながら聞いてゐる。(口)

憚りながら御安心下さい。(口)

短いながら使ひませう。(口)

及ばずながら盡力致しませう。(口)

いつもながらお構ひ申しません。(口)

右の諸例に於ける「ながら」はいよいよ「接續助詞的の性質ではない。學者によつてはかういふ類の「ながら」を接尾語だと言つてゐる人もあるくらゐである。しかし全部接尾語とすることは出来ない。やはり副助詞の性質は幾分あるやうである。松下氏は「ばかり」「だけ」「ぐらゐ」等と共に副助辭の中に入れてをられる。〔標準日本語法〕三六九頁―三七〇頁)しかし、格助詞の上又は下に來るかといふにさういふ副助詞としての性質は有つてゐない。たゞ上の語句と結合して副詞的の働をする點だけは似てゐるのである。

この「ながら」に似た語に「がてら」といふのがある。

散歩がてら町まで行つて來た。(口)

人を訪ねがてら京都へ行きました。(口)

「ながら」と同じく「がてら」を接尾語とする説もある。さうすれば副詞の資格を與へる接尾語といふことになる。

〔五〕

文語及び口語に用ひられる。文語の完了の助動詞「つ」を二つ重ねて出來た合成語である。(語源に就いてはサ行變格活用の動詞「す」の疊語の轉訛であるとか、「且つ且つ」の略語であるとかの説がある。徳田氏は動詞「つつ」より生じたものと言つてをられる。〔國語法查説〕二五七頁―二五九頁) 動詞助詞の連用形について動作の反覆・繼續・同時に二動作の行はれること等を示す。接續助詞に入れることに就いては異論もあるが、暫らくこゝに入れておく。

朝日照る佐太の岡邊に群れるつつ吾が哭く涙やむ時もなし。(萬葉集、一七七)

うち霧らし雪は降りつつしかすがに吾宅の園に鶯鳴くも。(萬葉集、一四四一)

物ごとに秋ぞかなしきもみちつつうつろひゆくをかぎりと思へば。(古今集)

山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねに目をさましたつつ。(同)

私は悪いと知りつつやりました。(口)

理窟を言ひつつまちがへてゐる。(口)

後から押されつつ前進した。(口)

「つつあり」といふ形は(奈良朝時代にも)平安朝時代にも用ひられてゐて、決して西洋語の進行現在の譯語として發生したものではない。

この月の此間に來れば今とかも妹が出で立ち待ちつつあらむ。(萬葉集、一〇七八)

右の「つつあり」は「しつつつあり」の意でないとも考へられるが、次の「つつあり」は「しつつつあり」の意として

山田博士のあげてをられるものである。(『日本文法學概論』六〇五頁―六〇七頁参照)

御格子どもみなあけわたし御几帳たてつゝあるに。(宇津保物語)

女房十五人ばかり皆こききぬをうへにきてひきかへしつゝありしなかに。(枕草子)

第六節 並立助詞

並立助詞といふのは對等の關係に立つてゐる種々の語に附いてこれを接続せしめる助詞である。その對等の關係に立つてゐる語は體言であることが多いが必ずしも體言たることを要しない。時には體言の下に助詞のついてゐるものもあれば、副詞であることもある。最後の語句に附いたものは、對等關係で上の語を承けることは示すが下へは續かない。従來は格助詞の中で説かれたり、副助詞の中で説かれたり、接續助詞の中で説かれたりしてゐたのであるが、橋本進吉博士が「國語法要説」の中ではじめて特設されたものである。並立助詞又は對立助詞と名づけたがよからうと説いてをられる。これに屬する助詞は口語に多いのであるが、文語にも無いことはない。

(一)

文語にも口語にも用ひられる。従來は格助詞の中で説かれてゐたが、次の例でも分るやうに、その下に格助詞が附き得るのであるから、格助詞が重ならない點から言つても、格助詞に入れておくことは正しくない。

月と花とを愛す。

山口君と松本君とがたづねて來た。(口)

あそことここに疵がある。(口)

飛行機と自動車との優劣を論ぜよ。

九州からと四國からと集つて來た。(口)

春と秋といづれが好き。

古文では「と」は並列される語の各々の下に附けて省略しないのが常則であつたが、漸次之を省く用例を生じて、今日では誤解さへなければ並列の最終の語句の下には省いてもよいといふことになつて、「文法上許容ニ關スル事項」の十三で次の如く定められてゐる。

語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルテニは「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月と花。

宗教と道德ノ關係。

京都と神戸と長崎へ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書トノ列傳トヲ讀ムベシ。

例の「現行普通文法改訂案調査報告之一」(六二頁―六三頁)にはこの理由につき次の説明がある。
此格ニツキテハ「廣日本文典」ニ

與の意のとは幾處にても加ふるを則とす。然るに、二處以上なるを、常に略することあるは非なり。例へば「鹽酸と硫酸の鹽類を注ぐ」など記すときは、「鹽酸と硫酸の鹽類とを注ぐ」の意ともなり、「鹽酸の鹽類と硫酸の鹽類とを注ぐ」の意ともなる。「甲と乙の差の積」なども非なり、「甲と乙と丙との差の積」とか、「甲と乙丙の差との積」とかすべし。

然らざれば大なる過誤を生ずべし。「鈴木と井上の父を招く」などいふ文には、双方の父を招く意か、一は子にして一は父なるか判然せず、必ず、今一處とを加ふべし。「月曜及大祭日の翌日休刊」なども「月曜日と大祭日の翌日と休刊」とせねば火曜日の休刊とも解せらるべし。

トアリテ、實ニ國文中、中古ヨリ足利ノ季世ニ至ルマデニハ、最後ノトヲ省ケル例絶エテ然ク、唯歌モシクハ對偶ノ事物ヲ列舉セシモノニ一二見エタルノミ。

君とわれ妹せの山も秋くれば色かはりぬる物にてありける。(後撰集)

君と我猶白糸のいかにして憂節なくて絶えむとぞ思ふ。(蜻蛉日記)

月と日月と星日と星朝と夕。(漢和法式)

なりとなり、なれとなれ、なるとなる、なりなる、なれ、たるとるに尋云々。(連歌新式)

サレドモ徳川時代ヲ經テ今日ニ至リ、最後ノトヲ省クヲ以テ殆ド通例ノ事トナリタレド、實際ニ害アルコト極メテ稀ナリトス。故ニ本項ノ如ク制限ヲ加ヘテ之ヲ用キバ、對偶ノモノヲ列舉スル場合ナド、却テ益スルコト多カルベシ。

(二)や

文語にも口語にも用ひられる。従来は係助詞の中で説かれてゐたが何等係助詞としての特質のない並列の「や」がある。

わりごや何やと……帷子や布やなど。(蜻蛉日記)

皆人は花や蝶やと急ぐ日も我が心をば君ぞ知りける。(枕草子)

あそこの溝や堀やにぞ捨て置きける。(平家物語)

代数や幾何やむつかしい學科ばかりだ。(口)

あれやこれやと忙がしく暮しました。(口)

一日や二日の事ではない。(口)

質のよいのや悪いのやいろ／＼並べてある。(口)

(三)か

この場合にも最後の語句の下に「や」を省くことがある。

(三)か

文語にも口語にも用ひられるもので、従来は「や」と同様係助詞の中で説かれてゐたものである。

母か乳母か懷きて山林に逃げ隠れたらんはいかにせん。(保元物語)

なほ物はかなきを思へば、あるかなきかの心地ぞする。かげろふの日記といふべし。(蜻蛉日記)

鉛筆かペンを持つて來なさい。(口)

何とか彼とか理窟を言つてゐた。(口)

知つてゐるのか知つてゐないのかさへ知つてゐない。(口)

今日か明日かのうちに完成する筈だ。(口)

(四)やら

口語にのみ用ひる並立助詞である。従来は副助詞の中で説かれてゐたものである。

梅やら櫻やら一時に花が開いた。(口)

何やらかやらと忙がしいことばかりだ。(口)

泣くやら叫ぶやら大騒ぎだった。(口)

食はせるやら着せるやら随分世話なことだ。(口)

どうやらかうやら出来上つた。(口)

(五)

口語だけに用ひる從來は格助詞の中で説かれてゐたものである。

酒にビール、タバコにマツチ、新聞に雑誌。(口)

集つたものは子供に年寄だけだ。(口)

(六)

口語にだけ用ひる。從來は副助詞の中で説かれてゐた。

君になり僕になり相談すればよいのに。(口)

前は海なり後は山なり誠に形勝の地である。(口)

時間は少いなり問題はむづかしいなり困つてしまつた。(口)

(七)

文語にも口語にも用ひられる。從來は格助詞の中で説かれてゐたものである。

天地に悔しき事の世間の悔しき事は、(萬葉集、四二〇)

風雜り雨降る夜の、雨雜り雪降る夜は、(萬葉集、八九二)

白雲のたなびく國の、青雲の向伏す國の、(萬葉集、三三二九)

隱口の長谷の山、青幡の忍坂の山は、走出の宜しき山の、出立の妙しき山ぞ。(萬葉集、三三三一)

餘所の人は何とも目とまむまじき事の先づ昔來し方の事思ひ出で戀しと思ひ渡り給ふ心には、(源氏物語、若菜上)

猶音に聞きて思ひやる事の片はしなるよりも見苦しき事の目に見るはこよなく際勝りて知なりと思せば、(源氏物語、幻)

この世にあらむことの少し珍らしく眠たき醒めぬべからむこと語りて聞かせ給へ。(源氏物語、常夏)

唯山里のやうにいと静かなる所の人も行き交らぬ所に侍るを、(源氏物語、稚木)

何のかのと時間のかゝる事が多い。(口)

飲むの食ふのつてまるで餓鬼だ。(口)

暑い暑くないのつて話にならない。(口)

右にあげた文語の例は或は形修格を示す格助詞かとも思はれるが(國語國文)昭和九年十一月號所載、拙稿『の』に関する二つの疑問(参照)、口語の場合と同じく並立助詞とも見ることが出来はしまいか。

(八)

口語にだけ用ひる。前例の口語の「の」が指定の助動詞の「だ」に附いて一語の並立助詞となつたものである。

宗教だの哲學だのとむづかしい事ばかり論じてゐる。(口)

あゝだのかうだの勝手なことはかり言つてゐる。(口)

死ぬだの逃げるだのつまらぬ眞似をするな。(口)

(九)

口語だけに用ひる。文語の完了の助動詞「たり」の助詞化したものである。從來は助動詞として扱ふか、假りに接續助詞に入れるかせられてゐた。活用言の連用形につく。「だり」は音變化したものである。

病人は寝たり起きたりしてゐます。(口)

踊つたり跳ねたり子供等は愉快さうに遊んでゐる。(口)

飲んだり食つたり十分腹をこしらへた。(口)

打たれたり蹴られたりひどい目にあつた。(口)
読ませたり書かせたりしきりと教へてゐる。(口)

第七節 準體助詞

準體助詞といふ名稱も橋本博士の「國語法要説」に見えるものである。博士に従へばこの助詞は斷續の意味のないもので、この點は觀念語の體言と同等なのであつて、事實、體言にだけ附く助詞が、この種の助詞に附くのである。又他の辭の附き方も體言とほゞ同様なのである。而して、他の語に附いて或意味を加へて、全體として體言と同じ職能をもつたものを作る助詞なのである。従來は格助詞の中で、或は係助詞、或は間投助詞の中などで説かれてゐたものである。

(一)

文語にも口語にも用ひられるが、口語の方が多し。従來は格助詞の中で説かれて、體言の代用をすると言はれたものである。

人妻とわがのとふたつ思ふにはなれこし袖はあはれまされり。(好忠集)

飛行機の飛ぶのは速い。(口)

疑はれるのが困る。(口)

一番よいのを買ひます。(口)

行くのに時間がかかる。(口)

これはあの人のだ。(口)

これから歸るのです。(口)

(二)

この「の」はもし準體助詞として扱はないのであつたら、形式名詞とすべきものである。格助詞「が」「の」「に」「を」及び指定の助動詞「た」「です」等の附き得る所に體言の資格が現れてゐる。

口語にのみ用ひる。従來は間投助詞の中で説かれてゐたものである。疑問の語について「或人」「或物」「或場所」等の義を示す。

誰ぞにやらう。(口)

これぞといふほどのものがない。(口)

何處ぞの店へ丁稚にやらう。(口)

何ぞ無いか探してみよう。(口)

(三)

口語にのみ用ひる。従來は格助詞の中で説かれてゐた。種々の語について「以上」「以後」等の義を示す。

十圓からの値段です。(口)

五年からの日數をかけた仕事だ。(口)

さうなつたからは仕方がない。(口)

學校を卒業してからが心配なのだ。(口)

引き上げたからにはしつかりやらなければならぬ。(口)

(四)

文語にも口語にも用ひられる。従来は名詞又は接尾語と見られてゐたものである。程度を表すのである。橋本博士は次の例をあげてをられる。

三つほどが丁度好い。(口)

買つておくほどでもない。(口)

心配したほどの事もない。(口)

今までほど勉強しない。(口)

文語の例としては次の如きものが考へられる。

さほどの事もあらざるべし。

焚くほどは風がくれたる落葉かな。(二茶)

老ゆれば老ゆるほど益壯なり。

第八節 終助詞

終助詞といふ名稱も山田博士の命名にかゝるものである。従来は種々の語に附くもの、或は感動詞の一部へ入れられてゐたものである。その性質に就いては「終助詞は述語に關係あるものにして常に文句の終止にのみ用ゐらるゝものなり。これが名目も又其の内容も著者の創定にかゝる。これらは文句の述語に關係する點は係助詞に等しきものながら文句の結末にのみ用ゐらるゝを特徴とす。而して、その助詞は上に來るべき語に一定の約束を有し、又多くは陳述の性質に關するものにして命令・希望・感動等をあらはしつゝ終止するものなりとす。」(「日本文法學概論」五〇八頁、「日本文法論」六八〇頁の所論も大體これと同様である。)と言はれてゐる。右の論述から終助詞の特質をぬき出してみると

次の如くなる。

(一) 文の述語に關係のあること。(「日本文法論」では「この助詞どもはこれが附屬するによりて陳述が完結するものにして之を除き去る時は文の精神を變ずることあるものなり。この點に於いても次の間投助詞と大に異なる點あるなり。」と言つてある。)

(二) 文句の終末にのみ用ひられること。

(三) 命令、希望、感動等の意味を陳述の性質に與へること。

右の特質を次節に述べる間投助詞に比較してみると、

(一) 間投助詞は必ずしも文の述語には關係しないが、「物にもがなや」「ありけむかしな」の如く終助詞の下にもつて人首取らむ。」の如く間投助詞同様に文中に用ひられて文の述語に關係しないものもある。(勿論かゝる用法の「がな」は終助詞より移して間投助詞に入れなければならないが、かゝる點にも兩者の關係が見られる。)又、文の述語に關係する程度に於て終助詞と間投助詞との區別のない點は左の例(「國語法査説」二六一頁参照)でも明瞭であらう。(本講では徳田氏の用ひてをられる「さ」「よ」は終助詞とみて間投助詞とみない。)

「さ」は思ひつかし。

「よ」は思ひつ。

それはその管ね。

それはその管。

右の「かし」と「ね」とは文の述語に關係する點が全く同じである。この點では「かし」を終助詞とし「ね」を間投助詞とする理由は乏しい譯である。

(二) 終助詞も間投助詞も文句の終末につく事は同じ場合が勿論あるが、間投助詞は文の中間にも位置し得るのであつ

て、この點で文の終末にしか用ひられない終助詞と區別がある。橋本博士は、終助詞も間投助詞も文節の終に來るのは同じであるが、終助詞は言ひ切りの文節の終にあるもので、間投助詞は續く文節にも言ひ切りの文節にも附くとしてをられる。辭の分類表に於て「切れるもの」を二つに分け「文を終止する」(終助詞)もの、「文節の終に來る」(間投助詞)ものとしてをられるのはこのためである。

(三)終助詞の中にも感動を表すものがあるが、間投助詞の表さない命令とか希望とかの意味を表すものがあつて、全體よりいへば終助詞の方が表す意味が廣いのである。

孤立助詞と名づけて終助詞と間投助詞とを一括する安田喜代門氏の「國語法概説」の如き、或は感動助詞として兩助詞を含ましめる説の如きは、兩助詞の共通性に基點を置くものであつて、必ずしも不合理ではないと思はれるのであるが、區別の根本點に助詞と助詞との重用されるされ方の差異があるとすれば、それを理由にして兩助詞を區別すべきであらうと思ふ。それが即ち、山田博士の言はれる「上に来るべき語に一定の約束を有し」といふ語の意味であると思ふ。

以下終助詞各語の意義と用法とを概説しよう。

(一)が、がな

共に文語のみに用ひられる終助詞で希望を表す。これは上の語の種類に依つて左の如き種々の形になつて現れてゐる。

1 「しが」「しがな」

過去の助動詞「き」の連體形「し」と熟合したもので、動詞の連用形に附く。この時の「し」には過去の意味も回想の意味もない。今日の口語で「あつたらいゝになあ」といふ「た」に相當するものではあるまいか。意味を

つよめるにすぎない。萬葉集及び宣命中の「しが」は「てしが」と共に濁音にしないで「しか」「てしか」といふべきものであるといふ説が武田祐吉博士の「『しか』『てしか』考」(『國語と國文學』昭和六年七月號所載)に見えてゐる。

まそ鏡見しかと念ふ妹も逢はぬかも玉の緒の絶えたる戀の繁き此頃。(萬葉集、二三六六)

甲斐がねをさやにも見しがけなれなく横ほりふせるさやの中山。(古今集)

秋ならで妻よふ鹿を聞きしがなをりから聲の身にはしむかと。(金葉集)

2 「てしが」「てしがな」

完了の助動詞「つ」の連用形「て」に前項の「しが」「しがな」が熟合したものである。完了若しくは過去回想の意の無いことは前項で説明した通りである。動詞の連用形につくことも前項と變りがない。

龍の馬も今も得てしか青丹よし奈良の都に行きて來むため。(萬葉集、八〇六)

吾が屋戸の秋の萩咲く夕影に今も見でしか妹がすがたを。(萬葉集、一六二二)

耳無の山のくちなし得てしがなおもひの色の下ぞめにせむ。(古今集)

例のおどろくしきひじりのことば見はててしがな。(源氏物語、橋姫)

3 「にしが」「にしがな」

完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」に「しが」「しがな」の熟合したものである。動詞の連用形につく。

心うき深き山にも入りにしが(好忠集)

今はいかで見聞かすにありにしがなと思ふに。(蜻蛉日記)

4 「もが」「もがな」

係助詞「も」と熟合したものの。體言及び形容詞の未然形並びに打消の助動詞「ず」の連用形につく。

足の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼橋やます通はむ。(萬葉集、三三八七)

あしひきの山は無くもが月見れば同じき里を心隔てつ。(萬葉集、四〇七六)

しのぶ山忍びてかよふ道もがな人の心の奥も見るべく。(伊勢物語)

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため。(古今集)

やもせば消えをあらそふ露の世におくれさきだつほどへすもがな。(源氏物語、夕霧)

5 「もがも」「もがもな」

前項の「もが」の下に係助詞「も」とつて出来たものが「もがも」であり、「もがも」の下に更に終助詞「な」とつて出来たものが「もがもな」である。

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき兒もがも。(萬葉集、四一三四)

雪の色を奪ひて咲ける梅の花いま盛なり見む人もがも。(萬葉集、八五〇)

萬代に斯くしもがもと憑めりし皇子の御門の、(萬葉集、四七八)

河の上のゆつ磐群に草生さす常にもがもな常處女にて。(萬葉集、二二)

世の中は常にもがもな渚こぐ海士の小舟の綱手かなしも。(新勅撰集)

6 「もがなや」「もがもや」

前々項の「もがな」が間投助詞「や」を下に伴つて熟合したものが「もがなや」であり、前項の「もがも」が間投助詞「や」を下に伴つたものが「もがもや」である。

池にすむ我が名ををしのとりかへす物にもがなや人を恨みじ。(金葉集)

7 中古以後「がな」は次の如く用ひられて全く間投助詞に變つてしまつた。今日の口語にも用ひられる。

何がなとらせむと思へどもとらすべきものなし。(宇治拾遺物語)
かの君達をがなつれくゝなる遊びがたきになどうちおぼしけり。(源氏物語、橋姫)

二か、かな、かも

いづれも文語の終助詞である。體言及び活用言の連體形に附いて感動の意を表す。

苦しくも降り来る雨か神之崎狭野のわたりに家もあらなくに。(萬葉集、二六五)

慨たくも鳴くなる鳥か、この鳥も打ち止めこせね。(古事記)

浅みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か。(古今集)

見れど飽かずいましし君が黄葉の移りい行けば悲しくもあるか。(萬葉集、四五九)

久方の雨には著ぬをあやしくも吾が衣手は干る時なきか。(萬葉集、一三七一)

静けくも岸には波はよせけるか此の家通し聞きつゝ居れば。(萬葉集、一二三七)

白雲のこなたかなたにたち別れ心をぬさとくだく旅かな。(古今集)

悲しきかな、無常の春の風、忽ちに華の御すがたを散らし、情無きかな、分段の荒き浪、玉體を沈め奉る。(平家物語)

待たざりし秋は來ぬれど見し人の心はよそになりもゆくかな。(後撰集)

佐保山のはゝその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな。(古今集)

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。(同)

我が園に梅の花散る久方の天より雪の流れ来るかも。(萬葉集、八二二)
 あぶら火の光に見ゆる我が縷さ百合の花の笑まはしきかも。(萬葉集、四〇八六)
 霰うつあられ松原住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも。(萬葉集、六五)

三かし

文語のみに用ひられ、文の一旦終止した所について強く念を押す意を示す終助詞である。

とめ來かし梅盛りなる我が宿をうときも人は折にこそよれ。(新古今集)
 戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに。(伊勢物語)
 あはひめでたしかし。(源氏物語、胡蝶)
 常には少しそばくしく、心づきなき人の、折節につけて、出で榮えするやうもありかし。(源氏物語、帯木)
 やがて尼になりぬかし。(同)
 まことに神もうれしとおぼしめすらむかし。(枕草子)
 まことのうづはものとなるべきを取り出ださんには難かるべしかし。(源氏物語、帯木)
 おはやけの世繼とぞ言ひ侍りしかし。(大鏡)
 御心ざしのあやにくなりしぞかし。(源氏物語、桐壺)

四な

文語にも口語にも用ひられる。文の終止をなせる語に附いて感動の意を表す。文語では體言について述格を構成することもある。奈良朝時代では動詞・助動詞の未然形に附いて願望を表してゐる。平安朝時代にはこの用法はすたれた。

白浪の千重に來寄する住吉の岸の殖生ににほひて行かな。(萬葉集、九三二)
 筑波嶺の裾廻の田井に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉手折らな。(萬葉集、一七五八)
 世の中に猶ありあけのつきなくて闇に惑ふをとほぬつらしな。(後撰集)
 梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり。(萬葉集、八二〇)
 同じくは着せよな蟹の濡衣よそふるうちにくからずやと。(竹取物語)
 花の色は移りにけりな徒らに我が身世にふるながめせしまに。(古今集)
 人ことの頼みがたさは難波なる芦のうら葉のうらみつべしな。(後撰集)
 彼ぞ鞆の少將な。
 汝は平家の侍よな。
 あの人は大變よく走るな。(口)
 今日は大變寒いな。(口)
 それは大變なことでしたな。(口)
 本當にたまりませんな。(口)
 さううまうは行かないな。(口)

なほ右の外に口語の終助詞「な」には次の二つの用法がある。

1 動詞の連用形又は無活用動詞に附いて命令もしくは勧誘の意を表す。これは「なさい」の「さい」を省略したものであらうか。親しいものに用ふる語である。
 遊びにお出でな。(口)

一寸退いて見な。(口)
 早く歸つて來な。(口)
 御本を暫らく貸して頂戴な。(口)
 早く來て御覽な。(口)

2 動詞の終止形に附いて禁止の意を表すもので、文語の禁止の係助詞「な」が口語で終助詞となつたものである。主として目下の者に向つて言ふ時に用ひる。

頼んだことを忘れるな。(口)
 つまらない小説など決して讀むな。(口)
 二度とこんな所へ來るな。(口)
 馬鹿な眞似をするな。(口)

文語の次の如き用法にたてる「な」は間投助詞の性質があるやうに思はれる。露は袖に物思ふころはさぞなく必す秋のならひならねど。(新古今集)

(五) ね、に

奈良朝時代に用ひられた終助詞で、ともに動詞・助動詞の未然形に附いて他に對する願望を表す。「に」は「ね」の音の變つたものと見る説があり、又「ね」とは別個の終助詞と見る説もあるが、前項の「な」と思ひ合せると、「な、に、ぬ、ね」と四段活用にはたらいた願望の意を表す助動詞だつたのではあるまいか。完了の助動詞の條で述べた徳田氏の説などと思ひ合はせて暫く後致を俟ちたい。

1 「ね」の例

この岡に茶摘ます兒、家聞かな、名告らさね。(萬葉集、一)
 在嶺よし對馬の渡海なかに幣とりむけてはや還り來ね。(萬葉集、六二)
 吾が主の御靈賜ひて春さらば奈良の京に召上げ給はね。(萬葉集、八八二)
 次の例は「が」及び「そ」の下に「ね」の用ひられた例である。

蜻蛉羽にはほへるころも吾は著し君に奉らば夜も著るがね。(萬葉集、二三〇四)
 丈夫は名をし立つべし後の代に聞き繼ぐ人も語り續ぐがね。(萬葉集、四一六五)
 高圓の野邊の秋萩な散りそね君が形見に見つゝしぬばむ。(萬葉集、二二三三)
 難波潟潮干ありそね沈みにし妹が姿を見まく苦しも。(萬葉集、二二二九)

2 「に」の例

吾のみ聞けばさぶしもほととぎす丹生の山邊にい行き鳴かにも。(萬葉集、四一七八)
 久方の天道は遠しなほなほに家に歸りて業をしまさに。(萬葉集、八〇一)

(六) か

口語にのみ用ひられる。文の述語となつてゐる體言又は活用言の終止形に附いて疑問を表す。「か」は前にも述べたやうに、文語では勿論係助詞であるが、口語では一方は不定の意を表す副助詞となり、一方は疑問の意を表す終助詞となつてゐるのである。

これは何の本か。(口)
 今日三月三日か。(口)
 あそこへ來るのは誰か。(口)

君は僕の家へ何日に来るか。(口)
 新高山は富士山より何程高いか。(口)
 明日は朝から遊びに来ないか。(口)
 何時頃お伺ひ致しませうか。(口)
 會の始まるのは何時からか。(口)
 たつたこれだけか。(口)

次の例はこの「か」が反語を表してゐるものである。この時には多く「ことか」「ものか」「もんか」の形をとる。

それだから言はないことか。(口)
 美ましがるまいことか。(口)
 そんな馬鹿な話があるものですか。(口)
 そんなことがあるものか。(口)
 僅かの費用で何が出来るものか。(口)
 なに悲しいものか。(口)
 紹介なしに行つても見せるものか。(口)

(七)え

口語のみに用ひられるもので、文語の係助詞「や」の終止に用ひられるものの音の轉化であらうと言はれてゐる。
 疑問の意を軽く表す。助動詞「た」「だ」「です」及び助詞「か」の下に附く。

そこにゐるのは誰だえ。(口)

その包の中の物は何だえ。(口)
 それは何ですえ。(口)
 例の事件の結果はどうだつたえ。(口)
 そんなに面白かつたかえ。(口)
 それでいゝかえ。(口)

(八)ぜ

口語のみの終助詞。活用言の終止形に附いて念を押し確める意味を表す。

もうやがて来るぜ。(口)
 奈良は非常に静かだぜ。(口)
 今度の芝居は大變面白いぜ。(口)
 さあお祭の行列がやつて来たぜ。(口)
 今度はうまくやらうぜ。(口)
 何と言つても承知しないぜ。(口)

(九)とも

口語のみの終助詞。活用言の終止形に附いて、「言ふまでもない」といふ確めの意を表す。

三里ぐらゐる歩けるとも。(口)
 それは面白いととも。(口)
 勿論大丈夫ですとも。(口)

それにちがひなからう。さうですとも。(口)

105

口語のみの終助詞。強めを表す。

それは何だい。(口)

それを貰つたのは僕だい。(口)

一體君は誰だい。(口)

これから出かけるんだい。(口)

さうかい。(口)

110

口語のみの終助詞。文語の格助詞「の」から轉じたものであらう。活用言の終止形（或は連體形か）もしくは他の助詞について念を押すか、餘情を添へるか、疑問を表すかする。

1 念を押すもの

何處へ行つても大變暑い。(口)

何といふ美しい花です。(口)

この場合には「の」の下に間投助詞「ね」を加へて「のね」として用ひることも多い。

2 餘情を添へるもの

びつくりする程よく走る。(口)

これは本當に丈夫です。(口)

兄さんはいつでも私を使にやらせるの。(口)

私も行きたいの。(口)

あの人も来るらしいの。(口)

この場合には「の」の下に間投助詞「よ」を加へて「のよ」として用ひることが多い。主として婦人語である。

3 疑問を表すもの。尤もこの場合は多く上に疑問を表す語があるが、疑問の語がない場合もある。

あなた何處へ行くの。(口)

そんなことして何をなさるの。(口)

どんなに美しいの。(口)

いつからお出けなされるの。(口)

どうするとそんなに褒められるの。(口)

澤山入るの、入らないの。(口)

115

口語のみの終助詞である。體言又は活用言の終止形・命令形・終助詞「な」及び「の」、格助詞・副助詞などの下について、指示を確かにし、又感動の餘情を添へる。文語の「よ」は間投助詞と見るべきものである。

1 體言についてあるもの

これは箱よ。(口)

手紙を出したのは私よ。(口)

知れた事よ。(口)

2 活用言の終止形についてあるもの

今度は私が打つよ。(口)
 槍岳は中々高いよ。(口)
 今日は波が穏かだよ。(口)
 君の兄さんから詳しく聞いたよ。(口)
 何、つまらないことですよ。(口)
 そんな事があるかも知れないよ。(口)
 それはさうでせうよ。(口)

3 活用言の命令形についてあるもの

歸りには寄れよ。(口)
 珍しいお土産を買つて来いよ。(口)
 早く仕事を始めろよ。(口)
 ごめんなさいよ。(口)
 上二段活用・下二段活用・サ行變格活用等の命令形は、例へば「起きよ」「教へよ」「せよ」の如く命令形そのものに「よ」を有つてゐるから、更に「よ」をつける事をしない。しかし四段活用或はその他上一段・下一段・サ行變格活用等でも、語尾に「ろ」を有つた今一つの命令形には、この「よ」をつける事が出来るのである。
 早く起きろよ。(口)
 うまく受けろよ。(口)

一生懸命に勉強しろよ。(口)
 前にも動詞の條下で述べた通り、命令形の「よ」「ろ」はもとはこの間投助詞の「よ」「で」であつたのだらうが、今はこれが動詞の語尾化してしまつてゐるのである。語尾化してゐればこそ「ろ」の下にも更に「よ」がつき得るのである。

4 終助詞「な」の下についたもの

今度は怠けるなよ。(口)
 もう忘れなざるなよ。(口)
 注意して怪我するなよ。(口)

5 省略された叙述の下についてあるもの (そのため終助詞・格助詞・副助詞等についてある。)

そんな馬鹿なことは無いのよ。(口)
 でも、あんな事を言ふからよ。(口)
 ほんの少しばかりよ。(口)
 それはさうよ。(口)

口語の「よ」は之を時として長く延ばして「よう」と言ふことがある。標準語ではないがこのために強める意味が加はるのである。一種の甘え言葉である。

早く来て頂戴よう。(口)
 これを買つて下さいよう。(口)
 何を泣いてゐるのよう。(口)

よう、買つて頂戴つたら。(口)

右の文の頭へ来た「よう」は修辭的に倒置されたものである。感動詞化してゐる。

(三)

口語だけの終助詞。體言、活用言の終止形、文の終止に用ひられた助詞、その他副詞等について、軽く念を押して指示する(或は軽く言ひはなすと「口語法」ではいふ)意を表す。

1 體言についたもの

どうなるか、それが問題さ。(口)

知れた事さ。(口)

僅の間さ。(口)

そこが不思議さ。(口)

来たのは彼さ。(口)

僅かに三人さ。(口)

2 活用言の終止形についたもの

そのまゝにしておくさ。(口)

それで丁度いゝさ。(口)

私だつて行かれるさ。(口)

私だつて行きたいさ。(口)

出来ても出来なくてもやらせるさ。(口)

それは昨日父が買つてくれたさ。(口)

3 文の終止に用ひられた助詞の下についたもの

そんなでもなかつたとき。(口)

何を勉強してゐたのさ。(口)

それを以前から知つてゐればこそさ。(口)

去年の春東京で別れたときさ。(口)

あなた何處へ行つたの。買物にさ。(口)

なんでもよいわさ。(口)

右の例中には「さ」の上にある語の省略されてゐると思はれるものもある。

4 副詞についたもの

澤山あるか。ほんのすこしさ。(口)

いや一寸さ。(口)

5 次の如き用法は間投助詞の性質を示してゐるもので、かゝる用法の「さ」だけは間投助詞に入れるべきであるかも知れない。

それがさ、うまく行かないんだよ。(口)

さうしてさ、たうとう失敗してしまつたよ。(口)

何さ譯はないよ。(口)

第九節 間投助詞

間投助詞は感動助詞又は詠歎助詞と言つてもよい。語勢を加へ、語調を整へ、或は餘情を添へ感動の意を示すに用ひられる助詞である。文節の終ならば、文の終止した所でなくても付き得るのであるから、そこに間投の語の意味が生きてゐる。従つてこれを文中から取り去つても全體の文意にさほどの影響は與へない。例へば、

言ひつけられた事を忘れるな。(口)

頼んだ事を忘れたな。(口)

の二者を比較してみると、前者は禁止の意を表はす終助詞「な」であつて、之を取り去つてしまへば「言ひつけられた事を忘れる。」となつて意味が全く違つてしまふが、後者は餘情を添へるにすぎない間投助詞「な」であるから、之を取り去つてしまつても意味に前者ほどの相違は來さないのである。勿論之を取去つたがために餘情がなくなつて、その結果「頼んだ事を忘れたな。」が他人に向つて言つた語であつたのに、「な」を取つた「頼んだ事を忘れた。」が獨白であるのか他人に向つて言ふのか不明になるといふ嫌はある。併し禁止の意が無くなるのとは大いに趣を異にしてゐると思ふ。なほ間投助詞は文中に於ける位置が終助詞その他に比して多少自由である。

今忙がしいから邪魔をするな。(口)

今日はな大變忙がしいんだ。(口)

前者の「な」は終助詞であるから、必ず文の終止にならなければならないが、後の「な」は間投助詞であるから文末にでも文中にでもつき得るのである。「ね」といふ間投助詞などにはこの性質が一層よく表れてゐる。併しその位置が比較的自由であるからと言つて無規則的に何處へでもつき得るのではない。活用言につく時には自らその要求す

る活用形があり、又、形式語である助詞の本性からして他の品詞の上若しくは文の頭などに立つ事は絶対に無いのである。

間投助詞を従來感動詞の中に入れてゐたものもあつたやうだが、間投助詞は形式語であるから、觀念語である感動詞と同一には論ぜられない。感動詞は獨立して文の頭に立ち得るが、間投助詞は決して文の頭には立ち得ない。これ助詞は獨立性を有つてゐないからである。若し間投助詞が感動詞の中に入るのならば、接續助詞は接續詞に入るといふやうな不合理に陥るのである。(芳賀博士の「明治文典」では間投助詞は助詞の中に入つてゐる。)

次に間投助詞の意義と用法を概説しよう。

(一)よ

文語の間投助詞である。口語の「よ」の終助詞であることは前節で述べた通りである。體言についてそれを呼掛語や感動語たらしめ、或は述語の一部となり活用言の連體形及び命令形に附いて、軽く抑へ、指示を確かにし、餘情を添へる等の用をなす。又、格助詞・係助詞・接續詞等の下に附いて同様の意味を表すこともあるし、修飾語の下に附いて感動の意を表すこともあるなど自由な用法をもつてゐる。かういふ點にも終助詞と間投助詞との差を見るべきである。

1 體言に附いてゐるもの

富士山は三國一の名山よ。

吾こそは源氏の嫡流よ。

少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。(枕草子)

みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よ乾きだにせよ。(古今集)

2 活用言の連體形に附いてゐるもの

御格子を苦しきに急ぎまゐりて闇に惑ふよ。(源氏物語、東屋)
にくげなる調度の中にも一つよき所のまもらるよ。(枕草子)
かすかに心細き御すまひに年さへ隔りぬるよと淺ましく思さる。(増鏡)
春の野に生ふるなきなの佗しきは身をつみてだに人の知らぬよ。(拾遺集)

3 活用言の命令形に附いてゐるもの

文はよも見給はじ詞にて中せよ。(大和物語)
馬強からむ若黨共、馳せ寄せて蹴散らせよ。(平家物語)
忘れて待ち給へよ。(源氏物語、空蝉)

4 各種の助詞に附いてゐるもの

我が妹子がしぬびにせよと著けし紐絲になるとも我は解かじとよ。(萬葉集、四四〇五)
去にし安元三年四月二十八日かとよ。(方丈記)
來なむ吾背子懇にな戀ひそよとぞ夢に告げつる。(萬葉集、四〇二一)
まろは更に物言はぬ人ぞよ。(堤中納言物語)
籠もよみ籠持ち、ふぐしもよみふぐし持ち。(萬葉集、一)
いと心うくつらき人の御様見習ひたまふなよ。(源氏物語、濡標)

5 完了の助動詞「つ」の運用形「て」の下に附いてゐるもの

久方の天の河原の渡守君渡りなばかちかくしてよ。(古今集)
今より後もたゞかやうにしなさせ給ひてよ。(源氏物語、總角)

6 修飾語の下に附いてゐるもの

あらたまの年の經ぬれば今しはとゆめよ吾が背子吾が名告らすな。(萬葉集、五九〇)
少きよ道に逢はさば。(萬葉集、三八七五)

(II) 七

文語にも口語にも用ひられる間投助詞である。その意義用法は「よ」に似て、軽く語調を整へると共に感動の意を表す。

1 體言に附いてゐるもの

げに面白の景色や。
これやこの大和にしては我が戀ふる紀路にありとふ名に負ふ勢の山。(萬葉集、三五)
吾妹子や吾を忘らすな石の上袖布留河の絶えむと思へや。(萬葉集、三〇一三)
げにあが君や、をさなの御物いひや。(源氏物語、寄生)
又立歸りて、頼賢よ、頼仲よ、いふべき事あり、歸れと宣へば、(保元物語)
太郎や、一寸入らつしやい。(口)
坊や、いゝ子だからねんねしな。(口)「坊や」「姉や」「婆や」「爺や」の「や」は接尾語化してゐる。
古池や蛙飛びこむ水の音。(芭蕉)

菊の香や奈良には古き佛達。(同)

2 活用言の終止形もしくは一旦意味の終止してゐる所に附いてゐるもの

あはれいと寒しや。(源氏物語、夕顔)

悲しや、悔しや。

韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ來ぬや母なしにして。(萬葉集、四四〇一)

すべて神の社こそすて難くなまめかしきものなれや。(徒然草)

吉野の花も既に咲きたるぞや。

あまりの事に物も覚えぬぞや。

これは大變美しいや。(口)

僕はそんなこと知らないや。(口)

さあ、みんなで出かけようや。(口)

3 動詞の命令形に附いてゐるもの

打てや、懲らせや、敵國を。

飲めや、歌へや。

見よや、人々、美しき自然の様を。

早く來いや。(口)

すぐ仕度をしろや。(口)

4 修飾語の下に附いてゐるもの

奥へ行き邊に行き今や妹がため吾が漁れる藻臥東鮒。(萬葉集、六二五)

げにや人の誠は天地をも動かすものなり。

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしるに衣片しきひとりかも寝む。(新古今集)

さを鹿の伏すや叢見えすとも兒ろが金門よ行かくし好しも。(萬葉集、三五三〇)

次の如きはみな形修飾語と被修飾語との間に置かれた「や」である。

大原や小塩の山

天飛ぶや輕の路

押照るや難波

更科や姥捨山

高知るや天の御蔭

石見のや高角山

近江のや鏡の山

天知るや日の御影

天照るや日

5 感動詞の下に附いてゐるもの

すはや、大軍の攻め寄せたるぞ。

いでやこの世に生れては願はしかるべき事こそ多かめれ。(徒然草)

やよや待て山郭公ことづてむわれ世の中に住みわびぬとよ。(古今集)

神さふと不欲にはあらずはたやはた斯くして後にさぶしけむかも。(萬葉集、七六二)

(三)

文語のみに用ひられる。係助詞の「ぞ」に似た所があつて、上の語にや、強い調子を加へる語である。文の中にも用ひられて決して文の終止に用ひられることはない。格助詞の代理をしたり、格助詞の上下に位し、係助詞の上にもつき、修飾語の下にもつく。奈良朝時代に最も榮えた助詞である。

1 主語の下に附いてゐるもの

そ。し。恨。め。し。秋。山。吾。は。 (萬葉集、一六)

王。匣。覆。ふ。を。安。み。明。け。て。行。か。ば。君。が。名。は。あ。れ。ど。吾。が。名。し。惜。し。も。 (萬葉集、九三)

信。濃。な。る。千。曲。の。河。の。さ。ざ。れ。し。も。君。し。ふ。み。て。ば。玉。と。拾。は。む。 (萬葉集、三四〇〇)

2 格助詞の代理をしてあるもの

斯。く。ば。か。り。戀。ひ。つ。ゝ。あ。ら。ず。は。高。山。の。磐。根。し。枕。き。て。死。な。ま。し。も。の。を。 (萬葉集、八六)

ま。な。か。ひ。に。も。と。な。か。り。て。安。寝。し。な。さ。ぬ。 (萬葉集、八〇二)

筑。波。嶺。の。新。桑。ま。よ。の。絹。は。あ。れ。ど。君。が。御。衣。し。あ。や。に。着。欲。し。も。 (萬葉集、三三五〇) (「御衣」は主語とも見られる)

3 格助詞の下に附いてあるもの

ほ。の。ぼ。と。明。石。の。浦。の。朝。霧。に。島。が。く。れ。行。く。舟。を。し。ぞ。思。ふ。 (古今集)

生。き。と。し。生。け。る。も。の。い。づ。れ。か。歌。を。よ。ま。ざ。り。け。る。 (同)

丈。夫。と。思。へ。る。我。も。草。枕。旅。に。し。あ。れ。ば。思。ひ。や。る。た。づ。き。を。知。ら。に。 (萬葉集、五)

4 格助詞の上にあるもの

一。文。字。を。だ。に。知。ら。ぬ。者。し。が。足。は。十。文。字。に。ふ。み。て。ぞ。あ。そ。ぶ。 (土佐日記)

5 係助詞の上にあるもの

こ。れ。は。物。に。よ。り。て。ほ。む。る。に。し。も。あ。ら。ず。 (土佐日記)

必。ず。し。も。否。定。す。べ。き。に。あ。ら。ず。

6 動詞の連用形と動詞との間にあるもの

う。る。は。し。妻。と。語。ら。は。ず。別。れ。し。來。れ。ば。 (萬葉集、三二七六)

う。る。は。し。と。思。ひ。し。思。は。ば。下。紐。に。結。ひ。つ。け。も。ち。て。や。ま。す。偲。ば。せ。 (萬葉集、三七六六)

山。に。も。野。に。も。ほ。と。と。ぎ。す。鳴。き。し。と。よ。め。ば。 (萬葉集、三九九三)

7 助動詞の下にあるもの

咲。け。り。と。も。知。ら。ず。し。あ。ら。ば。默。も。あ。ら。む。こ。の。山。吹。を。見。せ。つ。ゝ。も。と。な。 (萬葉集、三九七六)

8 修飾語の下にあるもの

世。の。中。は。戀。し。し。げ。し。る。や。か。く。し。あ。ら。ば。梅。の。花。に。も。な。ら。ま。し。も。の。を。 (萬葉集、八一九)

山。川。を。清。み。さ。や。け。み。う。べ。し。神。代。ゆ。定。め。け。ら。し。も。 (萬葉集、九〇七)

明。日。香。川。黄。葉。流。る。葛。城。の。山。の。木。葉。は。今。し。散。る。ら。し。 (萬葉集、二二一〇)

(四)

「や」に比して重く調子を添へる助詞だといはれてゐる。文語のみに用ひられる古い語である。體言にも用言にも助詞にも附く。

1 體言の下につくもの

あ。な。に。や。し。え。を。と。こ。を。あ。な。に。や。し。え。を。と。め。 (古事記)

ね。も。こ。ろ。に。思。ふ。吾。妹。を。人。言。の。繁。き。に。よ。り。て。よ。ど。む。頃。か。も。 (萬葉集、三一〇九)

足。引。の。山。よ。り。出。づ。る。月。待。つ。と。人。に。は。言。ひ。て。君。待。つ。吾。を。 (萬葉集、三二七六)

紫。草。の。に。は。へ。る。妹。を。憎。く。あ。ら。ば。人。孀。ゆ。ゑ。に。吾。戀。ひ。め。や。も。 (萬葉集、二二)

夜。並。べ。て。君。を。來。ま。せ。と。ち。は。や。ぶ。る。神。の。社。を。祈。ま。ぬ。日。は。な。し。 (萬葉集、二六六〇)

今。更。に。何。を。か。念。は。む。打。磨。き。情。は。君。に。よ。り。に。し。も。の。を。 (萬葉集、五〇五)

2 活用言の下に附くもの

今よりは城の山道はさぶしけむ吾が通はむと念ひしものを。(萬葉集、五七六)

君が行き日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ。(萬葉集、九〇)

春のうちの樂しき終へば梅の花手折りを來つつ遊ぶにあるべし。(萬葉集、四一七四)

渡守舟わたせをと呼ぶ聲の至らねばかも楫聲のせぬ。(萬葉集、二〇七二)

生ける者遂にも死ぬるものあれば此の世なる間は樂しくをあらな。(萬葉集、三四九)

ほととぎすここに近くを來鳴きてよ過ぎなむ後にしるしあらめやも。(萬葉集、四四三八)

遂に行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを。(伊勢物語)

草枕旅行く君と知らませば岸の埴土にははさましを。(萬葉集、六九)

ほととぎす伺ひ通せらば今年経て來向ふ夏は先づ鳴きなむを。(萬葉集、四一八三)

3 他の助詞の下に附くもの

人はいさわればなき名のをしければ昔も今も知らずとをいはむ。(古今集)

別れなばうら悲しけむ吾が衣したにを著ませ直に逢ふまでに。(萬葉集、三五八四)

4 なほ次の如き「を」は格助詞の「を」と見るべきか、間投助詞の「を」と見るべきか未だ遽に決定し難い。下に

ある「……み」の語性を先に決する必要がある。最近は前説が多いやうにも思はれるがなほ十分の研究が望ま

れてゐる。(本位田重美氏「形音詞の關係につく探見」に就いて「『帯』昭和十一年十月「吉澤博士選定論文特輯」所載「参照

采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く。(萬葉集、五一)

春の野に葦つみにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける。(萬葉集、一四二四)

(五)ろ

明日香河ゆく瀬を早みはやけむと待つらむ妹の此の日くらしつ。(萬葉集、二七一三)

奈良朝時代に用ひられた間投助詞で、單に語調をととのへるために用ひられるものである。

むろがやの都留の堤の成りぬがに兒ろは言へども未だ寢なくに。(萬葉集、三五四三)

藤原の大宮づかへあれづくや處女がともはともしきろかも。(萬葉集、五三)

草枕旅の丸寢の紐絶えば我が手と附ける此の針持し。(萬葉集、四四二〇)

荒雄らは妻子のなりをば思はずろ年の八歳を待てど來まさず。(萬葉集、三八六五)

伊勢の海ゆ鳴き來る鶴の音とろも君が聞さば吾戀ひめやも。(萬葉集、二八〇五)

(六)ゑ

この「ろ」に就いては新村出博士の「東方言語史叢考」中の「東國方言沿革考」に詳細な説明が見えてゐる。

これも古く用ひられた音調をととのへる間投助詞である。

山の端に味鬼群騒ぎ行くなれど吾はさぶしゑ君にしあらねば。(萬葉集、四八六)

思ふゑに逢ふものならば暫くも妹が目離れて吾居らめやも。(萬葉集、三七三一)

上つ毛野佐野のくくだちをりはやし吾は待たむゑ今年來すとも。(萬葉集、三四〇六)

垂乳根の母に知らえず吾が待たる心はよしゑ君がまにまに。(萬葉集、二五三七)

よしゑやし浦はなくとも、よしゑやし潟はなくとも。(萬葉集、一三二)

(七)ぞ

口語だけの間投助詞で文語の係助詞から轉化したものである。従つて係助詞の性質として主格につき、格助詞の代

理をなし、又副詞につく等の事があるが、格助詞の上に来るところに間投助詞の性質を表してゐるのである。(係助詞は格助詞の下に附いて決して上に用ひられることがない。)活用言につくときはその終止形からする。「ぞ」は上の語を抑へて強く指示する意を表はす。

1 主格についてゐるもの

抽出の中に何ぞ有るだらう。(口)

誰ぞ手傳に来て呉れないか。(口)

2 格助詞の代理をしてゐるもの

誰ぞ手傳に頼んで来よう。(口)

休暇中に何ぞ讀まう。(口)

何ぞ探して来ませう。(口)

3 格助詞の上にあるもの

今日は誰ぞが来るでせう。(口)

これでも何ぞの足しになるだらう。(口)

こんなもの誰ぞにやつてしまへ。(口)

これだけで何ぞを買つておいで。(口)

長い休みだったがこれぞといふ仕事も出来なかつた。(口)

お前など何處ぞへ行つてしまへ。(口)

見つからなければ何ぞで代りにしておかう。(口)

以上123ともその附いのる語が代名詞に限られてゐることに注意を要する。又3に於ては決して格助詞の上に附くことがない。

4 副詞についてゐるもの

ついで逢つたことがない。(口)

5 活用言の終止形についてゐるもの

今日は仕事にとりかゝるぞ。(口)

この問題は中々むづかしいぞ。(口)

さあ雨が降り出して来たぞ。(口)

だまつて出してはいけませんぞ。(口)

あまり亂暴に扱つてはすまいぞ。(口)

そんなことをすると父さんに叱られるぞ。(口)

行くなら今日だぞ。(口)

暴風雨が起るらしいぞ。(口)

(八) な

口語の「な」は終助詞として用ひられる外、間投助詞としても用ひられる。種々なる助詞の下に附いて感歎的に餘情を添へる用をなす。「なあ」と長く言ふ時には餘情を多くする。

誰も知らないからな。(口)

どちらにしてもな、困りますよ。(口)

それにな、雨まで降つて来たのだよ。(口)
 私はな、ちつとも構はないのだけれど。(口)
 これをな、はやく始末して貰ひたいんでね。(口)

(九) ね

口語にだけ用ひられる間投助詞。親密の意を表すことによつて餘情を添へるのである。その用ひられ方はかなり廣く、呼格の語・主格の語・格助詞・副助詞・係助詞・條件を示す語・活用言の終止形で文の終止となつてゐるもの等の下に附く。

1 呼格の語の下につくもの

君ね、たうとうあの事件が起つたんだよ。(口)
 松村さんね、あなたこの本を持ちですか。(口)

2 主格の語の下につくもの

私ね、とても駄目だと思ひましたよ。(口)
 例の山田さんね、昨日歸つて来ました。(口)

3 格助詞の下につくもの

また雨がね、降り出して来ました。(口)
 案内人がくらい穴の中にね、私を連れて行つたのだ。(口)
 古い本をね、賣つて作つた金なのだとさ。(口)
 それとね、これとは大分違ふんだよ。(口)

4 副助詞の下につくもの

東京へね、行かうと思つて家を出かけたのですつて。(口)
 自動車でね、運ばすぐだ。(口)
 私からね、始めませう。(口)
 これはほんのすこしばかりね。(口)
 皮までね、食べてしまつたんだよ。(口)
 どこやらね、具合の悪いところがあります。(口)
 薬の分量はこれぐらゐね。(口)

5 係助詞の下につくもの

これはね、私の末子です。(口)
 旅もね、伴侶によつて感じが違ふ。(口)
 それこそね、大變ですよ。(口)
 あんな人さへね、やられてしまつたんです。(口)

6 條件を示す語の下につくもの

あの人に頼んだらね、すぐ解決したのです。(口)
 若し山田さんに逢つたらね、どうかよろしく。(口)
 萬一しくじればね、それを面目の丸つぶれさ。(口)
 當選すればね、いゝんだが。(口)

7 活用言についてあるもの

- よく雨が降るね。(口)
- 大層さびしいね。(口)
- 銀座通は賑かです。(口)
- 全く驚いてしまったね。(口)
- 母はまだ歸らないね。(口)
- さうで御座いますね。(口)
- まだ日暮であるまいね。(口)
- さうだらうね。(口)

この「ね」を長く「ねえ」と言ふことがある。「な」を「なあ」と言つたのと同じで意義にも用法にも變りは無い。唯多少餘情が餘計に加はるだけである。

10) がな

文語の希望を表す終助詞より更に口語の間投助詞に轉じたものである。體言又は助詞について希望を表す。何がなあるだらう。(口)
 何がなあるだらう。(口)
 逢ひたいと思つて、幻にがな見られたもので御座らう。(狂言、塗師平六)
 相撲の業の事ではがなあらう。(狂言、文相撲)
 何がなと一生懸命に奔走してゐるのです。(口)

終

附 録

一 國文法參考書

大槻文彦	廣日本文典	(明治三〇・一)
同	廣日本文典別記	(明治三〇・一)
岡田正美	新式日本文典	(明治三三・三)
同	日本文章法大要	(明治三三・八)
松下大三郎	日本語文典	(明治三四・三)
草野清氏	日本文法	(明治三四・八)
石川倉次	はなしことばのきそく	(明治三四・八)
金澤庄三郎	日本文法論	(明治三六・一二)
芳賀矢一	中等明治文典	(明治三七・一二)
和田萬吉	日本文典講義	(明治三八・一二——明治四一・九、増訂)
吉岡郷甫	日本語法	(明治三九・一——昭和八・四、昭和版)
國語調査委員會	現行普通文法改定案調査報告之一	(明治三九・一)
鈴木暢幸	日本語文典	(明治三九・五)
國語調査委員會	口語法調査報告書	(明治三九・一二)

國文法參考書

國文法參考書

- 岡澤鉦次郎 新日本文典原理 (明治四〇・一)
- 福井久藏 日本文法史 (明治四〇・一〇—昭和九・三、增訂)
- 岡澤鉦次郎 教科日本文典要義 (明治四一・七)
- 山田孝雄 日本文法論 (明治四一・九—昭和四・二、五版)
- 三矢重松 高等日本文法 (明治四二・六—大正一五・一一、增訂)
- 龜田次郎 國語學概論 (明治四二・六)
- 臼田壽惠吉 日本口語文典精義 (明治四二・七)
- 保科孝一 日本口語法 (明治四四・二)
- 吉岡郷甫 文語對照語法 (明治四五・七—大正一五・七、增訂)
- 金澤庄三郎 口語對照語法 (大正元・一二)
- 山田孝雄 日本文法新論 (大正二・五)
- 同 奈良朝文法史 (大正二・六)
- 佐々政一 平安朝文法史 (大正三・一、以降)
- 岡田正美 日本文法概論「文章研究錄」所載 (大正五・一)
- 大野佐吉 新實用日本文典 (大正五・九)
- 井上宗助 國定文語法と口語法 (大正五・一二)
- 國語調査委員會 口語法 (大正五・一二)

同 口語法別記

- 春日政治 尋常國語讀本の語法研究 (大正六・四)
- 鴻巢盛廣 小學國語讀本の語法研究 (大正七・七)
- 吉澤義則 新撰國語法 (大正九・八)
- 改訂中等日本文法教科書 (大正九・一一)
- 山田孝雄 日本文法講義 (大正一一・二)
- 同 日本口語法講義 (大正一一・二)
- 小林好日 標準語法精說 (大正一一・一一)
- 神保格 敬語法の研究 (大正一一・一一)
- 山田孝雄 敬語法の研究 (大正一一・一一)
- 吉澤義則 中等新國文典 (大正一一・二)
- 小林好日 新體國語法精說 (大正一三・九)
- 松下大三郎 標準日本文法 (大正一三・一〇)
- 鶴田常吉 日本口語法 (大正一三・一一)
- 吉澤義則 中等新國文典別記 (大正一三・一一)
- 三浦圭三 綜合日本文法講話 (大正一五・五)
- 吉澤義則 女子新國文典 (大正一五・九)
- 吉澤義則 女子新國文典 (大正一五・一二)

國文法參考書

國文法參考書

- 小林好日 國語國文法要義 (昭和二・二)
- 安田喜代門 國語法概説 (昭和三・三)
- 松尾捨治郎 國文法論纂 (昭和三・四)
- 松下大三郎 改標準日本文法 (昭和三・四)
- 豐田新七郎 綜日本國民文法 (昭和三・五)
- 芳賀矢一遺著 日本文獻學 歷史法物語論 (昭和三・一〇)
- 吉田九郎 國文法概説 (昭和三・一〇)
- 徳田 淨 新日本文法 (昭和四・五——六)
- 木枝増一 高等國文法講義 (昭和四・六)
- 安田喜代門 高等國語法 (昭和四・一三)
- 湯澤幸吉郎 室町時代の言語研究 (昭和四・一二)
- 松下大三郎 標準日本口語法 (昭和五・二)
- 岡澤鉦治 言語學的日本文典 (昭和五・四)
- 吉田新吉 日本文法 (昭和五・五)
- 福永勝盛 新國文法講義 (昭和五・九——昭和七・九、改訂)
- 吉澤義則 國語史概説 (昭和六・二)

- 木枝増一 高等口語法講義 (昭和六・五)
- 湯澤幸吉郎 解説日本文法 (昭和六・九)
- 山田孝雄 日本文法要論(岩波講座「日本文學」中) (昭和六・九)
- 細江逸記 動詞時制の研究 (昭和七・二)
- 三矢重松遺著 文法論と國語學 (昭和七・四)
- 後藤 格次 ローマ字と新しい見方 (昭和七・五)
- 小林英夫 一般文法成立の可能性について (昭和七・五)
- 岡澤鉦治 言語學的日本文典(靜辭編) (昭和七・六)
- 三矢重松遺著 國語の新研究 (昭和七・九)
- 小林英夫 批判的一般文法の原理 (昭和七・一二)
- 新井無二郎 國語時相の研究 (昭和八・二)
- 松尾捨治郎 國文法概論 (昭和八・四)
- 福井久藏 新高等國文典 (昭和八・四)
- 細江逸記 動詞叙法の研究 (昭和八・五)
- 湯澤幸吉郎 國文法 (「國語國文學講座」中) (昭和八・一一——昭和九・四)
- 木枝増一 文語法精説 (「國語科學講座」中) (昭和八・一二)

國文法參考書

國文法參考書

- 小林好日 日本文法史 (「國語科學講座」中) (昭和八・一二)
- 新井無二郎 且爾乎波の原理的研究 (昭和九・二)
- 湯澤幸吉郎 口語法精説 (「國語科學講座」中) (昭和九・三)
- 新村出 規範的對歷史的日本文典 (「國語學講習錄」所收) (昭和九・四)
- 小林英夫 文法の原理 (「國語科學講座」中) (昭和九・四)
- 高橋龍雄 國語學原論 (昭和九・九)
- 三宅武郎 音聲口語法 (「國語科學講座」中) (昭和九・一〇)
- アンリ・フレエ原著 誤用の文法 (昭和九・一二)
- 小林英夫譯 高等國文法 (昭和九・一二)
- 吉澤義則 國語法要説 (「國語科學講座」中) (昭和九・一二)
- 橋本進吉 新文典別記(上級用) (昭和一〇・二)
- 同 言語學方法論考 (昭和一〇・四)
- 小林英夫 漢文の訓讀によりて傳へられたる語法 (昭和一〇・五)
- 山田孝雄 綜合高等日本文法 (昭和一〇・六)
- 山上、泉 現代語法概論 (昭和一〇・一一)
- 丸山林平 日本文法學概論 (昭和一一・五)
- ◎山田孝雄

- 佐久間鼎 現代日本語の表現と語法 (昭和一一・五)
- 松尾拾治郎 國語法論攷 (昭和一一・九)
- 湯澤幸吉郎 徳川時代言語の研究 (昭和一一・九)
- 小林好日 日本文法史 (昭和一一・九)
- 雜誌「國語と國文學」特輯號 國文法の根本問題と文法教授 (昭和一一・二〇)
- 徳田淨 國語法査説 (昭和一一・二〇)
- 福井久藏 日本文法學 (「岩波講座國語教育」中) (昭和一一・二〇)

國文法參考書

二 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。
例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。
- 四 「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
例 手習サス。
周旋サス。
賣買サス。
- 六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
例 罪サル。
評サル。
解釋サル。
- 七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。
例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。
文法上許容ニ關スル事項

八 上下貴賤ノ別ナク各其他位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。
 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九 てにをはノ「ノ」ハ動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ、母ニ似タルヤ。

二 てにをはノ「トモ」ノ動詞・使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルルトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

三 てにをはノ「ト」ノ動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從

フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラルルト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

三 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書トノ列傳トヲ讀ムベシ。

四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

五 てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

文法上許容ニ關スル事項

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。
 期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。
 經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。
 誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。
 給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。
 顔回ナルモノアリ。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラル、モノハ、徳川時代國學者ノ研究ニ基キ、専ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ、文部省ニ於テハ、從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ、之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ、同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス。
 (明治三十八年十一月二日官報)
 (文部省告示第百五十八號)

三 索引

あ(代名詞)……………八四、八七、八八、九一、九三、 九三、九六、四一、五四、五五、三六、三六六	あ(感動詞)……………四三	あ(形容動詞)……………三八、四一、四三	あ(感動詞)……………四三、四三、四五、 四六	あ、あ……………四六	あ、い、ふ……………三六	あ、だ……………三〇、三〇	あ、で……………三九、三〇	あ、です……………三〇	あ、なら……………三〇	挨拶語……………一七、一九、 一九	あい、つ……………九六	上りな……………五三	あがる……………三九、三二、 七〇	「秋風も吹かねば」……………七〇	あきらかなり……………六五	明に(形容動詞)……………三九、三五、六六、 六八	餓きる……………二七	ア行の「イ」とヤ行の「イ」……………一九	ア行の活用……………二一	明くる……………三六、三九、三三、 三六	あげる(動詞)……………二二	あげる(敬語)……………五〇	「上げる」の活用と連続……………五〇	あこ……………九三、七	淺野信……………五三	悪し……………二六	「足利町言語の待遇法」……………五九	悪しけむ……………五〇	あしこ……………八四、九二、 九七	足づから……………九八	Adjective……………三九、三〇	あす……………九三、九七	あすこい……………九三、九七	あすこら……………九三、九七	Aston……………一九	あそ……………八〇、八四、九二、 九三、九七	あそ(こ)……………九七	あそ(ば)す(動詞)……………三九、三三、 三五	あそ(ば)す(補助動詞)……………二四、 三五	遊ばす(敬語)……………五三	「遊ばす」の活用と連続表……………五三	遊ばせ言葉……………五三	あた……………九三	恰も……………三九	あたし……………九三	あたゝかに……………三九	能ふ……………三九	新しい意味の補語……………二四、 二六	新しい音便……………二四	當る……………三九、三九、 三九、三九、三九	あら……………八四、九七	Attica……………三	あちら……………九三、九七、 九八	あつち……………九三、九七	あつばれ……………四三	「東歌にあらはれたる特殊なる語法」……………五八	東歌の用法……………一七	Attributive verb……………一三	あて……………九三	あな(感動詞)……………四三	あなかしこ……………四七	あながちに……………三九	あなた……………八〇、八四、 九二、九四、九六	あなたがた……………九四	あなたさま……………九五	あなり……………五〇	豈……………三九、 三九	豈それ然らんや……………二五	兄ちや人……………四九	兄なる人……………五九	あの……………八八、九一、 九四、三五、 三五、三六、三六、 三六
---	---------------	----------------------	----------------------------	------------	--------------	---------------	---------------	-------------	-------------	----------------------	-------------	------------	----------------------	------------------	---------------	------------------------------	------------	----------------------	--------------	-------------------------	----------------	----------------	--------------------	-------------	------------	-----------	--------------------	-------------	----------------------	-------------	---------------------	--------------	----------------	----------------	--------------	---------------------------	--------------	-----------------------------	----------------------------	----------------	---------------------	--------------	-----------	-----------	------------	--------------	-----------	------------------------	--------------	---------------------------	--------------	--------------	----------------------	---------------	-------------	--------------------------	--------------	-------------------------	-----------	----------------	--------------	--------------	----------------------------	--------------	--------------	------------	-----------------	----------------	-------------	-------------	--

あのおかた……………九三、九五
 あのおひと……………九五
 あのかた……………八〇、九三、九五
 あのかたがた……………九四
 あのねえ……………四四
 あのひと……………九三、九六
 あのひとたち……………九四
 あのひとら……………九四
 あのひとら……………九四
 あのもの……………九六
 あはす……………四四
 合言……………二四
 合す……………二四
 あはや……………四三
 あはれ(形容動詞)……………三九、四三、四五
 あはれ(感動詞)……………四二、四三、四五
 あひ……………一三
 相……………三三
 間……………七七、四四
 あふ……………一四、一五、二五、三六
 危なささうだ……………六六
 逢へる……………二九、五一
 天草本……………六三
 「天草本伊曾保物語」……………四九、六〇、四

「天草本平家物語」……………四九、
 五九、五九六、五九、六〇、四
 あまた……………二七
 あまり(副詞)……………一三、一五
 あまり(助数詞)……………一〇
 あまりた……………三六、三五
 あまりな……………三六、三五
 Amorphous sentence……………四三、
 三九、四二
 あやう……………八七、九六、三六
 脚結……………四四、四五、五〇
 「あゆひ抄」……………二六、五一、四、
 六五、七三、七九、七四、七五
 「脚結抄」……………四三、四四、四九
 あら……………四三、四五
 あらあら……………四四
 あらうすらう……………五五
 あらずか……………五〇
 あらぬ……………一四、六六
 有らぬ……………五〇
 あらぬか……………五〇
 あらびる……………一七
 あらまの……………四四

あられます「たに」……………七三
 あらへん……………一五二
 あらゆる……………八八、九一、三六、
 三四、三四、五七、五八、六三、
 六三、六四、五七、四五一
 あり(動)……………七三、一三、
 一三、一〇、一七、一〇、一〇、
 一七、一七、三六、三六、三六、
 三六、三六、三六、三六
 あり(敬語)……………五六
 あり(補助動詞)……………二四〇、
 二四一、二二、二九五
 形状の詞……………四三
 在……………四四
 在……………二六
 在……………二六
 「あり」と「なり」……………五〇
 孔……………四
 「あり」の意義と用法……………二六
 ありもせば……………四〇
 ありわさ……………一七、一七
 ありわぶ……………一四
 ある(動詞)……………三六
 ある(補助動詞)……………六〇、六〇
 有る……………三三

或る……………八八、九〇、四三、五三、五五、
 三五、三六、三六、三六、三六
 ある意味での終止形……………一七三
 あるが……………四三
 あるなり……………五〇
 あるに……………四三
 或は……………三九、三九、
 FOI、FOI、FOI、FOI
 あるらう……………五五
 あるを……………四三
 あれ(感動詞)……………四三、四六
 あれ(代名詞)……………七九、八〇、八四、八八、
 九一、九三、九六、九八、三五、
 三六

あれでい……………三六
 あれども……………四三
 「あれば」と「あらば」……………一六
 あればや……………七五
 あれや……………七五
 あれら……………九三、九七
 安藤正次……………三三、三六
 An aeroplane!……………四六
 あんな……………三六、四〇

あんな……………三三、三三、三六、三六
 あんなで……………三三
 あんなに……………三三、三三
 あんなら……………三三
 あんなり……………三三
 あんまりた……………三六
 あんめれ……………五七

【イ】

い(格助詞)……………七〇、八四
 い(動詞の語尾)……………三、一七、一七、
 一七五、二八
 い……………三〇
 いえ……………四二
 悠々と……………三六
 伊字訥詞……………四六
 衣字訥詞……………四六
 有形體言……………四四、四八
 優に……………三二、三九
 いえ……………四三
 Yes!……………四六
 イ音便(動詞)……………二四、五三

イ音便(形容詞)……………三〇、三〇
 イ音便の假名遣……………三三
 いか……………三三
 いかで……………三三
 いかに(副詞)……………五三、五四
 いかに(感動詞)……………四三
 如何ぞ……………三三
 意義上より見たる動詞の分類……………三三
 意義による副詞の種類……………三三
 意義を添へる接頭語……………八九、九〇
 生……………一八
 幾(接頭語)……………三三、三三
 い……………二七
 いく……………二七
 いくつ……………二七
 「行く」の音便……………二四、二五
 幾何……………二七
 いくら……………二七
 池田併治……………一八、五五
 い……………三三
 い……………四三、四三

いさゝかの……………三九、三〇、三三、三三
 伊澤修二……………三三
 石坂正藏……………三三
 意志的……………三三
 石田春昭……………三三
 已然形(動詞)……………一四、一五、一六
 已然形(形容詞)……………二九、三〇、三〇
 已然形(口語形容動詞)……………三三
 已然形の本義……………一六
 已然形の用法……………一七
 已然形をうける「ば」のつ……………三三
 くる条件……………三三
 已然条件形……………一六
 いそ(数詞)……………二二
 依存語……………三三
 依存詞……………三三
 いそち……………二二
 いたす(動詞)……………二四、二五、五〇
 いたす(補助動詞)……………二四
 ……二天、四三、四三、五九、五〇
 いたしく(動詞)……………三三
 徒らに死ぬ……………三三

痛み……………三六
 一訥詞……………四六
 一語兩性……………三六
 一段活用(動詞)……………一〇、一八、一八
 一段の……………三六
 いつ(数詞)……………二二
 いつかた……………四三
 いつ……………四三
 安藤……………三三
 いづ……………三三
 一切……………三三
 一體……………三三、三三、四三
 一單語……………一七、三六、四三、四三
 一帯の……………三六、三九、三三
 一致關係……………一〇
 いづち……………四三
 いつ……………二二、二二
 一般的文法(General
 grammar)……………一〇、一〇
 「一般文法成立の可能性に
 ついて」……………二〇、二五

「一般文法の原理」……………三〇
い……………三三
いづら……………八四、九三
いづれ……………八四、九三、九八、一〇三、一〇九
いづれの……………三六三、三六四、三六五、三六六
いで(否定)……………三六三、三六四
いで(感動詞)……………三六三
いと……………三六九、三七〇
いと息はすなり「のす」……………三六九
いとほしみ……………三六〇
往ぬ……………一四六、一〇六、一〇七
いはく……………二六六、二五九、二六一
謂はゆる……………八八、九〇、
二五六、三四三、三四四、三五七、三五八、三六
二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七
「いはゆる形容詞の整理」……………二二四
「所謂形容動詞に就いて」……………三二一、三二六、三二七
「所謂指定の『なり』と咏嘆……………三五三
の『なり』……………三五三
「いはゆる」の叙述性……………三五八
「所謂『う』に通ずる『が』に……………三六三
就いて」……………三六三

況んや……………に於いてをや……………三三
言ひつかる……………三五六
謂ふ……………三七七
Even……………三〇六
家聞かな……………一〇六、三七七、三七八
今……………一〇六、三七七、三七八
今泉忠義……………二三四、四九四
いまし……………三五
います……………三三九
います(そ)かり……………三〇二
未だ現れない事實に對す……………四九五
る推量を表す「む」……………二七六
未だし……………二七六
いまだ……………三五六、三七七、三九三
意味……………二一〇、二六
意味の補助……………二六六
いや……………四三三、四四四、四四五
いやがらせ……………三七七
いやしくも……………三六一
いやまう……………四三三、四三六
いゆ……………四三〇
いらつしやう……………二二四
いらつしやう……………二二五、三九八、四三三、
四三九

「入らつしやる」「仰つしや……………三二七、三三三
る」の活用……………三六〇
「入らつしやる」が「あらせ……………三六〇
らる」より出たといふ説……………三六〇
射る……………一九四、三三四
沃る……………一九四
鑄る……………一九四
いろんな……………三六三、三六四、三六五
Interjection……………四一五、四一七
Interjectional cries……………四一五
Intransitive verb……………三三三
印度日耳曼語……………三三〇

【ウ】
う(推量)……………三二〇
う(助動詞)……………三二〇
う(未來)……………一五二、六二六、三三九、四三七、四三九
う(未來)……………六〇三、六〇四、六〇五
Walter, another bottle!……………四三六
ウオラビョータク(Volapuk)……………三三〇
ウ音便……………三三〇、三三六、三三九、
三四〇
ウ音便(形容詞)……………三三〇

ウ音便の假名遣……………三三九
うかゞふ……………三三三
受かる……………三三三
受ける……………三三三
うけたまはる(動詞)……………三三三
請取つる……………三五五
受身……………一五三
受身の助動詞と可能の助……………四三〇、五七〇
動詞との差……………四三〇、五七〇
受身動詞……………五七〇
受身の助動詞……………四三三、四三四、五九六
受身の助動詞の本義……………四四八
受身の本義……………五九六
受身「れる」の連用形がつ……………五九六
いて名詞となる現象……………三
受けよう……………三
迂生……………四九八
うす……………四九八
うする……………四九八
うしりみる……………一七一
うたての……………三三〇
うち……………三三〇、三三
打消の「さりと」係助詞「ぞ」……………三三〇

と「あり」とよくなる「なり」……………三五
……………三五
打消の助動詞……………三五
打消の助動詞「なり」……………三五
「美しかつ」と「美しかり」……………三三〇
の關係……………三三〇
美しく……………三三三
「美し」の「し」……………三三三
「寫し」と「寫せし」……………四六四
埋む……………一三三
うつらふ……………五二〇
打てる……………二九、七二
「う」の發生……………六〇四
うひ(接頭語)……………九〇
うへ(接尾語)……………六七
上田萬年……………二六五、二六九、二七六
生みの……………三五六、三五九、三六三
「う」「よう」の活用と連續……………六〇三
賣らす……………四五四
裏日本方言……………三三
恨む……………一九、二四
うらめじや……………四七
「羨む」と「羨まじ」……………一三三

「嬉し」が口語で「嬉し」……………二二
となる説……………二二
「嬉」の「うれし」……………二二
「愛ふ」と「うれはし」……………一三三
植わる……………三三
運動される……………三三
運動性……………三三
雲伯方言……………三三

【H】
え(副詞)……………三二、三二七、三三
え(終助詞)……………八四、八三
え(動詞の語尾)……………一七四
咏嘆の助動詞……………四九二
咏嘆の「なり」……………五三二
えう……………五七三
「諸曲」……………四八五
「諸曲」「羽衣」……………二七五
ええ……………三〇〇
ええ(感動詞)……………四三二、四三三、四三五
ええ……………四三七
得しむ……………四三七
Dictionary of the Luchuan……………三三

Language……………一三
“Essentials of English……………一三
Grammar”……………一三
エスキモー……………一三
Esperanto……………一三
Jespersen……………一三
得せしむ……………一三
「淮南子」……………一三
得る……………一三
遠稱……………一三

【オ】
お(代名詞)……………八四
お(接頭語)……………六六、七〇、五八、五九、
五七、五八、五九、五九〇
お上り……………六一
お上りな……………六一
「おあん物語」……………二六
おい(感動詞)……………四三三
おい……………二五六、二五七、三三三
お出で……………二四二、二四三、二四六
お出で遊ばす……………五八
おら……………三三

老いる……………三三
おう……………三三、三三
おう……………三三
おう……………三三
August Schleicher……………六六
Auxiliary verb……………六六
應答詞と感動詞との區別……………四三
應答(呼應)を表す感動詞……………四三
岡澤鈺治……………三三、三三
岡澤鈺次郎……………二六、三〇
「岡倉氏の語學上の二論文……………六〇
を讀みて所見を述べ」……………六〇
お歸りなさる……………五九
岡倉由三郎……………二六、三〇
岡藤源藏……………一九
お來遊ばす……………五八
起きある……………五八
「おきく物語」……………三六
お來なさる……………五八
沖繩方言……………三三、六四
起きはる……………五八
起きろ……………二二
於ける……………三三

索引

漢文直譯體……………三〇九

「漢譯日本口語文典」……………三七七

【キ】

き(助動詞)……………一五九、四三三、四四一、四七九、五一九

き(接頭語)……………九〇

き(カ變の未然形)……………三〇〇

貴(接頭語)……………七〇

儀(接尾語)……………三〇〇

きい(動詞)……………三〇〇

着い……………三〇八

きう(數詞)……………一五

九州方言……………三、三、五七八

消えずの火……………五五九

消えぬ……………五〇六

聞かす……………四五四

聞く……………二八七

「聞く」と「聞こゆ」……………四五〇

奇怪に……………三六七

貴君……………八七

貴兄……………八九

輕んず……………三〇五

感應副詞……………三九二、四一七

鑑る……………一九一

「閑吟集」……………一六

漢語……………一四

漢語から來た無活用の語……………二四三、二六一

漢語の語性……………二四三

漢語の人代名詞……………八六

漢語のサ行變格活用……………二四三

漢語の接頭語……………三五九

漢語の副詞……………三五九

漢語の名詞……………一五七

漢語の量數詞……………一五

漢語をはたらかして動詞とする……………四

感詞……………四七

漢字の音讀……………二〇七

Conjunction……………三九

Conjunctive adverb……………三九

間接的表現……………五九、五四

感歎詞……………四八、四一五

感動言……………四七

感動語……………四一六

感動詞 第二編第十章……………四一五

感動詞……………四四、四五、四七、四九、五七、五八、五九、三九六、四一五、四一八、四一九、四二四

間投詞……………四一五、四一六

感動助詞……………六五、六六、八三四

間投助詞(第二編第十二章第九節)……………八五〇

間投助詞……………六六三、六六四、六六七、六七〇、七四九、七五八、七七一、八三〇、八三三、八四九、八五〇、八五一

感動詞から轉成した名詞……………七四

感動詞の特色……………四三三

感動詞の種類(第二編第十章第二節)……………四三三

感動詞の種類は二種……………四三三

感動詞の疊語……………四三四、四三六

感動詞の本義(第二編第十章第一節)……………四一五

感動詞の用法……………四三、四三三

感動詞と間投助詞との相違……………四三〇

感動詞と接續詞との差……………四一七、四三〇

感動詞と體言との區別……………四二七

感動詞と他の品詞との著しい區別……………四二七

感動詞は觀念語で語尾變化なし……………四二七

感動詞否定説……………四二七

感動詞を一品詞とする理由……………四三〇

感動詞を副詞とする説……………四二七、四二九

間投助詞と感動詞……………八五〇

間投助詞の意義と用法……………八五一

間投的呼聲……………四一五

間投の語の意味……………八五〇

感動の助詞……………三〇〇

感動副詞……………四二七

感動を表す感動詞……………四三三

漢文訓讀の影響……………四三三

漢文訓讀と國文法……………三三

「漢文の訓讀によりて傳へられたる語法」……………三三、三五、三六、三五七、三六〇

希望の助動詞「たし」の用例……………五九

例……………五九

希望の助動詞と希望を表す助詞との區別……………五九

希望の助動詞「ぬ」の活用と連續……………五〇六

希望の助動詞の本義……………五〇六

規範語……………三六

「規範的對歴史的日本文典」……………六二

規範文法(Normative Grammar)……………三三

急な……………三六

きみ(接尾語)……………三六

君……………八〇、八七、九三、九四、九六

義務の「べし」……………五三

木村正辭……………七〇

義務を課すると命令するとの區別……………五三

疑問……………七五三

疑問文に用ひた「まし」……………四九七

「狂言記」……………三六、五九三、五九六、五九七、五九八

狂言物……………六二五、七四六

「行幸す」と「行幸あり」……………五七九

京都方言……………三

客格助詞……………六四

客觀的形式體言……………六

客觀的推量……………五七

客語……………七六、一〇三、一〇六、一五六、二三三、三三九、三三〇

客語が主語にならない場合……………三四

客語と副詞的修飾語……………三九、三〇〇、三六七、六五

客語の併列……………一〇六

客語・補語になつてゐる體言と副詞的修飾語になつてゐる體言との區別……………三五

客語・補語・副詞的修飾語の問題……………三六、三三

逆説……………八〇〇

逆説(逆態)的接續詞……………四三

きやつ……………九三、九六

來やはる……………五八〇

「あ」[けり]の活用と連續表……………四九

貴公……………八七

聞えざりせば……………四〇

きこしめす……………三三九、四六六、四〇〇

きこしをす……………三九

聞く……………三三九、四六六

きいゆ(動詞)……………三〇〇、三〇一

きいゆ(助動詞)……………四一

きいゆ(助動詞)の活用……………四一

「著さす」と「著せさす」……………四三

貴様……………九三、九六

貴人……………一八

貴婦……………八七

「著しむ」と「著せしむ」……………四三

記述的文法……………三三、八二、三三、三五六

記述的文法(Descriptive Grammar)……………一四

議す……………二五

寄生副詞……………三九

寄生副體詞……………三六

「着せる」と「着させる」……………五七、八

既然態……………五〇一

來す……………三〇一

「穢なきうた」の「な」……………六六

來る……………三五一、三五八、三五九、三六〇、三六四、三六六

來るの活用……………三〇一

歸著副詞……………二五七、三九三

歸著副體詞……………三九

きこと……………三七七、三九

切符の切らない方ありませんか……………六七、六八、六九

既定條件……………一八六

貴殿……………八七

「あ」と「けり」との區別……………四九、四九三

「あ」と「けり」との用法上の相違……………四三

來ない……………三〇

來なから……………五二

「きのふはけふの物語」……………三六

「きの」の「目睛回想」……………四九三

「希望のコソは動詞であつた」……………七七〇

希望の助動詞……………一五三、四三三、四三三、四三三

希望の助動詞「たし」の用例……………五九

例……………五九

希望の助動詞と希望を表す助詞との區別……………五九

希望の助動詞「ぬ」の活用と連續……………五〇六

希望の助動詞の本義……………五〇六

規範語……………三六

「規範的對歴史的日本文典」……………六二

規範文法(Normative Grammar)……………三三

急な……………三六

きみ(接尾語)……………三六

君……………八〇、八七、九三、九四、九六

義務の「べし」……………五三

木村正辭……………七〇

義務を課すると命令するとの區別……………五三

疑問……………七五三

疑問文に用ひた「まし」……………四九七

「狂言記」……………三六、五九三、五九六、五九七、五九八

狂言物……………六二五、七四六

「行幸す」と「行幸あり」……………五七九

京都方言……………三

客格助詞……………六四

客觀的形式體言……………六

客觀的推量……………五七

客語……………七六、一〇三、一〇六、一五六、二三三、三三九、三三〇

客語が主語にならない場合……………三四

客語と副詞的修飾語……………三九、三〇〇、三六七、六五

客語の併列……………一〇六

客語・補語になつてゐる體言と副詞的修飾語になつてゐる體言との區別……………三五

客語・補語・副詞的修飾語の問題……………三六、三三

逆説……………八〇〇

逆説(逆態)的接續詞……………四三

きやつ……………九三、九六

來やはる……………五八〇

Can.....二五五
御(接頭語).....六六
來よう.....三三
共時論的文法.....一六
玉(接頭語).....六七
清.....三三
共存事實の序接的表示.....一〇一
虚辭.....三三
御寝なる.....三三
虚體言.....四七
ざり(副助詞).....七三、七三
「吉利支丹文學断片」.....五九
綺麗.....九〇
綺麗である.....三三
綺麗な.....三一
記録語.....三三
疑惑假設の副詞.....三三
近畿方言.....三三、三四
謹言の助動詞.....五九
禁止.....七七、七七
さんじ.....八七
「禁止表現法史」.....五五
近稱.....八三、九一

近代語.....三六
近代語の特色.....一六
金田一京助.....三三
愚(形容動詞の語尾).....三六、三六
く(接尾語).....九三、三三、三三
句.....四一、四三
愚(接頭語).....六九
くう.....一七
Goodbye!.....四六
クキ活用.....三七
久活用.....四一、四九
久活志久活一元論.....二六
ク活シク活に働かうとし.....三三
て中絶した語.....三三
ク活用・シク活用の名稱.....三三
ク活用とシク活用の區別.....二六
別.....二六
草野清民.....二五、三三、四二
クシキ活用.....二七

糞つ.....四六
具體名詞.....二一
くださる(動詞).....二五、三三、三三
くださる(補助動詞).....二四、三三
下さる(敬語).....三三
「下さる」の活用と連続.....五七
件の.....三五、三五、三五、三五
口づから.....九
屈折語.....六六
句讀.....四七
來の活用.....三〇
「く」の問題.....二五、三五、三〇
「くはすきらひの」す.....五九
食ひなさる.....五三
熊谷直好.....五五
雲なたなびき.....四四
くやしや.....四七
くゆ.....一七
「暮しし」と「暮せし」.....四八
比ばる.....五三
くらぶる「たに」.....七三
くらむ(副助詞).....三三、三三、三三

くらむ(副助詞).....三三
Gamma.....三三、三三、三三
Grammar.....一
Grammaire.....一
Grammatik.....一
Grammar of the Japanese
Written Language.....一
グリーンランド.....一〇一
來る.....一〇一
苦しく.....三三
くれかし.....三三
黒川眞頼.....一四九、一五〇
黒澤翁滿.....五五、六五
「外國語の寫し方」.....七五
回想叙述.....四七
傀儡副詞.....三九
外來語と熟合したサ變.....二五
外來語の順位數詞.....二六
外來語の助數詞.....一〇
外來語の副詞.....三三
外來語の量數詞.....二五
外來名詞.....七四、七五

「廣日本文典」.....四九、一〇一、一〇一、一〇一、一〇一
二七五、四六、四六、四六、四六、五三
九、四〇、四八、五七、六五、六五、
六六、六〇
「廣日本文典別記」.....八八、一〇一、
一〇一、一〇一、一〇一、一〇一、
五、三一、三七、三八、四五、五七、
五四、五九、五九、五九、五九、七七
Orok
科學的文法.....九、一五
過去・現在・未來の區別.....四七
過去の助動詞.....四七、四七
過去の助動詞「き」の特殊
な連續.....四八
過去の助動詞「き」の連續
言「し」を終止言に用ひる
こと.....四八
過去の助動詞「き」の未然
形「け」.....四八
過去の助動詞「き」の未然
形「せ」.....四八、四七
過去助動詞「し」は凡て已
然形につく.....四八

過去助動詞「し」は凡て連
用形につく.....四八
過去の助動詞「せ」と「け」.....四八
過去の助動詞「た」の活用
と連續.....六三
過去の助動詞「た」の未然
形と假定形との區別.....六三
過去の助動詞「た」の用法.....六三
過去の助動詞「た」の連用
形「たり」.....六三
過去の助動詞の本義.....四九
過去の推量を表す助動詞.....五九
活潑に.....六九
「活潑雜誌」.....五〇
「活潑指南」.....四九
活用.....四九、四三、五、一七
活用系統.....三三
活用形の種類.....一四
活用形の種類.....一四
活用形の種類.....一四
活用形の標準.....一七
活用言.....四七
活用語.....五七、五八
活用しない動語に附く助

詞.....四〇
活用する語.....二二
活用する語にのみ附く助
動詞.....四〇
活用の根本義.....二九
關係語.....四九、五〇、五〇、五七
關係指示.....三三
關係助辭.....六六
關係の表示.....六六
關西方言.....二六、三三、三三、三三
完辭.....三三
完全自動詞.....三三
完全他動詞.....三三
完全な口語になつてゐな
い動詞.....一五
完全に轉換してゐない名
詞.....二九
關西方言.....三三、三三、三三、三三
觀念語.....二九、三五、六〇
觀念語.....三三、四九、五七
觀念語間の文位的關係.....一七
觀念語と觀念語との承接.....一五
觀念語と形式語との承接.....一五

觀念語の本義.....一七
觀念連續.....一四
勸誘の「べし」.....三三
完了態.....五〇、一〇一、一〇一
完了の確認確述.....五〇
完了の助動詞.....三三、四七、四八、
五〇、七五、七五、八三、八三、八三
完了の助動詞「たり」の用
例.....五七
完了の助動詞「つ」の連用
形「て」と接續助詞「て」と
の區別.....五〇
完了の助動詞と重なる「む」
(なむ).....四九
完了の助動詞「ぬ」の命令
形と希望の助動詞「ね」と
の區別.....五〇
完了の助動詞の重複.....五〇
完了を現す語法上の形式
が過去を現す形式となる
現象.....五〇
慣例.....五九
君(接尾語).....六七

【訓義辨證】…………… 七〇七
 軍人らしい…………… 六〇九

【ケ】
 蹴…………… 二七
 げ(接尾語)…………… 六二二
 荆(接頭語)…………… 六九
 係結の法則…………… 一六三、一六九
 敬語(助動詞)…………… 一五三
 敬語助動詞「ます」の活用と連続…………… 四六八
 敬語動詞…………… 二二五、三〇六、五七四
 敬語の意味をもつ動詞…………… 二二八
 敬語の形容詞…………… 三〇六
 敬語の助動詞…………… 四四二、四四三、四五三、四六四、四六五、五七四、五九一
 敬語の助動詞の分類…………… 四六五
 敬語の助動詞「る」…………… 二二五
 敬語の数詞…………… 二二八
 敬語の代名詞…………… 二二八
 敬語の代用…………… 二二八
 敬語の動詞(第二編第四章)…………… 六六

第七節)…………… 二二八
 敬語の動詞…………… 五八一、五九四
 敬語の補助動詞…………… 二四二、二五一、二五三、二五七
 敬語法…………… 二四五
 「敬語法の研究」…………… 二四五
 敬語「られる」がサ變未然形に連る時…………… 五七四
 形修語の中止法…………… 二九八
 形修語の述語…………… 一六三
 形修法…………… 二九〇
 形式形容詞…………… 一三三、三〇四、三〇七、三〇九、三五三
 形式語…………… 二六、四〇、四二、四六、五〇、一〇八、二六六、三二四、三三〇、三三三
 形式語と接辭…………… 四六八
 形式語の介在…………… 一七七
 形式存在詞…………… 五三三
 形式體言…………… 六二、七二、九六
 形式動詞…………… 七六、一三三、二二五、三〇四、三〇七、三〇九、三三三
 形式代名詞…………… 三六六、三六七

形式副詞…………… 三三三、三三九、三九六、四〇五
 形式副體詞…………… 三六四
 形式名詞…………… 七五、三六七、八三一
 形式名詞の特質…………… 七七
 形式用言…………… 七三、一三三、一三〇、二〇四、二〇七、二九三、三〇七、三三三、三三九、三四〇、三四四、三四五、六二四
 形式用言説…………… 三三三
 形式用言の分類…………… 三三三
 形式用言の分類表…………… 二〇四
 形式連語…………… 四二
 形状言…………… 四四、四八、二六四、二六九、三三八
 「形状言八箇」…………… 二六九、二七六
 形状性形式用言…………… 二〇四、三〇七、三三三
 「敬語動詞マラスル」について…………… 五九六
 敬語に關する形式の發達…………… 六五
 敬語の助動詞…………… 四六五
 敬語の動詞…………… 二四一
 敬語の名詞…………… 六五、六六
 係助詞(第二編第十二章第五節)…………… 七三

係助詞…………… 六六三、六六四、六六七、六六九、六七〇、六七三、六七九、七四〇、七四二、七四六、七四七、七五二、七五三、七六四、七七一、七七二、七七三、七七四、七六八、七八一、七八四、七八五、八二六、八二七、八三〇
 係助詞の意義と用法…………… 七四三
 係助詞の特質…………… 七三六
 係助詞の「は」と接続助詞の「は」…………… 七四七
 繼續作用を表す「ふ」…………… 五二〇
 繼續作用を表す「ふ」の活用と連續…………… 五二一
 繼續態…………… 五〇〇、五〇一、五〇五、五〇七、五〇九、五一一、五二〇、五二二
 形態的特質…………… 二二八、二二九
 形態と意義と職能との密接なる關係…………… 六六六
 形態の規準…………… 五
 形態變化…………… 一三三
 契沖…………… 五九
 京阪語…………… 三
 形容詞…………… 四七
 形容詞(第二編第五章)…………… 二六三

形容詞…………… 四四、四四、四四六、四四七、四四八、四四九、五二、五七、五八、一〇七、一三三、一三三、一四四、一七三、二〇九、二二二
 形容詞イ音便の二種…………… 三〇五
 形容詞已然形「けれ」の問題…………… 三〇五
 形容詞已然形の發達…………… 三〇五
 形容詞イ音便の歴史的概證…………… 三〇五
 形容詞係結の正格と變格…………… 三〇一
 形容詞が動詞に連る場合…………… 二六二
 形容詞から轉成した名詞…………… 二九〇
 形容詞活用形の用法の特色…………… 二六六
 形容詞活用語尾の分類表…………… 二六七
 形容詞活用の特質…………… 二六四
 形容詞活用の歴史的發達の考察…………… 二七八
 形容詞活用表…………… 二七三
 形容詞關東關西音便の相違…………… 三〇六
 形容詞形態の四期…………… 二六五
 「形容詞考」…………… 二六五、二六九、二七六

形容詞性の助動詞…………… 四二六、四三九
 「形容詞組織考」…………… 二六九
 形容詞的修飾…………… 一六二、三三三
 形容詞的修飾語…………… 二六、七六、七〇、二九〇、二六六、二七四
 形容詞的修飾語(形容詞)…………… 二九〇
 形容詞的修飾語となる數詞…………… 一〇三
 形容詞・動詞の兩性質をもつ形容詞の連續形…………… 二九三
 形容詞と形容詞的修飾語…………… 二六三
 形容詞と熟合したサ變…………… 三〇五、三〇八
 形容詞と助詞との接續…………… 二八八、二九三、二九八、三〇〇、三〇一、三〇六、三〇九
 形容詞と助動詞との接續…………… 二七二、二七三、二七六、三〇三
 形容詞と動詞の關係…………… 二八〇
 形容詞と副詞との區別…………… 二八四、二八五
 形容詞にク活・シク活の生じた理由…………… 二六七
 形容詞に攝取された形容詞の活用形式…………… 三九
 形容詞で命令の意を表す場合…………… 二九五
 形容詞の打消を表す場合…………… 二六二
 形容詞の音便(第二編第五章第五節)…………… 三〇四
 形容詞の音便は三種…………… 三〇四
 形容詞の係結の法則…………… 二九二、二九三
 形容詞の力行サ行等數行に互つて活用する理由…………… 二六七
 形容詞の活用(第二編第五章第二節)…………… 二七三
 形容詞の活用…………… 二九四
 形容詞の活用形の用法…………… 三三七
 形容詞の活用は文語二種…………… 二七三、二七六
 口語一種…………… 二七三、二七六
 形容詞の語幹…………… 六三、六五
 形容詞の語幹から轉成した名詞…………… 七四
 形容詞の語幹に接尾語をつけた名詞…………… 七四
 形容詞の五變遷…………… 二六八
 形容詞の語尾…………… 三九、三〇三

形容詞の語尾と動詞の語尾…………… 三六八
 形容詞(文語)の終止形から轉成した名詞…………… 七四
 形容詞の述語格と副詞格との區別…………… 二六七
 形容詞の職能…………… 一三三、二六九
 形容詞の中止法と副詞法との識別…………… 二六五
 形容詞の特質…………… 二六三
 形容詞の「ない」と助動詞の「ない」との區別…………… 六三九、六四〇
 形容詞の「ない」と否定の助動詞の「ない」…………… 六三九、六四〇
 形容詞の發生發達…………… 六四〇
 形容詞の發達論…………… 二九八
 形容詞の副修法…………… 二九六
 形容詞の副詞形…………… 一〇六
 形容詞の副詞形と副詞…………… 二六六
 形容詞の文法的特質…………… 二八八
 形容詞の補助活用…………… 三三六
 形容詞の補助的用法…………… 二七〇

形容詞の本義(第二編第五章第一節)……………三六三

形容詞の本體……………三七八

形容詞の未然形と連用形とを區別しない説……………三六一

形容詞の名稱……………三九〇

形容詞の連體形の特異形……………三六一

形容詞の連用形……………三五五

形容詞の連用形から轉成した名詞……………三四四

「形容詞の論」……………三六六

形容存在詞……………三三〇、三〇八

形容動詞(第二編第六章)……………三二一

形容動詞……………三五七、三五八、三二四、三二五、三〇八、三〇九、三〇五、三〇三、三〇二、三〇一、三〇〇、三〇三

形容動詞「明かなり」の連用形……………三五四

形容動詞活用の特異性……………三三三

形容動詞活用表及び結語……………三三三

形容動詞語尾「たら」でせしに推量助動詞「う」のこと……………三二二

形容動詞語尾と指定助動詞との區別……………三三四

形容動詞の語尾「に」と副詞の語尾「に」……………三三九

形容動詞性の助動詞……………三三九、三三九

形容詞的修飾語……………三三三、三三四

形容詞發達の初期の傍……………三三七

形容詞は活用する詞……………三三四

形容詞は觀念語で用言……………三三三

形容詞は述語となる……………三三四

形容詞は性質・状態を表す……………三三三

形容詞補説(第二編第五章第六節)……………三〇六

「形容詞本質論附形容詞と動詞との關係」……………三〇六、三〇七

形容詞本來の職能……………三〇二

形容詞連體形の音便……………三〇九

形容詞連用形が副詞的修飾語に用ひられる場合……………三〇八

形容詞連用形の音便……………三〇七、三〇八

形容詞連用形の同格連用……………三〇三

形容詞連用形の副詞法……………三〇二

形容詞連用形副詞格の三の場合……………三〇七

「形容詞論」……………三〇六

形容詞を動詞化せしめよ……………三〇〇

うとする「み」……………三〇〇

形容詞を造る接尾語……………三〇〇、三〇〇

形容詞を動詞の中に含める論……………二二四

形容代名詞……………三三六

形容動詞といふ名稱……………三三三

形容動詞と助詞との連續……………三三六、三三七

形容動詞特設の理由(第二編第六章第三節)……………三三七

形容動詞特設の理由……………三三三、三三三

形容動詞とラ變動詞との差……………三三七

形容動詞ナリ活……………三三四

形容動詞に對する吉澤博士の説……………三三七

形容動詞の假定形……………三三八

形容動詞の活用形と副詞の語尾との區別……………三三九、三三三

形容動詞の形態(第二編第六章第二節)……………三二五

形容動詞の形態……………三二一、三二七

形容動詞の語幹が「の」を伴つて體言の形修語となつたもの……………三二四

形容動詞の語幹と體言……………三二四

形容動詞の語尾……………三三三、三三四

形容動詞の語尾と副詞の語尾……………三三四

形容動詞の語尾「なり」……………三三四

「たり」と指定の助動詞……………三三四

「なり」「たり」……………三三六

形容動詞の終止形……………三三六

形容動詞の職能……………三三二

形容動詞の助辭類連續……………三三七

形容動詞の中止形……………三三八

形容動詞の中止形・副詞形と形容詞の中止形・副詞形……………三三五

形容動詞の定義……………三二二

形容動詞の發生……………三二二

形容動詞の副詞形……………三〇一

形容動詞の副詞形と副詞……………三七八、三九

形容動詞の副詞形と形容詞及び副詞……………三〇六

形容動詞の本義(第一編第六章第一節)……………三二二

形容動詞の連用形……………三五五

形容動詞の連用形の考察……………三三六

形容動詞は用言の一種……………三三三

形容動詞否定説……………三四四

形容動詞餘説(第二編第六章第五節)……………三四四

形容動詞を動詞とする説……………三二二、三二七

形容動詞を特設しようといふ論……………三二七

形容動詞を作る接尾語としての「たら」「なうです」……………三二五

形容動詞を作る副詞の語尾「に」……………三三〇

教育的(教化)文法(Didactic Grammar)……………三二

げんば……………三〇七

けし(接尾語)……………三〇〇

げしなる……………三〇九

著す……………三〇七

著せる……………三〇七、三〇七

けたし……………三〇七、三〇七

蓋しく……………三〇七、三〇七

決意の「べし」……………三〇三

決意を表す「う」「よう」……………三〇四

決意を表す「じ」……………三〇三

結構な……………三〇二

決して……………三〇二

Gemeinsprache……………三〇二

けみす……………三〇五

けむ(推量)……………三〇五、三〇五

「けらし」に於ける「る」音の約略説……………三〇八

けらむ……………三〇九

けり(過去)……………三〇九、三〇九、三〇八

「けり」の「傳承回想」……………三〇三

蹴る……………一六、一七

「蹴る」の活用……………一六、一七、三二

「けらし」と「けらむ」……………三〇八

けれど(接續詞)……………三〇〇、三〇〇

けれど、接續助詞……………三〇〇、三〇〇

けれども(接續詞)……………三〇三、三〇三

件……………三〇七

言……………三〇六

原因推究の「らむ」……………三〇三、三〇四

「言海」……………三〇四

原義と異なつた用法に立つ特殊なる動詞の活用形……………三〇七

言語……………三〇三

言語學……………三〇六

「言語學概論」……………三〇六、三〇五

「言語學的日本文典」……………三〇三

「言語學的用法」……………三〇九

「現行普通文法改定案調査報告之一」……………三〇四、三〇六、三〇六、三〇六、三〇六、三〇六、三〇六

言語現象……………三〇三

言語集團……………三〇三

言語事實……………三〇七、三〇三、三〇八

「言語四種論」……………三〇六、三〇六

言語進化の法則……………三〇六

言語の現實性……………三〇三

言語の時代による變遷……………三〇八、三〇八、三〇八、三〇八、三〇八

言語の法則……………三〇五

言語の變化……………三〇八

現在の口語に於ける指示代名詞……………三〇六

現在の助動詞……………三〇四、三〇九

現在を以て過去を表す……………三〇七

現在を以て未來を表す……………三〇七

「見參す」と「見參あり」……………三〇九

原辭……………三〇三

現實の推量……………三〇三

「源氏物語」……………三〇二

「源氏物語から見た平安朝時代の形容詞」……………三〇八

源氏物語時代の會話文・手紙文……………三〇三

源氏物語に於ける便役の助動詞……………三〇三

「ことし」が「なり」に連る 五九六
 「ことし」の存在 五九六
 「ことし」の已然形 五九六
 「ことし」の意味上の用法 五九六
 「ことし」の活用形の用例 五九六
 「ことし」の活用と連続 五九六
 「ことし」の形容詞用法 五九六
 「ことし」の語幹「ことし」 五九六
 「ことし」の従動詞説 五九六
 「ことし」の特殊用法 五九六
 「ことし」の発生初期の状 五九六
 「ことし」の比較譬喩用法 五九六
 「ことし」の不確実なる断 五九六
 定用法 五九六
 「ことし」の不完全形容詞 五九六
 説 五九六

「ことし」の例示用法 五九六
 「ことし」の連用形 五九六
 「ことし」の論 五九六
 「ことし」は接尾語的に用うる特殊形容詞なり 五九六
 異なり 五九六
 異なり 五九六
 「異なり」といふ語の成立 五九六
 「異なり」を四段活用とす 五九六
 殊に 五九六
 「詞の通路」 五九六
 「詞の葉」 五九六
 「詞の玉橋」 五九六
 「詞の八衢」 五九六
 「詞の緒環」 五九六
 子ども 五九六
 ことを(接續助詞) 五九六
 こなた 五九六
 この 五九六

「ことし」の位置性 五九六
 語の位置上の助動詞の分類表 五九六
 「語の意味の体系的組織は可能であるか」 五九六
 このおかた 五九六
 このおひと 五九六
 このかた 五九六
 このかたがた 五九六
 語の結合性 五九六
 語の結合要素 五九六
 語の原語性 五九六
 語の職能の不完全性 五九六
 語の成立の考察と文法 五九六
 語の断続性 五九六
 語の二元性 五九六
 語の二元的認識の必要 五九六
 このひと 五九六
 このひとら 五九六
 語の品別 五九六

語の副詞 五九六
 語の文法的分類 五九六
 語の末尾の變化 五九六
 語の密着性 五九六
 このもの 五九六
 語の用法の移動 五九六
 語の用法の現象 五九六
 語の用法の固定性 五九六
 語の論理的分類 五九六
 語の論理的範疇に依る分類 五九六
 小林英夫 五九六
 小林好日 五九六
 語法 五九六
 「語法指南」 五九六
 語法的範疇(Grammatical category) 五九六
 語法の論 五九六
 語法方面 五九六
 語尾 五九六
 語尾(形容詞) 五九六
 戀ひし 五九六

「語尾」の発生 二六八
 「語尾」のくに就いて 二六八
 語尾變化 二六八
 語尾變化に於ける文語と口語 二六八
 語尾變化の現象 二六八
 語尾變化の名稱 二六八
 御奮闘なさる 二六八
 御奮闘なさる 二六八
 御邊 二六八
 御勉強なさる 二六八
 御勉強なさる 二六八
 こまかな 二六八
 細々した 二六八
 細々する 二六八
 来むする 二六八
 こやつ 二六八
 こゆ 二六八
 来よう 二六八
 こらつ 二六八
 御覽す 二六八
 孤立語 二六八

孤立助詞 二六八
 これ 二六八
 これ位 二六八
 此式 二六八
 此體 二六八
 此體の 二六八
 これら 二六八
 頃 二六八
 殺さしめ 二六八
 「殺しし」と「殺せし」 二六八
 こゑす 二六八
 懸念な 二六八
 今昔物語に於ける使役の助動詞 二六八
 権田直助 二六八
 こんな 二六八
 こんなだ 二六八
 こんなで 二六八
 こんなに 二六八

「こんな」の発生 二六八
 こんなら 二六八
 困難の 二六八
 「所謂延言」く「らく」まく 二六八
 考 二六八

【サ】
 さ(終助詞) 二六八
 さ(接尾語) 二六八
 さ(無意味語) 二六八
 然 二六八
 さあ 二六八
 さあれば 二六八
 さあれば 二六八
 際 二六八
 歳々 二六八
 再三 二六八
 再四 二六八
 幸 二六八
 Silence! 二六八
 さう 二六八
 相 二六八
 雙 二六八

さうあらば 二六八
 さういふ 二六八
 相言 二六八
 造語要素 二六八
 造語成分 二六八
 さうした 二六八
 さうしたら 二六八
 さうして 二六八
 さうする 二六八
 さうする 二六八
 想像(推測)叙述 二六八
 装束 二六八
 さうだ(推量) 二六八
 相對代名詞 二六八
 さうだけれども 二六八
 「さうだ」「さうです」の活用と連續 二六八
 さうで 二六八
 さうです 二六八
 さうです(推量) 二六八
 さうですけれども 二六八

さうなら	三〇〇	「指出の磯」	四八四	さにつらふ	五〇〇	特質	七五
「まう」の語源	六二	さします	一〇一	些の	三九、三三	サ変	一四六、四七
相の助動詞	四四	さす(動詞)	一四、一四、三六、三六	「ま」の音便	六二	サ変・サ行下二段・サ行四	
さうらう	四七三	さす(助動詞)	四三、四三、四三、	「さび」(接尾語)「さび」	四三	段活用に「し・しか」の連	
榮える	三〇	さすが	四三、四三、四三	(動詞)	四三	る時	四三
さかん	三〇	さすがに	三〇、三九	さぶ	四三	サ變「爲る」に可能「られ	
先島方言	三	さすがに	三九	Subjunctive mood	四六	る」を連続せしめる時	五〇
サ行三段活用	一八五、一〇一	流石の	三九	さぶしけむかも	五九、五〇	サ變動詞の謙讓語	二四四
サ行の活用	三二	「さす」が四段活用の未然		過去の推量でないか	五〇	さま(接尾語)	六七、九
サ行變格活用	一八四、二〇、三二、	に連つてゐると思はれる		Subject	三三	様	六三
サ行變格活用活用表	三	例	四二	「雑兵物語」	三	様々	四六
サ行變格活用「する」の補	一五	「沙石集」	四六	さぶらはず	四四	様々	六
語	一五	させます	五九	さぶらふ(動詞)	二四	寒う	三
サ行變格活用の動詞	四二	させる	四一	さぶらふ(助動詞)	四三	「寒川入道筆記」	二六
サ行四段活用の已然形か	四四	させる(使役)	五七、五七	候ふ(補助動詞)	二四〇、二四	寒く	三
らつとける「し・しか」	四四	「させる」がサ變「爲る」に	五七	候文	四三	さも	三九
らつとく「ししか」	四四	連る時	五七	さへ(副助詞)	七三、七五、七六、	作用の繼續を表す「ふ」	五八
昨(接頭語)	三六、三九、三六	授かる	五六	さへ(係助詞)	七六、七六、七六、	作用言	四四、四
佐々政一	三	薩四方言	三	佐伯梅友	六六、四三、五〇、五六、七四、	さら	三九
さし	一四	薩南方言	三	さて(感動詞)	四三	さら	三九
さしあげる	二四	さなり	五〇	さなり	五〇	さり(否定)	四八、五三、六三

「ざり」が「なり」に連る時	五二	ざんなり	五〇	修飾格	一三、六九	使役の「す」が四段	
ざりながら	四二	【シ】		修飾限定作用	三九	活用をしてゐると思はれ	
「ざり」の終止形	五二	し(數詞)	二五	修飾作用	四〇	る徴證	四二
ざる	一八、九〇、五四、五六、五七、	し(接尾語)	三〇	修飾的結合	四	Gerund	五六
ざる(助動詞)	四九、五七	し(代名詞)	八五、八六	修飾連用	一三、一三、一四、一五、	しか(係助詞)	七六、七六、七六、
去る	三五、三五、三三、三六	し(間投助詞)	八五、八六、八七	修用語	二七、三二、六四	しか(終助詞)	八五
ざるなり	五〇	し(接續助詞)	二九、三〇、	使役	二四	然	三三、三三
ざるに	四二	し(動詞)	三三、八二、八二	使役「させる」が漢語から	一五、三四	しが	四八
ざるべからず	三	氏(うち)(接尾語)	五四、八九	使役「させる」が漢語から	一五、三四	しが(終助詞)	五九、八四
ざるべからざる	三五	じ(否定)	五三、六三	來たサ變動詞に連る時	五七	時階の助動詞	四七
ざるまへに	四三	詞	三六、三六	名詞とすること	五七	資格關係	六七
ざれど	三六、四八、四二	辭	三六、三三	使役助動詞「せる」の連用	五七	併し	三七、四〇、四七、四二
ざれども	四二	四音詞	四	形	五七	而して	四二
ざれば	四二	修辭學と文法學	二九	使役動詞	五七	然しながら	四二
ざれる	五七	周圍波動の法則	三	使役の「さす」がサ變動詞	四三、四三	「然する」動作と「然ある」	作用
ざれる(可能)	五七	修辭	三	に連る時	四三	作用	一七
ざれる(受身)	五七	終止形(口語形容動詞)	三六	使役の助動詞	四三、四三	「しか『てしか』考」	八三
ざん(接尾語)	三六	修飾語	三〇、三三、三六	使役の助動詞「す」が四段	四三	しがな(終助詞)	八三
Thanks!	四二	修飾語と被修飾語との關	一三	活用をしてゐるといふこ	四三	「鹿の巻筆」	六
三種の「なむ」の區別	五〇	係	一三	と	四三	加之	四二
三段活用(動詞)	一〇、一〇	「修飾語に關する考察」	六	使役の助動詞の本義	四三	しかも	四七、四二、四二
三轉	七三						

事物代名詞から人代名詞へ轉用……………九六
 事物代名詞の轉用……………九一、九二
 事物の屬性……………一〇〇
 自分……………八六、九三、九六
 自分の決意・希望を表す「む」……………四九五
 します……………四〇一
 しみて……………三三〇
 染みる……………三二七
 しむ……………三二五、四〇一、四〇三、四〇四、四〇五
 「しむる」と「せしむる」……………四五六
 下一段活用……………四四五、四七二、四八四、四八九、四九二、四九八
 下一段活用活用表……………一九九
 下二段活用……………一四一、一八四、一八五、一九一
 下二段活用活用表……………一九九
 舍(接頭語)……………一九九
 稱格關係に於ける特殊法則……………二四四
 上古に於ける已然形……………一六六
 「上古の國語」……………四五三
 上巻……………二一九

承接と接続との區別……………三三五
 上代語……………三五四
 上代國語の形容詞……………三六六
 狀態性推量……………三五七
 狀態性副詞……………三五七
 「上代に於ける波行上一段活用に就いて」……………一八四
 情態の副詞……………三七〇、三七四、三七八、三九九、三九〇
 情態の副詞と形容詞及び體言との差……………三六八
 情態の副詞と陳述の副詞との差……………三六一
 情態の副詞の被修飾語……………三六八
 情態副詞……………三三四、三五九、三六二、四一八
 「上代の文獻に存する特殊の假名遣と當時の語法」……………一七〇
 「正法眼藏」……………四八五
 丈夫だ……………三三一、三三三、三三六
 丈夫で……………三三三、三三四
 丈夫です……………三三八
 丈夫な……………三六三、三六五
 丈夫なら……………三三七、三三八

丈夫に……………三三三、三三四
 省略關係……………三三七
 若干……………二一七
 道般の……………三五九、三六三
 “Japanese Grammar”……………一八四
 主位……………一〇〇、一〇三
 主格……………三〇六、三〇八、三三六、三三九、三四四
 主格を現す「を」の問題……………二六〇
 主格を示す格助詞……………七四三
 主客轉換……………三三三、三四三、三四四
 主觀的形式體言……………六一
 主觀的推量……………五七
 主語……………七六、一〇三、一〇七、一〇九、一四四
 主語以外の獨立成分の接續詞と主語の中の附屬成分の接續詞……………四二〇
 主語の併置……………四〇九、四二〇
 主語の稱格……………四四五
 主從關係……………一〇八
 主從複合……………一〇八
 主述的結合……………四三
 主人……………六九
 種族名詞……………七二

受動……………三三四
 受動態……………三三四
 從動詞……………三三九、三六六、四四五、五二九、五四〇、六二〇、六三三
 終止形(動詞)……………一四一、一五一、一六〇
 終止形(形容詞)……………二六九、二九二
 「終止形所屬のなり非味嘆論」……………五四三
 終止形といふ名稱……………一六〇
 終止形の本義……………一六三
 終止形の用法……………一六三
 終止言……………一五〇
 「終止の下の『なり』は味嘆でない」……………五四三
 終止法 (Indicative mood)……………一五〇、一五三
 終助詞(第二編第十二章第八節)……………八三三
 終助詞……………六六三、六六四、六六七、六七〇、七二八、七三六、七四六、七五九、七六四、七六七、七七一、八三三、八五〇
 終助詞と間投助詞との差……………八五
 終助詞と間投助詞との比……………八五

較……………八三三
 終助詞の性質……………八三三
 終助詞の特質……………八三三、八三三、八三四
 從屬語……………六五七
 從屬的結合……………四一
 從屬用言……………一五四
 重文……………四〇七
 熟語……………四一〇、四一三、四一五、四一六、四一七
 熟語動詞……………一五四
 熟語動詞又は形容詞となる語幹……………二七九
 熟語名詞……………三七九
 熟語名詞の形成……………三七六、三七七
 熟語名詞の形成……………一六七
 熟合完全……………三七六
 熟合のサ行變格活用……………二〇四、二〇六
 熟合不完全……………三七六
 述格……………六二、一三三
 述格と賓格との關係……………三七三
 述語……………八八、一〇三、一三三、一三三、二〇〇
 述語格……………六七
 述語の中止法……………二六九
 述語の併置……………二六四
 順位數詞……………二二一

順序數詞の轉成した固有名詞……………二一九
 純粹形式用言……………二四〇、二四七、二五三、二五九
 順説……………八〇〇
 順説(順態)的接續詞……………四二二
 順説と逆説の假定……………一六一
 準體言……………五〇、三二九、三三〇、三六〇
 準體助詞(第二編第十二章第七節)……………八三〇
 準體助詞……………三〇一、六六六、六六六、六六九、六七〇
 順德院……………八三〇
 準副體助詞……………六五四
 準副體助詞……………六七五
 準副體助詞……………六六七、六六八
 準用辭……………六六七
 諸(接續語)……………六五
 所有代名詞……………三五五
 しよう……………六
 爲よう……………三
 自用語……………四九、五七、六六、三五三
 職能……………二、五二〇、五二

「書紀古訓の『ハハリ』ハム(ハリ)の解釋」……………二四四
 書記的口語……………五七五
 叙想……………四七八
 叙想段……………四七八
 叙想法……………四七九
 叙想法相當句……………四七九
 助詞(第二編第十二章)……………六五五
 助詞……………四四四、四四七、四四七、四四七、五二七、五二七、五二九
 助辭……………五八、七六、三九九
 「助辭音義考」……………七六六
 助詞から轉成した感動詞……………四二六
 助詞から轉成した接續詞……………四二二
 助詞の位置……………六五七
 助詞の介在……………三〇六
 助詞の觀念上(意義上)の特質……………六五五
 助詞の形態上の特質……………六五四
 助詞の職能……………六五七、六五七
 助詞の「と」で指定助動詞……………三四
 「で」と形容詞語尾「で」……………三四
 助詞の特質……………六五四

助詞の分類(第二編第十二章第二節)……………六五六
 助詞の分類……………六五六、六五六、六六〇、六六〇、六六三、六六三、六六四、六六四、六六六、六六六、六六八、六六八、六六八、六六八
 助詞の本義(第二編第十章一節)第二章……………六五三
 助詞のもつ意味……………六五五
 助詞の連續性……………六五七
 助詞と助動詞との相違……………四三六
 助數詞(第二編第三章第三節)……………一〇三
 助數詞……………一〇三、一一六
 助數詞の上位の量數詞……………一〇三
 助數詞の外來語である時……………一一一
 助數詞の固有語である時……………一一一
 助數詞の種類……………一〇九
 助數詞の本質……………一〇七
 助數詞といふ名稱……………一〇九
 叙實……………四六
 敘述語……………一三四
 敘述動詞……………一三五

叙述の副詞……………	三九二
叙述様式副詞……………	三九四
叙述性を修飾限定しない副詞……………	三九五
女性名詞……………	三九六
所詮……………	三九七
女子用の言葉……………	三九五
助動詞(第二編第十一章)……………	四二六
助動詞……………	四四〇、四四六、四四九、五〇一、五〇七、五八六、二五二、三〇八、四三六、五六四
助動詞が用言に連る場合……………	二六六
「助動詞「き」の連體形」……………	四四四
助動詞研究史……………	四四五
助動詞「しむ」の連用形が名詞として用ひられたもの……………	四四六
助動詞「す」「しむ」の命令形……………	四四四
助動詞「給ふ」の用法……………	四四六
助動詞「給ふ」は敬語「る」「らる」と重用されない……………	四四六
助動詞と助動詞との重り……………	四四六
あふ順序形式……………	四四四
助動詞と助動詞との連続(文語)……………	四四七、四四八、四四九
助動詞と助動詞との連続(口語)……………	四四七、四四八、四四九
助動詞と接辭との關係及びその區別……………	一七七
助動詞と接尾辭との區別……………	四三三
助動詞といふ名稱……………	四三六、四三〇、四三六
助動詞と動詞及び他の助動詞との連続(第二編第十一章第二十一節)……………	六三三
助動詞と動詞及び他の助動詞との連続……………	六三三
助動詞と動詞との連續……………	六四四、六四五、六四七
「助動詞「なむ」と「給ふ」……………	四三七
助動詞に活用に必要な理由……………	四三六
助動詞につく品詞……………	四三六
助動詞の意味の相違……………	四三二
助動詞の意味上の分類……………	四三〇
助動詞の活用と用法の研究……………	四三九
助動詞の形態上の分類……………	四三〇
助動詞の形態上の分類連續上の分類及び意義上の分類の關係……………	四三三
助動詞の語幹語尾……………	五七七
助動詞の種類(第二編第十一章第二節)……………	四三七
助動詞の種類……………	四三七
助動詞の定義……………	四三六、四三九
助動詞の特殊な連續現象……………	四三一
助動詞の「ない」と形容詞の「ない」……………	二九六
助動詞の文語と口語……………	四三七
「助動詞の分類について」……………	四三〇、四三三
助動詞の本義(第二編第十一章第一節)……………	四三六
助動詞の本義……………	四三三、四三六
助動詞の「らし」と接尾辭……………	四三〇
の「ら」……………	四三三
助動詞の連續上の分類……………	四三〇
助動詞は形式語……………	四三六
助動詞は活用する品詞……………	四三六
助動詞は獨立の一品詞……………	四三三、四三六
助動詞は品詞の區分より除き去るべきか……………	四三三
助動詞「やら」と助詞「やら」……………	五〇六
しらす……………	二九六
知らず語……………	五〇九
知らせ……………	五〇七
白鳥庫吉……………	二九四
「知らに」の「に」……………	五〇八
「知られる」が「知れる」となる時……………	五〇七
自立語……………	三〇
知りもせば……………	四三〇
使令助詞……………	四三七
「白かつ」と「白く」の關係……………	三〇
しらしめす……………	三〇

しらす……………	三〇
知らず……………	四三六
しらしめす……………	四三七、四三〇
しわざ……………	一七
作用の詞……………	四三
「し」を語幹と見る説……………	二七三
「し」を語尾であると見る説……………	二七三
身……………	四三三
親愛の意を表す連用形……………	五〇、六五、七〇
進行態……………	五〇、六五、七〇
人稱代名詞……………	八二
親切なり……………	六六五
親切に……………	六六五
進める……………	二二八
死んだ……………	六〇三
人代名詞……………	八二、八四、八六、八九、九三、九八、一〇四
死んだら……………	六三
「神皇正統記」……………	四八五
「新文典」……………	二四六
「新文典上級用」……………	一三七
「新文典別記上級用」……………	一三七、一三五、一三五
あふ順序形式……………	四四四
助動詞と助動詞との連続(文語)……………	四四七、四四八、四四九
助動詞と助動詞との連続(口語)……………	四四七、四四八、四四九
助動詞と接辭との關係及びその區別……………	一七七
助動詞と接尾辭との區別……………	四三三
助動詞といふ名稱……………	四三六、四三〇、四三六
助動詞と動詞及び他の助動詞との連続(第二編第十一章第二十一節)……………	六三三
助動詞と動詞及び他の助動詞との連続……………	六三三
助動詞と動詞との連續……………	六四四、六四五、六四七
「助動詞「なむ」と「給ふ」……………	四三七
助動詞に活用に必要な理由……………	四三六
助動詞につく品詞……………	四三六
助動詞の意味の相違……………	四三二
助動詞の意味上の分類……………	四三〇
助動詞の活用と用法の研究……………	四三九
助動詞の形態上の分類……………	四三〇
助動詞の形態上の分類連續上の分類及び意義上の分類の關係……………	四三三
助動詞の語幹語尾……………	五七七
助動詞の種類(第二編第十一章第二節)……………	四三七
助動詞の種類……………	四三七
助動詞の定義……………	四三六、四三九
助動詞の特殊な連續現象……………	四三一
助動詞の「ない」と形容詞の「ない」……………	二九六
助動詞の文語と口語……………	四三七
「助動詞の分類について」……………	四三〇、四三三
助動詞の本義(第二編第十一章第一節)……………	四三六
助動詞の本義……………	四三三、四三六
助動詞の「らし」と接尾辭……………	四三〇
推量の助動詞「う」……………	六〇
「たらう」「せう」……………	六〇
推量の助動詞「けむ」の成立……………	五二九
推量の助動詞「けむ」の用例……………	五二九
推量の助動詞「もうた」「うです」の用法……………	六二二、六二四
希望の助動詞「たかり」……………	五三
希望の助動詞「たし」の發生……………	五三〇
推量の助動詞「たらう」「せう」……………	六〇
「たらう」の活用と連續……………	六〇
推量の助動詞「たらう」「せう」の用法……………	六〇
推量の助動詞の種類……………	五二二
推量の助動詞の種類……………	五二二
推量の助動詞の本義……………	五二二
推量の助動詞「へかり」の用法と連續……………	五二七
推量の助動詞「へし」と形容詞……………	五二四
推量の助動詞「へし」の副詞形とその音便……………	五二五
推量の助動詞「へし」の用例……………	五二四
推量の助動詞「らむ」……………	五二二
推量を表す「う」「よう」と……………	五二二
推量の助動詞「う」……………	五二二
推量の助動詞「らむ」……………	五二二
推量を表す「う」「よう」と……………	五二二

「らしい」との差…………… 六〇六

数…………… 二七

数(接頭語)…………… 六〇

数を表す名詞…………… 一〇一

数詞(第二編第三章)…………… 一〇一

数詞…………… 四八、四九、五〇、五〇六、一〇七

数詞と名詞から出来た名詞…………… 二九

数詞と名詞との職能上の差…………… 一〇六、一〇七

「数詞について」…………… 二四

数詞の根本的特質…………… 一〇一

数詞の種類(第二編第三章第四節)…………… 二二

数詞の種類…………… 二二

数詞の定義…………… 一〇一

数詞の複合する時…………… 一〇九

数詞の副詞的用法…………… 一〇六、一〇七

数詞の副詞法…………… 一〇六

数詞の本義(第二編第三章第一節)…………… 一〇一

数詞の本源…………… 二七

数詞の本體…………… 一〇九

数詞のみのものつ特質…………… 一〇三

数詞の用法(第二編第三章第二節)…………… 一〇一

数詞の用法…………… 一〇一、一〇三、一〇四、二八、三〇、三一

数詞條説(第二編第三章第五節)…………… 二六

「数詞論」…………… 二四

数詞をふくむ名詞…………… 二九

すがら(副詞)…………… 三九

直ぐ…………… 三六、三五、三六、三七、三七

すげむ…………… 五三

すけり…………… 五三

少し(副詞)…………… 三〇七

少し(形容詞)…………… 二七、三〇七

少し(数詞)…………… 二七、三五、三五

少し…………… 三〇

少しの…………… 三〇

頗る…………… 三〇、三三

「す」さす「しむ」の活用と連続表…………… 四三

「す」さすの發達…………… 四三

鈴木服…………… 四三、五九、六六

Standard language…………… 三六

すつと…………… 三〇、三七、三五

すて…………… 六三

既だ…………… 三三

既で…………… 三三

既に…………… 三三、三四、三三

「す」と「し」との相違…………… 三〇九

「す」に係助詞「は」の連つて濁音化したもの…………… 三〇

「す」の活用形の「な」に…………… 三五

すは…………… 四三

すは…………… 五五、七四、七五

「すは」の解釋…………… 五五

すはや…………… 四三

済ませる…………… 二九

すまひ…………… 五二

すら(副助詞)…………… 七三、七四、七五、七六、七六、七四

すらすらと…………… 三七

「すら」と「だに」の區別…………… 七四

するから…………… 八二

するが…………… 四四

すると…………… 四三、四三

するに…………… 四四

するを…………… 四四

すれども…………… 四四

すれば…………… 四四

居言…………… 四六

「す」を語尾にもつ使役の助動詞と四段活用未然形に使役の「す」のついたものとの區別…………… 四四

寸(接頭語)…………… 六九

すんば…………… 五六〇

【セ】

ぜ(終助詞)…………… 八三

聲音の變化…………… 二九

成語が古語を保存する現象…………… 四三

正格活用五種…………… 一八、二四

靜辭…………… 四六、四七

靜止性…………… 二四

靜助辭…………… 六五三

「醒醉笑」…………… 二六

正體言…………… 五〇

正副體詞…………… 八九

西部方言…………… 三三

せう…………… 三三

爲う…………… 三三

「小學日本文典」…………… 四七、五〇、四三六

小生…………… 八六

悄然と…………… 三九

「爲う」と「爲よう」…………… 六〇四

「抄物」…………… 一六、二六、一九七、四九三、五三三、五七六、五九〇、五九七、五九八、五九九、六〇四、六二六、六二六、六三〇、六三三、六四三、七四六

「せさす」と「さす」…………… 四五九

せさせる…………… 五七六

せす…………… 四六七

拙(接頭語)…………… 六九

節…………… 七七、七三

接辭…………… 元、四〇、四五、六〇、六二、七二、七三、七三

接辭と單語との差異…………… 三五、四三

接辭と單語との連接關係…………… 元

接辭を加へた複數…………… 六四

拙者…………… 八六、九三

接辭…………… 三四五

接續言…………… 四七

接續語…………… 四〇五、四〇六

接續作用…………… 四〇四

接續詞(第二編第九章)…………… 三九七

接續詞…………… 四四、四七、四八、四九、五一、五七、五八、一三三、三三七、三五七、三七七、三九二、三九三、三九四、三九六、三九七、四〇四、四一七、四六六

接續詞が獨立語として用ひられるものと用ひられぬものとの區別…………… 四九

接續詞的助詞…………… 六五

接續詞で觀念語でないやうにみえるもの…………… 四〇五

接續詞と副詞の差異…………… 四〇五

接續詞に轉成した形容詞…………… 三〇二

接續詞の獨立語として用ひられる場合…………… 四〇六

接續詞の作用…………… 四一四

接續詞の職能…………… 四二四

接續詞の種類…………… 四三〇

接續詞の成立…………… 四三

接續詞の本義(第二編第九章第一節)…………… 三九七

接續詞の用法…………… 四〇六

接續詞の用法と種類(第二編第九章第二節)…………… 四〇六

接續詞は觀念語で形態の變化なし…………… 四〇五

接續詞は語を接續しない…………… 四〇〇

接續詞發達の理由…………… 四〇四

接續詞は一つの品詞と認めなければならぬ…………… 四〇四

接續詞は文を接續しない…………… 三九七

接續詞否定説…………… 四〇二

接續詞否定説の反駁…………… 四〇三

接續詞條説(第二編第九章第三節)…………… 四一三

接續助詞(第二編第十二章第六節)…………… 七六六

接續助詞…………… 元、元、六三、六四、六五、六七、六九、七〇、七四、七四

接頭辭…………… 三七六、三九四

接頭副詞…………… 三九三、三九四

接頭副體詞…………… 三九四

説動用詞…………… 四六

切に…………… 三九

接尾語…………… 四四、四五、六七、六八、七〇、七四、九四、一〇九、一一八、一三六、一三六、一三七、一三六、一三五、一三五、一三五、一三五、一三五、一三五

「接尾語」くなく、らく、まく、けく…………… 二六〇

接尾語化…………… 一五四

接尾語化せぬ複合動詞…………… 一五四

接尾語の添加……………一八四
接尾語と名詞……………一〇九
接尾語をつけて名詞とな
る語幹……………三七九
接尾語をつける代名詞……………八一、
九二、九四
接尾語をとつて動詞とな
る語幹……………三七八
接尾辭……………一七六、四三三、四三
説明存在詞……………一三三、二〇三、二〇八、
五三三、五三九、五三三
説明的文法……………一九
説明的文法(Explanatory
grammar)……………一五
説明動詞……………一〇〇、三三三
説容體詞……………四三
説話……………四三
瀬戸内海方言……………三三
せぬ……………六三
是非……………三九
せまします……………五〇八
せり……………五〇八
せる(助動詞)……………一四
せる(使役)……………五七五
「せる」「させる」「しめる」
の活用と連続表……………五七五
「せる」「させる」をサ行四
段活用に類推して用ひる
こと……………五七五
賤(接頭語)……………六九
前位語……………三四五
前行詞……………四一九
先行副詞……………三九三
先生(接尾語)……………六六
前後後用……………五三
選擇的接續詞……………四二
Sentence equivalent……………四六
Sentence word……………四六
前置詞……………二五七、三三三
前篇……………二九
前用後體……………五三
【ウ】
そ……………八四、八六、八七、八八、九一、九三、九
六、四一、三五四、三五五、三五六、三六
二(助動詞)……………一〇〇
そ(係助詞)……………七四九
粗(接頭語)……………六九
其……………一六四
ぞ……………三六
ぞ(助詞)……………三六
ぞ(終助詞)……………七六
ぞ(係助詞)……………四七、六七、七七、七三
八七、四一、七四、七五、七五、七三、
七四、七七
ぞ(間投助詞)……………八三
ぞ(準體助詞)……………八三
ぞ(い)……………九六
ぞ(う)……………三三
総合的研究……………一一
其……………三三
促音……………九七、三三、三〇、二九
促音の記號……………二五
促音の發音……………二五〇
促音便……………二〇五、二四六、二五〇
促音便(形容詞)……………三〇六
促音便の略形……………二五三
足下……………八七
俗語……………九七
屬性が存在する……………一三〇
屬性詞……………六
屬性副詞……………三九、三九三
屬性名詞……………七一
屬性を有する……………一三〇
そこ……………〇、八四、八七、九一、九三、
九七、五六
そこいら……………九三、九七
そこ(こ)……………九七
そこで……………三七、四三、四三
そこに……………三七
そこら……………九三、九七
そして……………四〇七、四二
そち……………八四、九七
そちら……………九三、九七、九
九
そつと……………三九
そつち……………三九
「ぞ」「と」「そ」との區別……………七五
そなた……………八四、九三、九四、九
六
その……………八七、八八、九一、九六、四三、
三、四四、
三五五、三五六、三六三、三六四、
三六五、三六六、三六七、三六八、
四一、四三
そのおかた……………九三、九五

そのおひと……………九五
そのかた……………九三、九五
そのかたがた……………九四
そのひと……………九三、九六
そのひとたち……………九四
そのひとら……………九四
そのもと……………八七
そのもの……………九六
「ぞ」「や」「何」の係……………七五
そむ……………一四一、一五〇、三三六、
三三八
抑もの……………三三
そやつ……………八七、九六、三六
そら……………四三
そら(副助詞)……………七六
そろ……………四七三
そろそろ……………三七〇
それ……………七九、八〇、八四、八八、九一、九三、
九六、九八、三五四、三五六
それ(感動詞)……………四三、四三六
其……………三九三
それがし……………八六、八七
それから……………三六七、四二一、四二三
それ位……………三六六
それ式……………三六六
それ者……………三六六
それだ……………四三
それだから……………三六七、四三三、四三
それなのに……………四二、四三三
それだけれども……………四三
それで……………三六七、四三三、四三
それで(接續詞)……………三六七、四三三、
四三三、四三三
それですが……………四三
それですから……………四三、四三三
それですけれども……………四三
それですのに……………四三
それでは……………四三、四三三
それでも……………四三
それとも……………三六七、四三三、四三
それなら……………四三
それに……………三六七、四三三、四三
それは……………三六七
それも……………三六七
それら……………九三、九七
それを……………三六七
尊(接頭語)……………六七
尊敬……………四六五
た……………八四
た(「たい」の語根)……………六三〇
た(過去)……………一〇一
た(完了)……………一五九、三三六、三六
三
だ……………三三、三三三、三三四、三三
四、三三三、三三三、三三三、
三三三、三三三、三三三、
だ(指定)……………四三、六三、六三、
六三、六三、六三、六三、
九、九三、九三、九三
だ(過去)……………六三、六三
だ(形容動詞語尾)……………三三、三三
だ(特殊助動詞)……………五三
だ(「た」の音便)……………六三
たい(希望)……………一五九、六三、六
三
第一卷……………二九
第一種活用(形容詞)……………三三
第一種變化(動詞)……………一八六
第一人稱文と敬語助詞……………三三
第一類の助詞……………六六、六六
大概……………三九〇
太間秀吉……………一〇九
待遇の助動詞……………四六五
待遇法……………三三
大兄……………八七
體言(第二編第一章第一
章)……………四七

節)..... 五九

體言..... 四四、四五、四九、五五、五九、六〇、六二、六六、六九、七〇、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

「大言海」..... 二五五

體言・形容詞・助詞につく助動詞..... 四四五

體言代用の「の」..... 一六五

體言の意味を加へる「く」..... 五九

體言等につく「らしい」と活用言につく「らしい」..... 六〇

體言と接續詞との區別..... 四〇五

體言にかゝる補語..... 七六

體言に「さう」の附いた例..... 六二

體言の下に形式用言及び助動詞のついた場合..... 七〇

體言にすぐ使役助動詞が連續するといふこと..... 五七

體言に屬する品詞..... 六〇

體言につく助動詞..... 五九、六〇

「體言の格」..... 六三

體言の共通的特性..... 六〇

體言の資格..... 一六、二九、三〇、三九

體言の立ち得る格..... 八六

體言の資格を得る節..... 一六五

體言の資格を有つものと體言になつたもの..... 六〇

體言の省略..... 二九二

體言の通有性..... 一〇三

體言の有つ文法上の特質..... 五九

「體言の用法」..... 六三

第五種の助詞..... 六三

第三種變化(動詞)..... 一七〇

第三終止..... 一七〇

第三人稱文と敬語動詞..... 二四五

第三種の助詞..... 六九、六二、六三、七六

第四終止..... 一七二

對稱(And person)..... 八三、八五、八七、九三、九四

大した..... 三六、三四、三七

大して..... 六一

第四種の助詞..... 六三、六三

大切な..... 三六、三三

大切に..... 三二

泰然と..... 三〇、三九

大抵..... 三九〇

對等的結合..... 四一

體と用..... 五九、二二

第二種活用(形容詞)..... 二六

第二種變化(動詞)..... 一八六

第二終止..... 一九一

第二終止法(形容詞)..... 一九一

大日本帝國..... 一九九

「大日本方言地圖」..... 三三

第二人稱文と敬語動詞..... 二四五

第二名詞法..... 一六四

第二種の助詞..... 六九、六二、六三、七六

大の..... 三六、三九、三三、三四

體の詞..... 四〇

代副詞..... 三九三

代副體詞..... 三六四

大分..... 七五

「太平記」..... 四八五

大變..... 三九五、三九〇

代名言..... 四七

代名詞(第二編第二章)..... 七九

代名詞..... 四四、四五、四七、四八、四九、五一、五二、五三、五五、五九、六一、五五、五九、六一

代名詞から轉成した感動詞..... 四二六

代名詞が連體格に立つ場合..... 三三五

代名詞といふ名稱..... 七九

代名詞と敬語との關係..... 八三

代名詞としての獨立用法を持つ「こ」と「たぬ」..... 三五

代名詞と名詞との差..... 八〇、八一

代名詞に助詞のついたものから轉成した接續詞..... 四三

代名詞に助動詞のついたものから轉成した接續詞..... 四三

代名詞の指示..... 八〇

代名詞の種類(第二編第二章第二節)..... 八一

代名詞の種類の轉用..... 九

代名詞の「稱」..... 八二

代名詞の稱格(第二編第二章第三節)..... 八二

代名詞の稱格的區別..... 八三、九一

代名詞の定義..... 七九

代名詞の疊語..... 八一、九四

代名詞の稱格的分類表..... 八三、八四

代名詞の性質..... 八三

代名詞の性・數の區別..... 八一

代名詞の複數を表す形式..... 八一

代名詞の分類..... 八一

代名詞の分類表..... 八一

代名詞の本義(第二編第二章第一節)..... 七九

對立助詞..... 八四

對立節..... 四〇七

對立的接續詞..... 七六

當然の意味を表す口語の「へん」..... 五九

當然可能の打消を表す「よ」..... 五三

當然の「よ」の活用・連續..... 六三

當然・適當の「べし」..... 五三

當然の助助辭..... 六九

當(接頭語)..... 三五九、三六三、三四四

堂々たり..... 三三、三四、三五、三九

堂々と..... 三七八

「堂々と」「確乎と」は副詞か..... 三四三

道話..... 六二

たが..... 三五五、三六三、三四四

だが..... 四〇五、四〇八、四一三

高うす..... 三〇五

たかつた..... 六九、六〇

高橋龍雄..... 五四、五四、四三

「た」が四段活用の動詞に連る時..... 六〇

だから..... 四〇五、四一、四三

たかり(希望)..... 五六

抱かる..... 五六

たがる..... 六九、六〇、六二

たがるの活用..... 三二

たく..... 六九、六〇

宅..... 六九

たくさんな..... 三六、三三

たくつて..... 六〇

たけ..... 七七

だけ(副助詞)..... 七六、七〇、七〇、七三、七三、七四、七五、七六、七六、七六、七六

武田祐吉..... 二六六、八三

だけでなく——までも..... 七二

だけでも..... 七三

だけなりと..... 七三

だけれど..... 四一三

だけれども..... 四〇五、四一三

たし(希望)..... 一五九、五六、六九

たし(接尾語)..... 三〇、五二

「たし」「たかり」「まはし」「まはしかり」の活用と連續..... 五九

他稱(3rd person)..... 八七、九四、九五

助かる..... 五六

他説..... 六二、六四

他説・傳聞の「さうだ」「えうです」の活用..... 六二

た..... 三五

唯..... 三〇

但し..... 三九七、三九八、四〇二

「正し」と「正せし」..... 四八五

たゞちに..... 三九一

たゞの..... 三九、三九

「徒」の係..... 七三

たち(接頭語)..... 一三

たち(接尾語)..... 六五、七、九四

橋宗利..... 二六〇

橋守部..... 六五、七〇

たちまちに..... 三九、三九

忽ちの..... 三九

たつけ..... 六〇

だつけ..... 六〇

たつた..... 三六、三六、三七、三七

だつて(係助詞)..... 七四

だつて(接續詞)..... 四三

たてまゐる(動詞)..... 三二、四二

たてまつる(助動詞)..... 四七

たてまつる(助動詞)の活用..... 四七

他動詞..... 六三、六四

他動詞が自動詞となる現象..... 五六

他動詞とは如何なるものか..... 三六

他動詞のみで自動詞のない動詞..... 三三

だとも……………七六八
たとひ……………三九三、三九四
たふ……………一九三
「たとへ」と「たひ」……………一九三
田中義廉……………四七、一四九、一四〇、四三六
だに(副助詞)……………七三、七五、七六、
七七八、七九、七四、七七、七八
谷川士清……………一四九
だにも(副助詞)……………七三
だの(並立助詞)……………八六
「だ」の成立……………八六
だのに……………四〇五
たび……………七七
たひらかに……………七六
たぶ(動詞)……………二四三
たぶ(助動詞)……………四六九
多分……………七、七三
たべる……………二四三
たよ……………三七四
「玉簪」……………五〇六
たまさかに……………七九
たまに……………七四、七九
たまの……………三六、七四

「玉の緒線分」……………四三
たまはる……………二四〇、四三
たまふ(動詞)……………二六、三〇、五二
給ふ(敬語助動詞)……………四六、四六、
四七、五八
給へ(敬語)……………五八
ため……………七七
爲……………四〇
爲に……………四三
だも(副助詞)……………七三
だら……………三〇
太郎……………一九
だらう(推量)……………二一
「たらう」と「せう」……………六二
「たらう」(接尾語)……………三〇
たり(指定)……………三、三三、四、三〇
九、四九、七九、四三、四三、
四三、五九、七〇
たり(完了)……………一九、三〇、三〇
たり(並立助詞)……………八、八三
たり(形容動詞の語尾)……………三三
たり(形式用言)……………五〇

たり(特殊助動詞)……………五五
たり活の語尾と副詞の語
尾……………三三
たり活の「と」……………三九
たり活用……………三三、三七、三九
「たり」の用法と連続……………五
足りる……………二七
たる(完了)……………六八
足る……………二五
たれ……………八、九四
だれ……………九二、九四、九六
だろう……………三三
だわ……………七四
段……………七七
單音文字……………一四
斷句……………四
斷言の副詞……………三九
單語……………三、三七、三九、四三、四四、
四九、五七、五八、六〇、四七
單語構成の要素……………四〇
單語と單語との連接關係……………三
單語の位置……………四〇
「單語の分類に関する私見」……………四〇

單語の分類表……………四〇、五五、五六、
五七
單詞……………四一
單純語……………四〇
斷止助辭……………九七
男性名詞……………六三、六四
斷然と(形容動詞)……………三九、三〇
單體名詞……………七
斷定の助動詞……………五九
斷定の「べし」……………五三
單獨で假定を表す「む」……………四九
單獨で文として用ひられ
る感動詞……………四三
單獨用法……………一五、二〇、六二、六七、
一〇一、七三、九六、一七七
單獨用法と連續用法との
差……………一七
單なる自動詞……………三四
單文……………四〇
談話環境……………五三

【子】
ち(接尾語)……………八四、九三、九七、一〇一、
一〇二

ち(數詞)……………二二
抽象的數……………二二
抽象名詞……………七
Chamberlain……………一九、二
畜生……………四三
地方的方言(Local dialect)……………三
小さい……………三
小さだ……………三
小さな……………三六、三六、三六、
三六
ちまつた……………六〇
ちまふ……………六〇
ちや(指定)……………三、四九、六〇
丁度……………三六、三六、三六、
三六
ちやが……………四
ちやつた……………六〇
ちやふ……………六〇
ちやほほに……………四
ちやろう……………三
中國四國の方言……………五五
中國方言……………四、七六
中古語……………五三

中古の連續語法……………四八
中止形……………二六
中止形(動詞)……………一五
中止形(形容詞)……………三二、三三、
三六、三六、
二九、二九
中止形(口語形容動詞)……………三三
中稱……………八三、八六、
八六
中止法……………三三
中止法(形容動詞)……………三九、三三
中止法(Participle Present)……………一五
「忠臣にして」の「し」と「
てしまへり」の「し」……………五四
中世口語の所産……………三三
中性名詞……………六三、六四
「中等新國文典別記」……………一九五、
一九五
除外例……………六
ちよる……………六〇
ちよいと……………四六
重複して副詞となる語幹……………三九
直感直叙……………四七、四七、
四七
直寫的推量……………五七

直接表象……………四七
ちよつと……………三九
一寸した……………三六
陳述關係……………七四
陳述語……………四九、五七、五八、
六〇、三三、
四三、七六
陳述語と副用語との相違……………五三
陳述作用……………三七
陳述敘述と活用……………四七
陳述性副詞……………三五
陳述の基礎となる語……………三
陳述の作用……………三〇、三三
陳述の主體となる語……………三
陳述の副詞……………三六、三九
陳述の副詞の分類……………三九
陳述副詞……………三七、三九、
四二、
四二

【つ】
つ(完了)……………一五、三三、
五〇、
五〇、
六四、八三、
八三
つ(格助詞)……………七〇
つ(語尾)……………一〇九、
一一
ついたち……………一九

ついで……………四二
つか(係助詞)……………七六
つかまつる(動詞)……………三三、
三五、
五九
仕る(敬語)……………五九
つかまつる(補助動詞)……………三
づから(接尾語)……………九
突かんず……………五〇
月足らず……………五九
次に……………四三
月の名稱……………二九
附……………一七
つくづく……………三六、
三九
土淵英……………二六
土ふます……………五九
つ(接續助詞)……………八三
つ(副助詞)……………七三、
七三、
八三、
八三
つと……………四
つと……………三九
都度……………七七

同格連用……………	一三三、一三四、一四五、 二八二、二八四、二八五
同格連用と修飾連用との 區別……………	一三三、一三五
同格連用と修飾連用との 識別法……………	二六四
「等閑に附された一品詞」……………	二六四
東京語……………	二六四、二八八
東京の俗語……………	二六四、二八八
東京方言……………	二六四
同形の自動詞で二様の活 用をなすもの……………	二六六
同形の他動詞で二様の活 用をなすもの……………	二七〇
同形の量數詞と順位數詞……………	二七六
東西兩方言區別說……………	二七六
東西兩方言の特長……………	二七六
動作觀念の重複……………	四一〇
動作詞……………	四一〇
動作性形式用言……………	四一〇、四一七、四二〇
動作性推量……………	四一七
動作存在詞……………	一三三、一三〇、一三〇、一三〇
動作存在動詞……………	八、五八、五三
動作態……………	二〇八、五三
動作態の意味……………	五〇〇、五〇一
動作態の助動詞……………	四七四、五〇〇
動作と状態との區別……………	二四、三八
動作と名付けられるもの……………	五六
動作(第二編第四章)……………	二〇〇
動詞……………	四、四、四、四、四、四、五、 七、六、三、三、三、三、二、二、二、三
動辭……………	二、五九
動詞が他の語と熟合して 名詞になる場合……………	一六六
動詞が單獨で名詞になる 場合……………	一六六
動詞が副詞的修飾節中の 述語をなす時……………	一六六
動詞から轉化した助動詞……………	四七〇、 四七二
動詞から轉成した接續詞……………	四七三
動詞活用形の音便の種類……………	二四六
動詞活用形の研究……………	一四九
動詞活用形の性質……………	一七六
動詞活用形式……………	一四八
動詞活用形の種類……………	一四九
動詞活用形の特徴……………	一五一
動詞活用形の連續用法を 持つわけ……………	一七六
動詞活用形の用法……………	一五〇、一七六
動詞活用の種類……………	一四九、一七六
動詞活用の種類の研究……………	一八四
動詞形容詞一元論……………	二六九
動詞語尾變化の現象の起 り方……………	一四四
「動詞時制の研究」……………	四七五、四九二
動詞種類文語口語對照表……………	一八三
「動詞叙法の研究」……………	四七六
どうして……………	三九二
同時的列叙……………	八〇四
動詞性の助動詞……………	四三三
動詞性を帯びた名詞……………	一五七
動詞「給ふ」と助動詞「給 ふ」……………	四六八
動詞疊語の副詞……………	一六三
動詞と形容詞との區別……………	一三三、 一三六、一三五、一四〇、一五三、一六三、一六六、 一六八、一七〇、一七二、一七三
動詞と助動詞との區別……………	一三六、 一四一
動詞と助動詞・助詞との 接續……………	一五二、一五三、一五九、一六〇、一六六、 一七〇、一七二、一七三
動詞と助動詞との差……………	一五七
動詞と熟合したサ變……………	一〇四
動詞と助動詞との連續……………	四二
動詞と助動詞の連用形と の間に助詞「て」を加へる 時……………	五八八
動詞と他語との連續關係 に於ける通則……………	一七
動詞と同形の形式語……………	一六
動詞の一元論……………	一九
動詞の音便(第二編第四 章第八節)……………	二四五
動詞の音便形……………	二四八
動詞の基本の形……………	一六〇
動詞の活用……………	一三三、一三〇、一三〇、 一三〇

動詞の活用形……………	一七六、一八四
動詞の活用形式……………	一八〇
動詞の活用組織の發達……………	一八四
動詞の活用組織は二格九 種……………	一八四
動詞の活用方面の考察……………	二二三
動詞に敬意を加へる場合……………	二三八
動詞の形態(第二編第四 章第三節)……………	二四二
動詞の形態の特質……………	二四二
動詞の形容詞的修飾語……………	一四五、 一六二
動詞の原形……………	一八四
動詞の語尾……………	一一二
動詞の語尾の假名遣……………	一一二
動詞の語尾變化の現象……………	一七六
「動詞の相に關する考察」……………	二二三
動詞の終止形から轉成し た名詞……………	七四
動詞の職能……………	一六三、一七六
「動詞の性質上の分類」……………	二二三
動詞の重用……………	二二三
動詞の轉換した名詞……………	一六六
動詞の轉成した副詞……………	一五九
動詞の特質……………	一三三、一三五
動詞の已然形の特種用法……………	一七三
動詞の分類表……………	一四四、一五五
動詞の本義(第二編第四 章第二節)……………	二二五
動詞の未然形……………	二二六
「動詞の名稱とその分類」……………	一三五
動詞の連體形が準體言に 用ひられた場合……………	一六六
動詞の連用形……………	一三三、一三三
動詞の連用形が助動詞に 連る場合……………	一五四
動詞の連用形が用言に連 る場合……………	一五四
動詞の連用形から轉成し た名詞……………	七四
動詞の連用形の用法……………	一六〇
動詞は觀念語で用言……………	一三五
動詞は作用を表す用言……………	一三七
動詞は状態を表す用言……………	一三七
動詞は存在を表す用言……………	一六
動詞は動作を表す用言……………	一六六
動詞命動詞令形の問題……………	一七三
「動詞用ふ」について……………	一九五
動助辭……………	一九七
動詞連體形下の助詞……………	一六三、一六三
動詞六種の活用形……………	一五二、一七五
どうぞ……………	五九二
どうた……………	三四〇、三六〇
どうで……………	三三九、三四〇
東條義門……………	四四九、四九二、 四三六、四四四、四五五
東條操……………	三三、三四
動的言語現象……………	ハ
どうです……………	三四〇
どうなら……………	三四〇
東部方言……………	三三
東北の方言……………	三三、三五
どうも……………	三四四
同列接續詞……………	七八六
とかくの……………	三五九、三七四
富樫廣隆……………	四五、一四九、四六、六五四
時……………	二〇、二七、五三、二八、四九
時技誠記……………	二六七
時の助動詞……………	四四二、四四四、四七九
時の助動詞「た」の發生……………	四〇一
時の助動詞の本義……………	四七五
時の分類……………	四七五
時を表す名詞……………	一〇六
特異なる副詞……………	三九二
「時代言語の研究」……………	六三六
徳川時代の語法……………	四九
徳川時代の連續語法……………	四八四
特殊化……………	三五六、三八八、三九〇
特殊語……………	二六五
特殊假名遣……………	一七〇、一七
特殊活用……………	三三
特殊活用の動詞……………	三六
特殊形容詞……………	三九、五三
特殊助動詞……………	四四、五三、五三、 五三、五三、五三、五三、 五三、六〇、六二、六二、七三
特殊助動詞「なり」の特殊 用法……………	五四六
特殊成分……………	四一六
特殊動詞……………	二五七、三九、五三〇
特殊の語格……………	一五六
特殊文……………	二九九、四六三、四三六

特性なき助動詞……………四六、四三九
 徳田清……………二六、三九、四四、五三、五九、
 五九、五九、五三、五四、五〇、七〇
 八、七五、七〇、八三
 獨用語……………五七、六〇、五二
 獨立格……………六三
 獨立語……………一〇三、四〇五、四〇六、四一
 八、四三
 獨立語として用ひられる
 接續詞……………四〇八
 獨立語として用ひられる
 感動詞……………四二
 獨立詞……………六六
 獨立性をもち語幹……………二七一
 獨立に文の成分となる詞……………五七
 獨立に用ひられぬ動詞……………一五四
 獨立の名詞となる語幹……………二七八
 どの(代名詞)……………九三、九七、三六
 どの(副助詞)……………七四
 ど〜し〜……………九三、九七
 ど〜そ〜……………九三、九七
 どころ……………九三、九七

どころ……………七六七、四〇五
 どころ(副助詞)……………七四
 どころが……………一四四、四三
 ところが(接續詞)……………八六
 ところが(接續助詞)……………八〇四、八〇五、
 八〇六
 「土佐日記」……………六三
 土佐方言……………三三
 ども……………九七
 どちら……………九三、九七、九八
 どつこい……………四三
 どつち……………九三、九七
 どつと……………三六
 どなた……………九三、九四、九五
 どの……………八七
 どの……………八八、九六、三五四、三五、
 三五、三六、三六、三六
 どの(接尾語)……………六七、五〇
 どのおかた……………九三、九五
 どのおひと……………九五
 どのかた……………九三、九五
 どのかたがた……………九三、九五
 どのひと……………九三、九五

どのひとたち……………四
 どのもの……………九三、九五
 問はず語……………五九
 飛べる……………二九、五七
 通り……………七七
 富む……………七
 とも(終助詞)……………八四
 とも(接續助詞)……………一六一、二、三
 五、三九、七九、七三、七九、七九、
 八〇六
 ども(接尾語)……………六五、七〇、九四
 ども(接續助詞)……………二七、二九、三〇、
 三九、七四、七五、七九、七九、八〇
 六八、八〇、八二、八六
 與に……………三三
 どやつ……………九三、九六、三六
 とり……………一四
 とり〜の……………三〇、三二
 とる……………六七
 どれ……………六七
 どれ(代名詞)……………九三、九六、九七
 どれ(感動詞)……………四三、四四
 取れる……………五七

とを(数詞)……………二二、二二
 どん(接尾語)……………六七
 豚(接頭語)……………六九
 飛んだ……………三六、五七、六〇
 「飛んでもない」の「ない」……………三六
 どんな……………三六、三四、三三、
 三六、三六、三六
 どんなど……………三三
 どんなで……………三三
 どんなに……………三三
 どんなら……………三三

【ナ】
 な(代名詞)……………八三、八四
 な(格助詞)……………七〇
 な(副助詞)……………三九、三九
 な(指定)……………六五、六六
 な(間投助詞)……………四三、五九、五九、
 八〇、八六、八二
 な(係助詞)……………六五、七三、七四、
 七二、八四
 な(終助詞)……………三〇、三六、七六、
 八三、八三、八四、八五
 七

な(形容動詞の語尾)……………三三、三六、
 ナ……………四、五
 なあ(感動詞)……………四三
 なあに……………四三
 ない(形容詞)……………三三
 ない(補助形容詞)……………三三、三六、
 三三、三六、三六、三六、三六、
 二、三三、三六、三六、三六、
 三四、三四、三四
 内地方言……………三三
 ないで……………三三
 「無い」の假定形……………三三
 「ない」の語源……………四一
 中島廣足……………六四
 永田吉太郎……………三四、三五
 なかつた……………三三、三六
 なか〜……………三三
 なか〜の……………三三
 中根淑……………四三、四三
 長野義言……………六四
 ながら(接續助詞)……………八三、八三、
 八三

なからう……………六七
 就中……………四一
 ナ行變格活用……………四三、八四、三〇
 ナ行變格活用表……………二〇七
 ナ行變格の撥音便……………二〇七
 なげねばならぬ……………三三
 無けむ……………三三
 なげらねばならぬ……………三三
 泣ける……………五三
 なければ(否定)……………三三、三三
 ない……………一〇三、五三
 無さう……………六五
 無さう……………六五
 無さう……………六五
 なさる(動詞)……………二五、三九、四三、
 三三、三五、三五、三五
 なさる(敬語)……………五〇
 なさる(補助動詞)……………五二、四一
 「なさる」の活用と連続表……………五二
 「なさる」のついてゐる動
 詞の上と「遊ぶ」のついて
 ゐる動詞の上……………五二
 なし(形容詞)……………七、六四、六四、
 三〇
 なし(接尾語)……………三〇

「なし」と「なし」……………四四
 「なし」を接辭とする形
 容詞について……………三〇
 寝す……………四六
 寝す……………四六
 寝せる……………四六
 寝せる……………四六
 など(副助詞)……………三三、七三
 「なな」の格……………三三、七三
 なた……………九三、九四
 なつた(否定)……………六四
 hot……………三九
 など(副助詞)……………三九、三三、三三、
 三四、三四
 など(副助詞)……………七三
 など(副助詞)……………七三、七三、七三、
 「な」と「な」の區別……………七三
 なな(数詞)……………二二、二二、二五
 なな……………二二
 ななそち……………二二
 なな……………二二
 ななつ……………二二、二二
 ななり……………五五
 なに……………八四、九三、九六、九三、二二、
 一七、七七
 なに(感動詞)……………四二

なにがし……………八七
 何卒……………三二
 何故に……………三二
 なにら……………九七
 「な」の語性……………七七
 名のらさね……………三〇
 なびかす……………四四
 なは……………四二
 尚……………四二
 なむ(係助詞)……………五三、三六、七四、
 七五、七五、七六
 南無三……………四三
 ナムシ(否定)……………六五
 「なむ」の三種……………七三
 「なむ」を希望の助動詞に
 入れる説……………五三
 なめらかに……………三九
 なも(係助詞)……………七三
 なやます……………四四
 なら……………三三、七七
 「奈良朝語法研究の中か
 ら」……………五五
 奈良朝時代の受身の助動

- 詞……………三三、四四九
- 奈良朝時代の敬語の助動詞……………四四、四六七
- 奈良朝時代の語法……………五〇、五七七
- 奈良朝時代の使役の助動詞……………四四、四四七
- 奈良朝時代の推量助動詞……………四六五、四六六
- 「らし」……………五二七
- 奈良朝時代の推量の助動詞……………五二四
- 詞「らむ」の連続……………五二四
- 奈良朝時代の尊敬の助動詞……………四六五、四六六
- 奈良朝時代の敬語助動詞……………四六六
- 「す」が動詞につきく時……………四六六
- 奈良朝時代の尊敬の助動詞……………四六五
- 奈良朝時代の「まし」……………五二四
- 奈良朝時代の未来の助動詞……………四六六
- 奈良朝に於ける「まをす」……………四七一
- 「奈良朝文法史」……………一八、六二、三三七、二〇〇、三三三、四八〇、四八二、四九七、五〇六、五一二、五一九、五二五

- 五、五八、七〇、七〇六
- ならばす……………四四九
- 並びに……………三三、三九、四〇、四〇八、四〇九、四一〇、四一一
- ならまし……………四九六
- なり(形容動詞の語尾)……………三三
- なり(副助詞)……………七三五
- なり(指定)……………三二、三三、三九、三七、一六四、四四二、二九二、三〇九、三二四、三三九、四三三、四三四、四三五、四三六、六三二、六三三、六三六、七三三、七三五
- なり(並立助詞)……………七三六、八八
- なり(特殊助動詞)……………五五五
- なり(形式用言)……………五五〇
- ナリ活の語尾と副詞の語尾……………三二二
- ナリ活用……………三三三、三三六、三三九
- 「なり」たりの活用と連続……………五五〇
- なりと(係助詞)……………七三三、七三六、七三五
- なりと(副助詞)……………七三五
- 「なり」の推定論……………五五三

- 「なり」の連體形「なる」……………五五三
- なる(指定)……………三七三
- なる(「といふ」の意)……………五四七
- なる(補助助詞)……………二四〇、二四二、五八五
- なるなり……………五五〇
- 「南留別志」……………一二三
- なるらう……………五五
- なれ……………八四
- なれども……………四一四
- なれば……………三七、四一四
- なればや……………七五八
- なれや……………七五八
- なん(係助詞)……………四八七
- Nonsense……………四一六
- 何ぞ……………三九三
- なんだ(指定)……………六三六
- なんだ(否定)……………三三、六四、六三五
- なんぢ……………八四
- 汝が……………三三三、三三六、三六四
- 汝の……………三三三、三三六
- なんです(指定)……………六三八
- 南蠻物……………三三
- なふ(否定)……………六三四

なんなり……………五五〇

【三】

- に(接尾語)……………九一
- に(形容動詞)……………三三、三九、三三三、三三五
- に(終助詞)……………八四〇、八四一
- に(並立助詞)……………八二八
- に(接續助詞)……………二〇一、二〇二、二〇三
- に(格助詞)……………九一、一三七、一五八、一六四、三一五、三三〇、三九八、六二二、六六三、六八
- にあり……………三三三
- 二様の活用をもつ動詞……………一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二
- 「似ます」と「似せさす」……………四三三
- 「似さす」と「似せさす」……………四三三
- にしが(終助詞)……………八三三
- にしが(格助詞)……………五九、八三三
- 「似しむ」と「似せしむ」……………四三三
- 「似せる」と「似せせる」……………五七八
- 二單語が一單語になつた動詞……………三九

「日鮮語比較研究」……………一九

- にて……………七〇、七〇三、七〇四
- にて(格助詞)……………六九七
- にてあり……………三三三
- 「に」で「は」形容動詞の語尾活用……………三三三
- 「に」と「は」語尾のある副詞用法をなす語……………三三四
- 「に」と「と」の異同關係……………六九三、六九四
- 「に」と「へ」の區別……………六八五、六八六
- になる……………二四、二四二、五八四
- 「になる」は一つの助動詞ではない……………五六六
- 「に」に通ふ「を」……………六八七
- 新……………二四
- 「日本口語法」……………三三、八、四九、五三、四七、五六、六四一
- 「日本口語法講義」……………二二、九五、三三、四七、六四、六九、八〇
- 日本語……………三三
- 日本語と歐洲語……………四七八
- 「日本書記」……………二六六、五〇

「日本書記通證卷一」……………一四九

- 「日本文學大系」……………四九二
- 「日本文學大辭典」……………三七
- 「日本文學・文法論・歴史物語」……………二九四、二九四
- 「日本文典」……………四七
- 「日本文法」……………二九三、三〇四、三〇六、四九二
- 「日本文法要論」……………二、二六、二六二
- 「日本文法概論」……………三五五、三五九
- 「日本文法學概論」……………四九、三九、三九七、四三三、四四四、四四二、五三九、五四二、五四五、六二二、七六六、八一九
- 「日本文法講義」……………四三、四九、二八、二九、三〇、三〇七、三〇八、二六三、二六五、三〇八、四一七、四四五、五三三、五三四、六六三
- 「日本文法史」……………一六、一八、二六、一八四、二七六、二九四、四三三、四七四、五〇七
- 日本文法新論……………一九、四九、一八四、六九七
- 「日本文法論」……………四六、五〇、七三、七八、一〇五、一〇七、一一七、一二三、一三五、一五

「日本文法論」……………五三三、五三三、五三五、五三九、五三七、五三五、三六二、三九二、元

- 「に」を「なり」の中止形と見るべき説……………五三四
- 認知的存在の區別……………四七五
- 【又】……………四七五
- ぬ(否定)……………三、一五三、三九六、四三三、六三三、六三四、六三五、八二八
- ぬ(完了)……………七、一五九、四八、四九六、五〇〇、五〇一、七五三、八三五
- ぬし……………八七
- ぬします……………四五四
- 「ぬ」と「ない」の使用に關する地方的分布……………六四二
- ぬに……………五八〇、七四七

「ぬ」の活用形と連続……………五〇五

- 「ぬ」の用例……………五〇五
- 【未】……………四三三、四三三
- ね(感動詞)……………四三三、四三三
- ね(終助詞)……………八四〇、八四一
- ね(間投助詞)……………三三〇、三三三、三三〇、八二二、八三三
- ねえ(感動詞)……………四三三、四三三
- ねがはくは……………二五九
- ねがふ……………五二二
- 猫入らす……………五九九
- 鼠入らす……………五九九
- 寝つろ……………五二五
- ねば……………三、五〇、七四七
- 殆る……………一九九、二〇〇
- ねんごろに……………三六九
- 年々……………六四
- 【八】……………七六
- の(形式名詞)……………七六
- の(終助詞)……………八四四、八四五
- の(並立助詞)……………八二八、八二九

の(準體助詞)……六七五、八〇、八三
 の(格助詞)……八七、八八、九一、九六、一五
 六、三五、三七、三四、三五、三五九、
 三六〇、三六六、三七四、六五七、六七
 四、六七五、六八六、六七、七八、六七九、
 六〇、六六一、六八二、七二四、七三、八一
 一、八三
 のだ……………六三〇
 のたまふ……………二四〇
 のつと……………三九
 ので(接續助詞)……三〇、三七、
 四四、八二、八三
 のです……………六七
 「の」と「が」……………六二
 「の」と「が」との差異……六八、六九、
 六一
 のに(接續助詞)……一六四、三〇、三三六、
 三三七、八〇、八〇五、八二
 のね……………八四
 「の」の體言代用……………三〇
 のみ(副助詞)……一六四、六八、七二、
 七九、七〇、七四、七六
 「のみ」と「ばかり」の區別……七九

【ハ】

は(感動詞)……………四六
 は(數詞)……………一五
 は(係助詞)……一〇四、七、七六、七四、
 七四、七四、七四、七四、七四、七五
 四、七五、七六
 は(接續助詞)……一五、一六、二六、
 二九、三〇、三七、三九、七四、七四
 七、七六、七九、八二
 は(係助詞)……………四六
 はあ……………四六
 Half-conjunction……………三九
 Participle……………一六三
 Passive voice……………三三
 Past tense……………四六、四七
 はい……………四三、四三、四三
 はい(副助詞)……………七三
 俳句……………一五
 倍進法……………一三
 倍數關係……………一三
 ハイゼ……………四七
 方……………七七

六〇

芳(接頭語)……………七
 某……………三三、三六
 方向代名詞……………八三、九、九六
 方向代名詞の轉用……………九
 方向に就いての名稱……………八〇
 傍觀的推量……………五七
 方言……三、三、三、三、三、三、三、
 三〇、五〇、六〇
 「方言學概説」……………三
 放任形……………一六
 放任・不拘束・假設を表
 する形……………一七
 髣髴と……………三九
 「寶物集」……………四六
 ば(副助詞)……………七三
 馬鹿げた……………六一、六七
 馬鹿げて……………六一
 馬鹿げる……………六一、六七
 ばかし(副助詞)……………七三
 馬鹿な……………六七
 芳賀矢一……………一四九、二九四、三一、
 三六、六五、八五
 ばかり……………一六四、三〇一

はた(數詞)……………二二
 將た……………三九、四七、四一
 はたち……………一一、二四
 はたと……………三七
 働(て)にをは……………四三、四三、
 四三
 初……………二四
 管……………六
 撥音化……………二六
 撥音環境……………五三
 撥音便……二〇五、四六、二四九、五〇、
 五六〇
 はつか……………二四
 はつか(副助詞)……………七三
 ばつかし(副助詞)……………七三
 ばつかり(副助詞)……………七三
 拔萃的助詞……………六五
 はて……………四三
 はてな……………四三
 基だ……………三六、三九
 はあ……………四三
 略言……………四六
 侍り(動詞)……………三九、四〇、
 四三、四四、四六
 侍り(助動詞)……………四三

【ハ】

「侍りと候ふ」……………二四
 侍り(助動詞)の活用……………四三
 「は」も「徒」の係……………七三
 ば(終助詞)……………五九、七五、
 七五、七五
 は(感動詞)……………四三
 早からず……………三三
 早からむ……………三三
 早からき……………三三
 早かれ……………三三
 林國雄……………七〇
 はやみ……………二六、五三
 はやし(接尾語)……………三〇
 ばら(接尾語)……………五
 拂うた……………三三
 拂った……………三三
 はらくと……………三九
 パリー語……………三〇
 はる……………三〇
 「遙か」と「遙かに」……………三六
 はるかに……………三六
 春を忘れず……………五
 「春を忘れず」の「な」の品……………
 五

【ト】

詞所屬……………五六
 はるばると……………三九
 春を忘るな……………五
 はれ(感動詞)……………四三
 晴れり……………五
 「ば」をつけない形容動詞
 の假定形……………三七
 半(助數詞)……………二〇
 反語……………七五、七五、七五、
 七六
 反射指示代名詞(第二編)……………
 九
 反射指示代名詞と副詞……………九
 反射指示代名詞の定義……………九
 反照代名詞……………九
 伴食副詞……………三九

【ニ】

比較文法……………一九
 比況の助動詞……………四三、六二
 比況の助動詞の本義……………五三
 卑下の助動詞……………四七
 非現實の推量……………五二
 被修飾語……………一〇、三〇
 被修飾語の省略……………一六
 被修飾語と語序の關係……………
 三三
 非常に……………三九
 比説の助動詞……………五三
 卑俗語……………九
 肥筑方言……………三三
 ひづ……………一八
 畢竟……………三七、四九
 否定形(動詞)……………一三
 否定の「す」と「じ」……………五
 否定の助動詞……………四三、六三
 否定の助動詞「ざり」の用
 例……………五六
 否定の助動詞「じ」の用例……………
 五六
 否定の助動詞「す」「ざり」……………
 五
 「じ」「まじ」の活用と連続……………
 五
 否定の助動詞「す」の未然……………
 五

形……………五五三

否定の助動詞「ず」の未然形が接續助詞「ば」に連る時……………五六〇

否定の助動詞「ず」の未然形と連用形……………五六二

否定の助動詞「ず」の副詞法と中止法……………五五三

否定の助動詞「ず」の用例……………五五三

否定の助動詞「ず」の連用形……………五五三

否定の助動詞「ず」の連用形に助詞「て」のつく例……………五五四

否定の助動詞の本義……………五五三

否定の助動詞「まじ」の用例……………五六二

否定の助動詞「まじ」の連用形……………五六四

否定の「まじ」と「じ」……………五六三

ひと(數詞)……………一一二

被動……………五九

人騒がせ……………五七七

ひとつ……………一〇九、一一三

一つの用言を二つの副詞が修飾する場合……………五六七

ひとつめ……………二二五

人泣かせ……………五七七

人笑はれ……………五九六

獨言つ……………五九六

「批鏡」……………五、一八、一〇、二二

「批鏡」……………五、一八、一〇、二二

表音式假名遣……………二二六

Future tense……………四七六

平田篤胤……………三六

ひら〜と……………三九

乾る……………二二八

廣める……………三九

日数を數へる場合……………一四四

賓位……………一〇、三三、四〇

賓格……………三九

賓語……………一〇、三三、四〇

品詞……………三九、四三

品詞区分の原理……………三九

品詞性と語格性の混同……………三九

品詞性の主語と語格性の……………三九

主語……………三九

品詞轉換……………一〇六、一五九

品詞轉換の現象……………三九

品詞の轉成……………三九、三九

品詞の範疇……………三九

品詞分類の改革……………三九

品詞論(第二編)……………三九

品詞論……………三九

品詞論的立場と文章論的立場……………一五

部……………七

「吹いたら」と「吹けば」……………六〇

風……………七

Poor fellow!……………四二

不確實な推量「らむ」……………五二

不確の「さう」……………六二、六三

不確の助動辭……………六二

吹かす……………四四

「吹かなむ」の「なむ」……………五九

福岡の方言……………五九

複合語……………三九、四〇

複合語形成……………一〇九

複合語の動詞……………一〇九

複合語の品詞轉換……………一〇九

複合語のラ變動詞……………一〇九

複合によつて生じた「なり」……………一〇九

複合名詞となる語幹……………一〇九

副格副詞……………一〇九

復現表象……………一〇九

複語尾……………一〇九、一〇九、一〇九

複語尾の定義……………一〇九

複語尾の分類表……………一〇九

副修格……………一〇九

副修節……………一〇九

副修法……………一〇九

副詞(第二編第八章)……………一〇九

副詞……………一〇九、一〇九、一〇九

複辭……………一〇九

副詞格……………一〇九

副詞が二つ以上の被修飾語をもつ場合……………三九

副詞が轉じて接續詞となつたものと副詞との差……………四〇

副詞から轉成した感動詞……………四二

副詞から轉成した接續詞……………四二

副詞形(形容詞)……………二六、二六

副詞形(口語形容詞)……………三三

副詞そのまゝで體言の形修語となるもの……………三七

副詞的助詞……………三九

副詞的修飾語……………三九、三九、三九

副詞的修飾語(形容詞)……………三九

副詞的修飾語……………三九

副詞的修飾語となる數詞……………四〇

副詞的修飾語となる名詞……………四〇

副詞的修飾語となる連用形……………四三

副詞的用法……………四三

副詞特設の理由……………四三

副詞と感動詞との差異……………四三

副詞と形容詞との異同……………四三

副詞と熟合したサ變……………四三

副詞と數詞及び名詞との關係……………四三

副詞と體言との差……………四三

副詞と他の品詞との異同……………四三

副詞と他の品詞との比較……………四三

副詞と副詞的修飾語との區別……………四三

副詞の位置……………四三

副詞の呼應……………四三

副詞の語尾「に」……………四三

副詞の語尾「と」……………四三

副詞の語尾「に」「と」と格助詞の「に」「と」……………四三

副詞の語尾「に」「と」と形容詞の語尾「に」「と」……………四三

副詞の三分説……………四三

副詞の種類(第二編第八章第二節)……………四三

副詞の種類……………四三

副詞の敘述性……………四三

副詞の職能と意義……………四三

副詞の接續法……………四三

副詞の定義……………四三

副詞の疊語……………四三

副詞の特徵……………四三

副詞の特殊的现象……………四三

副詞の被修飾語……………四三

副詞の分類法……………四三

副詞の本義(第二編第八章第一節)……………四三

副詞の本義……………四三

副詞の例外的現象……………四三

副詞法……………四三

副詞法(形容詞)……………四三

副詞は實質用言のない連語を修飾する……………四三

副詞は主語述語及び獨立語にならない……………四三

副詞は助動詞に連続しない……………四三

副詞は體言を修飾する……………四三

副詞は他の副詞を修飾する……………四三

副詞は動詞・形容詞・形容動詞・形式用言を修飾する……………四三

副詞は被修飾語に前行する……………四三

副詞は文を修飾する……………四三

副詞は用言及び活用連語を修飾する……………四三

副詞は用言が根帯となつてゐる連語を修飾する……………四三

副詞は用言を修飾する語……………四三

副詞餘説(第二編第八章第三節)……………四三

副助詞(第十二章第二編第四節)……………四三

副助詞……………四三

六三

- 副助辭……………六七、八三
- 副助詞と係助詞との區別……………七八、七九
- 副助詞と係助詞との異なる點……………七九
- 副助詞の意義と用法……………七二
- 副助詞の性質……………七二
- 複數……………七三
- 副體言……………七三
- 副體詞……………八八、七七、五〇、六三、三四、三五、三六、六六、六七
- 副體詞の分類表……………三四
- 副助詞……………三六〇
- 複文……………四〇七
- 副用言……………三八、三三、三四
- 副用語(第二編第七章第一節)……………三五
- 副用語……………四九、五〇、五五、六〇、三三
- 副用語と自用語……………三五
- 副用語と補助語及び關係語との相違……………三五
- 副用語の種類……………三五
- 副用語の本質……………三五
- 副用語は活用しない語……………三五
- 不完全形容詞……………三〇七、四二五
- 不完全形容詞……………三七
- 不完全自動詞……………三七
- 不完全他動詞……………三三
- 不完全動詞(第二編第四章第九節)……………二五四
- 不完全動詞……………二五四、三五、三七、三六
- 富士谷成章……………四三、四五、四〇、四九、六六、六九、四三、四四、七三、七九、七五
- 不熟辭……………三三
- 不熟……………四九
- 附屬辭……………三六
- 附屬的結合……………四一
- ふた(數詞)……………一一一、一一三
- ふたつ……………一〇三、一一三
- ふたつめ……………一一五
- 普通名詞……………七一
- 普通名詞と固有名詞との區別……………七三
- 物質詞……………七三
- 物質名詞……………七一
- 佛蘭西語……………三三
- ふつつかな……………三六
- 不定……………二七、三三
- 不定稱 (Interrogative person)……………八三、八四、九二
- 不定稱……………八三、八八、九二
- 不定數詞……………二七
- 不定の助動詞……………六三〇
- 不定法 Infinitive mood……………一〇
- ふと……………三〇、三七
- ぶる(接尾辭)……………一〇、三一
- 古いウ音便……………二四八
- 古いヲ行四段活用の「取る」……………二四八
- 古く行はれた格助詞……………七〇五
- Present tense……………四七五、四七六
- Present perfect……………四七六
- Pronoun……………七九
- 文……………一一、三〇、三三、三三、三六
- 分……………七七
- 分(助數詞)……………一一〇
- 文語……………三三
- 文語受身の助動詞がサ變に連る時……………四四九
- 文語雅言の假名遣……………三四三
- 文語口語の乖離の起る主要原因……………三三
- 文語から口語にうつる用言變化の通則……………二七七
- 文語から口語へ轉用した代名詞……………九四
- 文語形容詞の語幹及び各活用形の用法(第二編第五章第三節)……………二七六
- 文語形容詞連體形の音便……………二七七
- 文語形容詞活用表……………三四
- 文語形容詞と口語形容詞との差……………三三五
- 「文語對照語法」……………三〇七、三三
- 文語下二段活が口語四段活となる現象……………三〇九
- 文語代名詞(第二編第二章第四節)……………八三
- 文語的口語……………三三
- 文語動詞活用の種類(第一編第四章第四節)……………一八三
- 文語動詞活用の種類……………一八三
- 文語動詞活用の通則……………一七九
- 文語動詞活用形のローマ字書き……………一四四
- 文語動詞九種の活用……………一四四
- 文語動詞語幹と語尾との區別のあるもの……………一四四
- 文語動詞語幹と語尾との區別の無いもの……………一四五
- 文語動詞と口語動詞との差……………一八二
- 文語動詞二格九種の活用……………一八六
- 文語動詞の已然形に「ば」のつく場合……………一八六
- 文語動詞の活用形式の種類……………一七九
- 文語動詞の活用形は三種の型……………一八一
- 文語動詞の語尾變化……………一四六
- 文語動詞の活用は四種……………一七〇
- 文語動詞の活用の種類の識別法……………二〇九
- 文語と口語……………三三
- 文語と口語との差……………三七
- 文語と口語との形式の著しく異なる語……………六
- 文語と口語の語尾變化の型……………一五
- 文語ナリ活に當る口語形容詞に含まるもの……………三六
- 文語ナリ活用に當る口語形容詞に含まるべきもの用法……………三九
- 文語ナリ活用に當る口語形容詞……………三九
- 文語の希望の助動詞(第二編第十一章第八節)……………五九
- 文語の敬語の助動詞(第二編第十一章第五節)……………四六
- 文語の使役の助動詞(第二編第十一章第四節)……………四三
- 文語の指定の助動詞(第二編第十一章第十節)……………五九
- 文語の「しむ」の名殘……………五七
- 文語の推量の助動詞(第二編第十一章第七節)……………五三
- 文語の數詞と口語の數詞……………一〇一
- 文語のタリ活用が口語に用ひられる場合……………三三
- 文語のタリ活用に當る口語の形容詞……………三三
- 文語の時の助動詞(第二編第十一章第六節)……………四七
- 文語のナリ活用の連用形の口語に用ひられたもの……………三八
- 文語の比況の助動詞(第二編第十一章第九節)……………五三
- 文語の否定の助動詞(第二編第十一章第十一節)……………五三
- 文語の名詞と口語の名詞(第二編第一章第六節)……………六
- 「文語法精説」……………九、三七
- 文語を口語の中に交へる現象……………三〇
- 分詞……………四七
- 分詞法……………一六三
- 文章語……………一九、四六
- 文章と同價値のもの……………四二
- 文章論……………一一、三三
- 分析的研究……………一一
- 文節……………四、四三、四五
- 文節相互の位格關係……………六七
- 文典……………一八
- 文の頭に立つ接續詞……………四八
- 文の構成單位……………四二
- 文の外形的特質……………四三
- 文の主成分……………三五
- 文の終止となる語幹……………二七八
- 文の成分……………四一、四二、四三、四四
- 文の成分關係……………四四
- 文の成分關係より見たる助動詞の分類表……………四四
- 文の成分の構成要素……………四六
- 文の接續をなす單語……………三九
- 文の第二次成分となる語……………三九
- 文の通則發見の三標準……………三六
- 文の内面的特質……………三三

- 二編第四章第四節)……………一八三
- 文語動詞活用の種類……………一八三
- 文語動詞活用の通則……………一七九
- 文語動詞活用形のローマ字書き……………一四四
- 文語動詞九種の活用……………一四四
- 文語動詞語幹と語尾との區別のあるもの……………一四四
- 文語動詞語幹と語尾との區別の無いもの……………一四五
- 文語動詞と口語動詞との差……………一八二
- 文語動詞二格九種の活用……………一八六
- 文語動詞の已然形に「ば」のつく場合……………一八六
- 文語動詞の活用形式の種類……………一七九
- 文語動詞の活用形は三種の型……………一八一
- 文語動詞の語尾變化……………一四六
- 文語動詞の活用は四種……………一七〇
- 文語動詞の活用の種類の識別法……………二〇九
- 文語と口語……………三三
- 文語と口語との差……………三七
- 文語と口語との形式の著しく異なる語……………六
- 文語と口語の語尾變化の型……………一五
- 文語ナリ活に當る口語形容詞に含まるもの……………三六
- 文語ナリ活用に當る口語形容詞に含まるべきもの用法……………三九
- 文語ナリ活用に當る口語形容詞……………三九
- 文語の希望の助動詞(第二編第十一章第八節)……………五九
- 文語の敬語の助動詞(第二編第十一章第五節)……………四六
- 文語の使役の助動詞(第二編第十一章第四節)……………四三
- 文語の指定の助動詞(第二編第十一章第十節)……………五九
- 文語の「しむ」の名殘……………五七
- 文語の推量の助動詞(第二編第十一章第七節)……………五三
- 文語の數詞と口語の數詞……………一〇一
- 文語のタリ活用が口語に用ひられる場合……………三三
- 文語のタリ活用に當る口語の形容詞……………三三
- 文語の時の助動詞(第二編第十一章第六節)……………四七
- 文語のナリ活用の連用形の口語に用ひられたもの……………三八
- 文語の比況の助動詞(第二編第十一章第九節)……………五三
- 文語の否定の助動詞(第二編第十一章第十一節)……………五三
- 文語の名詞と口語の名詞(第二編第一章第六節)……………六
- 「文語法精説」……………九、三七
- 文語を口語の中に交へる現象……………三〇
- 分詞……………四七
- 分詞法……………一六三
- 文章語……………一九、四六
- 文章と同價値のもの……………四二
- 文章論……………一一、三三
- 分析的研究……………一一
- 文節……………四、四三、四五
- 文節相互の位格關係……………六七
- 文典……………一八
- 文の頭に立つ接續詞……………四八
- 文の構成單位……………四二
- 文の外形的特質……………四三
- 文の主成分……………三五
- 文の終止となる語幹……………二七八
- 文の成分……………四一、四二、四三、四四
- 文の成分關係……………四四
- 文の成分關係より見たる助動詞の分類表……………四四
- 文の成分の構成要素……………四六
- 文の接續をなす單語……………三九
- 文の第二次成分となる語……………三九
- 文の通則發見の三標準……………三六
- 文の内面的特質……………三三

文の副次的成分…………… 三五三
 文法…………… 一、二、三、六、七、八、一八七
 文法家…………… 二、八
 文法學…………… 二、五
 文法學と修辭學…………… 三、七
 文法系統…………… 八、三、三一
 文法研究と心理研究…………… 五
 文法研究に於ける形態の重要性…………… 四
 文法研究の對象…………… 五
 文法研究の目的…………… 二〇
 文法史…………… 一八、一八四
 文法時と事實時…………… 四七五
 文法上の時…………… 四七四、四七五
 「文法上許容ニ關スル事項」…………… 九、二〇七
 「文法上許容ニ關スル事項」の一…………… 一九二、二四
 「文法上許容ニ關スル事項」の二…………… 二七四
 「文法上許容ニ關スル事項」の三…………… 四八八
 「文法上許容ニ關スル事項」の四…………… 三五〇、五九
 「文法上許容ニ關スル事項」の六…………… 四四九、五七
 「文法上許容ニ關スル事項」の七…………… 四七
 「文法上許容ニ關スル事項」の八…………… 四八四
 「文法上許容ニ關スル事項」の九…………… 六九
 「文法上許容ニ關スル事項」の十…………… 七五六
 「文法上許容ニ關スル事項」の十一…………… 七九三
 「文法上許容ニ關スル事項」の十二…………… 六八
 「文法上許容ニ關スル事項」の十三…………… 八二五
 「文法上許容ニ關スル事項」の十四…………… 七五九
 「文法上許容ニ關スル事項」の十五…………… 七九六
 「文法上許容ニ關スル事項」の十六…………… 五四七
 「文法上の時の論」…………… 四七四
 文法組織…………… 八
 文法的意味…………… 三、六
 文法的形態…………… 六
 「文法的決定への疑問」…………… 四三、六一
 文法的事實…………… 三五七
 文法的數…………… 六四
 文法的品詞區分…………… 三七
 文法と語の辭書の意味との關係…………… 三
 文法概念…………… 一
 文法の科學的研究…………… 二〇
 文法の原理…………… 二
 文法の種類…………… 一三
 「文法の立體的的研究」…………… 一〇
 文法論…………… 六九五
 「文法論と國語學」…………… 三六二
 分別書法…………… 四三
 「文祿舊譯伊曾保物語」…………… 五九五、五九八
 【>】
 「格助詞」…………… 六九四、六九五、六九六、七二五
 へい…………… 四六
 べい(「べく」の音便)…………… 三五
 弊(接頭語)…………… 七〇
 平安朝・鎌倉期の語法…………… 四八
 平安朝時代の受身の助動詞…………… 四七
 平安朝時代の語法…………… 五八
 平安朝時代の使役の助動詞…………… 四七
 平安朝時代の終止法…………… 四七
 平安朝の會話用の助動詞…………… 四七
 「平安朝文法史」…………… 一八、三五、二九三、四六三
 「平家物語」…………… 三六、三五、四八五
 平生…………… 三〇
 平素…………… 三〇
 並立關係…………… 一〇八
 並立助詞(第二編第十二章第六節)…………… 八四
 並立助詞…………… 六六、六六八、六六九、六九四、七三、七三三、七三四、七三六、八二四
 並列…………… 三七、三六
 並列的接續詞…………… 四〇

並列と中止との峻別…………… 四七
 平和に…………… 八〇
 べう(「べく」の音便)…………… 三五
 表現…………… 五
 標準語…………… 二七、二六、元、九三、二六、二八、二四七、二九五
 標準語と方言…………… 六
 標準語の基礎として選ばるべき方言…………… 三〇
 標準語の單位…………… 三
 標準語法…………… 一九五
 標準語を制定する法…………… 元
 「標準日本語法」…………… 二、四、三〇、三三、三七、三七、五八、五九、六二、六六
 「標準日本文法」…………… 四、三三
 藻汐と…………… 八〇
 標語…………… 元九
 騙々として…………… 三〇
 騙々として…………… 三九
 べかなる…………… 五七
 べかめり…………… 五七
 べかり…………… 一六二、一六四、四四一
 べかり(推量)…………… 五二、五三
 「べかり」が「めり」なり」に連る時…………… 五七
 べけむ…………… 五八
 べし…………… 一六、一四、四四
 べし(推量)…………… 五二、五〇
 「べし」に命令の意なしとする説…………… 五三
 「べし」の本義…………… 五三
 「べし」の未然形と「べけ」…………… 五三
 經せしむ…………… 四七
 下手な…………… 三六、三七
 別格形容詞…………… 四九
 Heavens!…………… 四六
 べみ…………… 五二
 「べみ」の用法…………… 五二
 「べら」と「べみ」…………… 五二
 「べら」と「めり」…………… 五二
 べらなり…………… 五二
 へり…………… 五八
 繰る…………… 一六、九九、一〇〇
 へん…………… 四三
 邊…………… 七七
 偏向する所ある形式用言…………… 二〇四、二〇五
 變格活用四種…………… 一八三、一八四
 變格活用と正格活用…………… 一八五
 變格詞…………… 四六
 變格と名づくべき理…………… 一八四
 變化性や動搖性をもつてゐる語…………… 三七五
 勉強させる…………… 三七七
 勉強される…………… 三七四
 【木】
 Voice(態)…………… 四九、四四
 Possessive pronoun…………… 三六三
 ばい(接尾語)…………… 三二〇
 Form(形)…………… 四二、四四
 母韻の轉換…………… 一三
 豊日方言…………… 三
 ほか(係助詞)…………… 七六、七六、七六、七六
 ほか(體言)…………… 六九
 補格…………… 六三
 僕…………… 八六、九三、九四、九六
 北陸方言…………… 三三
 補語…………… 七八、一〇三
 補語と客語との區別…………… 三二
 補語又は副詞的修飾語…………… 三二
 綻ぶ…………… 一七〇
 保科孝一…………… 四一、五九、六四
 補助形容詞…………… 六〇、八八
 補助語…………… 五、五七
 補助的動詞…………… 三三
 補助的用法…………… 一三
 補助的用法に立つ「ない」…………… 三九
 補助的用法の形式語化したもの…………… 四六
 補助動詞…………… 一三六、一三七、一三九、一四〇、一四一、一四二、一四三、一四四、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、一五一
 補助動詞と助動詞…………… 二四三
 細江逸記…………… 四七五、四七六、四七八、四九三、四九三、五〇一
 ぼたりと…………… 三九
 ほど…………… 三七、三九
 ほど(準體助詞)…………… 七〇、八三、八三
 ほどに…………… 四四
 六七

ほのか	五九、五九	マ行の撥音便	二四九
ほのかに	五九	まく(助動詞)	四九八
ほのかと	五九	「まくせば」	四九七
法	四八、四九	まくほし	五三二
法助詞	六六	負けし魂	五三二
法則の簡單化現象	二二六	誠に	三二、七九、六四
法の助動詞	四四	まさか	五九二
ほら	四三	まさかの	三五九、三五
ほり(欲)	五三	「まさ」と「ませ」	五九、六〇〇
堀秀成	一四九、七六	まさ	五九
本(接頭語)	三九、三六、三四	「まさ」(動詞)	三九、五八
本州四部方言	三、三、三四	「まさ」(動詞)	二四〇、四二
本州中部方言	三	「まさ」(敬語)	四九
本州東部方言	三、三三	「まさ」(推量)	四〇、四九、五二
本州方言	三三	「まさ」(否定)	一六、一六四、四一、五三、六三、六四
本数詞	一〇七	「まさ」(推量)	五三
本代名詞	三六	「まさ」(推量)	五三
本當に	五九	「まさ」の活用	五三
本動詞	一一五	「まさ」の活用と連続	五九
ほんの	三九、三三、三四	「まさ」の語源説	五九
本副詞	三三	「まさ」の二元説	五九、六〇
本副體詞	三四	「まさ」の本義と用法	五九
本用言	四五		

まする(敬語)	五九、五九	「まじり」	五六四
ませ(敬語)	五九	まじき	六四三
「ませ」と「ます」	六〇〇	「まじく」の音便	五六三
ませなり	六三	まじる	五七二
ませぬ	六三	交ざる	五七二
ませば	四七	まじし	五六四
「ませば」と「ましかば」	四七	「まじし」と「べし」	五六四
又	三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五	「まじし」と「増せし」	四八五
また	四二、四三	「まし」の反事實の假想と 單なる豫想との二用法	四九七
またげむ	五〇	「まします(動詞)」	三九、五八
又の	三九、三六、三四、三二、三三、三四	「まします(補助動詞)」	二四〇、四二
又は	四〇、四一	「まします(敬語)」	四九
貧し	七	「まします」(推量)	四〇、四九、五二
松下大三郎	三九、四一、四三、五〇、六六	「まします」(否定)	一六、一六四、四一、五三、六三、六四
八八、三〇、三二、三三、三四		「まします」(推量)	五三
三五、三六、三七、三九、四〇		「まします」(推量)	五三
四一、四二、四三、四四、四五		「まします」(推量)	五三
四六、四七、四八、四九、五〇		「まします」(推量)	五三
五二、五三、五四、五五、五六		「まします」(推量)	五三
五七、五八、五九、六〇		「まします」(推量)	五三
六〇		「まします」(推量)	五三
六二		「まします」(推量)	五三
六四		「まします」(推量)	五三
六六		「まします」(推量)	五三
六八		「まします」(推量)	五三
七〇		「まします」(推量)	五三
七二		「まします」(推量)	五三
七四		「まします」(推量)	五三
七六		「まします」(推量)	五三
七八		「まします」(推量)	五三
八〇		「まします」(推量)	五三
八二		「まします」(推量)	五三
八四		「まします」(推量)	五三
八六		「まします」(推量)	五三
八八		「まします」(推量)	五三
九〇		「まします」(推量)	五三
九二		「まします」(推量)	五三
九四		「まします」(推量)	五三
九六		「まします」(推量)	五三
九八		「まします」(推量)	五三
一〇〇		「まします」(推量)	五三
一〇二		「まします」(推量)	五三
一〇四		「まします」(推量)	五三
一〇六		「まします」(推量)	五三
一〇八		「まします」(推量)	五三
一一〇		「まします」(推量)	五三
一一二		「まします」(推量)	五三
一一四		「まします」(推量)	五三
一一六		「まします」(推量)	五三
一一八		「まします」(推量)	五三
一二〇		「まします」(推量)	五三
一二二		「まします」(推量)	五三
一二四		「まします」(推量)	五三
一二六		「まします」(推量)	五三
一二八		「まします」(推量)	五三
一三〇		「まします」(推量)	五三
一三二		「まします」(推量)	五三
一三四		「まします」(推量)	五三
一三六		「まします」(推量)	五三
一三八		「まします」(推量)	五三
一四〇		「まします」(推量)	五三
一四二		「まします」(推量)	五三
一四四		「まします」(推量)	五三
一四六		「まします」(推量)	五三
一四八		「まします」(推量)	五三
一五〇		「まします」(推量)	五三
一五二		「まします」(推量)	五三
一五四		「まします」(推量)	五三
一五六		「まします」(推量)	五三
一五八		「まします」(推量)	五三
一六〇		「まします」(推量)	五三
一六二		「まします」(推量)	五三
一六四		「まします」(推量)	五三
一六六		「まします」(推量)	五三
一六八		「まします」(推量)	五三
一七〇		「まします」(推量)	五三
一七二		「まします」(推量)	五三
一七四		「まします」(推量)	五三
一七六		「まします」(推量)	五三
一七八		「まします」(推量)	五三
一八〇		「まします」(推量)	五三
一八二		「まします」(推量)	五三
一八四		「まします」(推量)	五三
一八六		「まします」(推量)	五三
一八八		「まします」(推量)	五三
一九〇		「まします」(推量)	五三
一九二		「まします」(推量)	五三
一九四		「まします」(推量)	五三
一九六		「まします」(推量)	五三
一九八		「まします」(推量)	五三
二〇〇		「まします」(推量)	五三

名詞による指示……………八

めり……………一六二、一六四、四一五、五〇八

めり(推量)……………五二五、五二七、五二八

「めり」が助動詞「や」「し」に連る時……………五二六

「めり」がラ変活用言につく時……………五二七

めりき……………五二六

めりし……………五二六

めりしか……………五二六

めりつる……………五二六

めりつれ……………五二六

「めり」の「め」「し」……………五二五

めるなり……………五二六

【キ】

も(接続助詞)……………七九六、八六八

も(係助詞)……………四〇〇、四一〇、七九六、七九七、七九八、七九九、八〇〇、八〇一、八〇二、八〇三、七九五、七九六、八〇三

もう(副詞)……………三六〇、三六三、四三四

もう(感動詞)……………四三四

もうす……………五八五

もうす(補助助詞)……………四二一

もが(終助詞)……………八三三、八三六

もがな(終助詞)……………八三三、八三六

もがなや(終助詞)……………八三三

もがも(終助詞)……………八三三

もがもな(終助詞)……………八三三

もがもや(終助詞)……………八三三、八三六

目的格……………六三、三三三

目的語……………三三三、六三三、六七四

目的語の有無……………三三三

目的語又は客語……………三三三、三三六

もし……………三九三、三九四

若し……………三九三

もし(感動詞)……………四二八

若しく……………三七七、三九一

若くは……………四〇一、四〇二、四二一

「もしさうだったら」の「た」……………六六六

若しもの……………三九三、三九四

物集高見……………三九三

物集高世……………三九三

持たしておく……………五八六

用よ……………一九〇

「用ゐるの活用」……………一九四

もつたいない……………三六三

もつて……………三三六、三三七

もつて(接続助詞)……………八三三

以て……………三九三

もつと……………三三三、三九〇

最も……………三九四、三九七、三九九

尤も……………四二二、四二三

もつばらの……………三九四

もて(接続助詞)……………八三三

本居宣長……………三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇

本居春庭……………四九三、三六三、三六四、三六五

もの……………三七六、三七七、三九三

物……………三七六

ものか(終助詞)……………八四三

もの……………二四三

もの(接続助詞)……………八四三

ものを……………二四三

もの(接続助詞)……………八四三、八四四

もの(感動詞)……………四二二

もの(指定)……………三三三、三三六

や(並立助詞)……………四〇〇、七六四、八二六、八二七、八二八

や(感動詞)……………四三三

や(係助詞)……………七三三、七三六、七四一、七五二、七五三、七五八、七五九、七六〇、七六一

や(指定)……………三三三、三三六

や(並立助詞)……………四〇〇、七六四、八二六、八二七、八二八

や(感動詞)……………四三三

や(係助詞)……………七三三、七三六、七四一、七五二、七五三、七五八、七五九、七六〇、七六一

やう……………六八八

や(格助詞)……………六九七、七〇〇

Your health!……………四二六

行かあす……………五〇〇

行かしませ……………五〇六

行かしめ……………五〇六

行かす……………五〇八

行かす……………五〇〇

「行かすか」「す」……………五〇〇

行かせられた……………五〇八

行かつしやる……………五〇八

行かつせる……………五〇九

行きなされる……………五〇九

「行き申す」……………五〇九

行きやつた……………五〇〇

湯澤幸吉郎……………一六三、二五三、七六八、八八八、八八九、三三三、三三六、三三七、三三九、四一四、五七〇、五七三、五七六、五七八

行くらう……………五二五

ゆつくり……………三六九

「ゆ」と「らゆ」……………四三〇

ゆめ……………二〇六、三三三、三九一、三九四

「ゆ」「らゆ」の活用と連続表……………四四九

様……………七七

やうた……………二〇三、三〇九、四三四、四三四、六一一、七、六二八、六二九

やうた(推量)……………六〇八

やうた(比況)……………六二八、六三三、六三三、六三三

やうた(特殊助動詞)……………五三三

やうです……………三〇三、三九八、四三四、四三四、六二七、六二八、六二九

やうです(推量)……………六〇八

やうです(比況)……………六二八、六三三、六三三、六三三

やうです(特殊助動詞)……………五三三

やうです……………六三三

やうです(特殊助動詞)……………五三三

漸く……………三九三

やがての……………三七四

ヤ行の活用……………二二一

躍如と……………三六九

譯せる……………二二九、三七三

「八雲御抄」……………六五四

やす……………五九五

安田喜代門……………一八八、一九四、三九八、三九九、三九八、三九九、三九七、四四三、四四五、四三三、四五三、四五六、六六五、八三四

野生……………八六

や(数詞)……………二二一

や(な)……………二二二

やつ……………二二二、二二三

やつがれ……………八六六

やつと……………三七九

やとど……………六六

「や」と「か」との區別……………七六六

やは(係助詞)……………七五四、七五五

やはる……………五八〇

「山口葉」……………二六九

山田孝雄……………二二五、四四九、五〇七、七、七、九八、六六、一〇五、一〇七、一〇九、一一一、一二二、一三三、一三四、一三五、一三六、一三七、一三九、一四〇、一四一、一四二、一四三、一四四、一四五、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、二三八、二三九、二四〇、二四一、二四二、二四三、二四四、二四五、二四六、二四七、二四八、二四九、二五〇、二五一、二五二、二五三、二五四、二五五、二五六、二五七、二五八、二五九、二六〇、二六一、二六二、二六三、二六四、二六五、二六六、二六七、二六八、二六九、二七〇、二七一、二七二、二七三、二七四、二七五、二七六、二七七、二七八、二七九、二八〇、二八一、二八二、二八三、二八四、二八五、二八六、二八七、二八八、二八九、二九〇、二九一、二九二、二九三、二九四、二九五、二九六、二九七、二九八、二九九、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一〇、三一三、三一四、三一五、三一六、三一七、三一八、三一九、三二〇、三二一、三二二、三二三、三二四、三二五、三二六、三二七、三二八、三二九、三三〇、三三一、三三二、三三三、三三四、三三五、三三六、三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五一、三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七九、三八〇、三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四、四一五、四一六、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二七、四二八、四二九、四三〇、四三一、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九、四五〇、四五三、四五五、四五七、四五九、五六〇、五六三、五六五、五六七、五六九、五七〇、五七三、五七五、五七七、五七九、五八〇、五八三、五八五、五八七、五八九、五九〇、五九三、五九五、五九七、六〇〇、六〇三、六〇五、六〇七、六〇九、六一〇、六一三、六一五、六一七、六一九、六二〇、六二三、六二五、六二七、六二九、六三〇、六三三、六三五、六三七、六三九、六四〇、六四三、六四五、六四七、六四九、六五〇、六五三、六五五、六五七、六五九、六六〇、六六三、六六五、六六七、六六九、六七〇、六七三、六七五、六七七、六七九、七八〇、七八三、七八五、七八七、七八九、八九〇、八九三、八九五、八九七、八九九、九〇〇、九〇三、九〇五、九〇七、九〇九、九一〇、九一三、九一五、九一七、九一九、九二〇、九二三、九二五、九二七、九二九、九三〇、九三三、九三五、九三七、九三九、九四〇、九四三、九四五、九四七、九四九、九五〇、九五三、九五五、九五七、九五九、九六〇、九六三、九六五、九六七、九六九、九七〇、九七三、九七五、九七七、九七九、九八〇、九八三、九八五、九八七、九八九、九九〇、九九三、九九五、九九七、九九九、一〇〇〇

ゆ(助動詞)……………三三三、四四九、四五一、四五四

【ヒ】

ゆめ……………二〇六、三三三、三九一、三九四

「ゆ」「らゆ」の活用と連続表……………四四九

Your health!……………四二六

行かあす……………五〇〇

行かしませ……………五〇六

行かしめ……………五〇六

行かす……………五〇八

行かす……………五〇〇

「行かすか」「す」……………五〇〇

行かせられた……………五〇八

行かつしやる……………五〇八

行かつせる……………五〇九

行きなされる……………五〇九

「行き申す」……………五〇九

行きやつた……………五〇〇

湯澤幸吉郎……………一六三、二五三、七六八、八八八、八八九、三三三、三三六、三三七、三三九、四一四、五七〇、五七三、五七六、五七八

行くらう……………五二五

ゆつくり……………三六九

「ゆ」と「らゆ」……………四三〇

ゆめ……………二〇六、三三三、三九一、三九四

「ゆ」「らゆ」の活用と連続表……………四四九

ゆり(格助詞)……………六九七、七〇〇
 ゆる(助動詞)……………七〇七
 ゆゑ……………七〇七
 故……………七〇五
 故に……………四二、四三
 所以……………七〇七

【ヨ】
 よ(数詞)……………二二、二五
 よ(動詞の語尾)……………三、七三、七四
 よ(格助詞)……………六九、七〇〇
 よ(終助詞)……………八三、八五、八六、八七
 よ(間投助詞)……………三二、三四、三六、
 七、八、五二、八五
 餘(助數詞)……………二〇
 予……………八六
 余……………八六、九
 よい……………三〇〇
 好い……………三〇〇
 善いさうだ……………六二
 餘韻法……………二九
 よう……………一五、一六、四七、四三
 ヨウ(比況)……………六三

よう(未來)……………六〇三、六〇四、六〇五
 よう(終助詞)……………八四七
 よう(感動詞)……………四三六
 用言(第二編第四章第一節)……………二〇
 用言……………四、四四、四六、四九、五〇、五五、五八、
 七六、三三〇、三三二、三三三、三三六、
 七、四四、四七
 用言・助動詞との呼應關係……………七〇
 用言と助動詞との相違……………四七
 用言と動詞との接続……………一五三
 用言に於ける連用形の職能……………二六二
 用言にかゝる語……………七六
 用言につく助動詞……………九
 用言の意味……………二〇
 用言の音便……………二四
 用言の活用形……………二八
 用言の活用語尾……………二五、三三
 用言の活用語尾「に」と副詞の語尾「に」……………三三
 用言の形態……………三三

用言の語尾……………四四
 用言の根本的特質……………一三
 用言の職能……………一三
 用言の特徴……………二〇
 用言の分類……………一三、二五
 「用言變格例」……………一八
 用辭……………四六
 「用の活用」……………一九、九五
 よか……………三〇
 良からぬ……………三二
 良かり……………三〇
 善かり……………三三
 よかれ、あしかれ……………三〇
 よく……………三九
 型(接頭語)……………三五、三三
 能く……………三〇、七一
 能く(副詞)……………五七
 避く……………一八、九二
 善く(形容動詞)……………三九、三五
 よくない……………二九
 よくんば……………六一
 善けむ……………五八
 吉けむ……………五〇

用言の語尾……………四四
 用言の根本的特質……………一三
 用言の職能……………一三
 用言の特徴……………二〇
 用言の分類……………一三、二五
 「用言變格例」……………一八
 用辭……………四六
 「用の活用」……………一九、九五
 よか……………三〇
 良からぬ……………三二
 良かり……………三〇
 善かり……………三三
 よかれ、あしかれ……………三〇
 よく……………三九
 型(接頭語)……………三五、三三
 能く……………三〇、七一
 能く(副詞)……………五七
 避く……………一八、九二
 善く(形容動詞)……………三九、三五
 よくない……………二九
 よくんば……………六一
 善けむ……………五八
 吉けむ……………五〇

豫想設想……………四七五
 善ささう……………六二
 よし(副詞)……………三九
 由……………七七
 吉岡郷甫……………三〇、六六
 吉澤博士の形容動詞説……………三三、
 三六、三六
 吉澤義則……………一八、四一、五、
 一九、二〇、二六、三二、三六、三
 六、三七、三九、三五、三三、三三、
 三四、四九、〇一、七三、七〇〇
 「吉野打遣」……………四八
 よしや……………三九
 よそ(數詞)……………二二
 よそぢ……………二二、二四
 装……………四、五〇
 装……………四、五〇
 「装圖」……………一四
 四段活以外の動詞に「う」……………六〇
 が連つた時……………一〇、一三
 四段活用(正格活用)……………一四、一六、
 一八、一六、二二
 四段活用活用表……………一六

四段活用に可能の「れる」……………五〇
 が連る時……………五〇
 四段活用に活用する打消の助動詞……………五九
 四段になりきつてゐない口語動詞……………三三
 よ……………二二、二三
 よつゆめ……………二五
 因つて……………四二
 讀ました……………三三
 讀ませた……………三三
 嘉みす……………二六
 讀み申した……………五九
 讀めざる……………五三
 讀める……………二九、五一
 よも……………三九
 よもや……………三九
 よもやの……………三九
 より(格助詞)……………六九、六七、六八、
 六九、七〇、七一、七三
 よる……………六〇
 よる(數詞)……………二二
 よろ……………二二

よん(數詞)……………二五
 讀んだ……………六〇

【ラ】
 ら(接尾語)……………五、九、二九、九七、六二
 來年(副詞)……………六一
 老兄……………八七
 ラ行變格活用……………二四、三〇、三九
 ラ行變格活用活用表……………二七
 ラ行四段活用の命令形……………二四
 Laconia……………三三
 らし……………一六、一四、四一
 らし(接尾語)……………三〇、五九
 らし(推量)……………五二、五九
 らしい……………一六、二七、三〇、三九、四四、
 四三
 らしい(接尾語)……………六〇
 らしい(推量)……………六〇
 らしい(特殊助動詞)……………五五
 らしい、けれ……………六〇
 「らしい」の連用形……………六〇
 らしかり……………六〇
 らしき……………三三

「らしく」の音便……………六〇
 らしけれ……………六〇
 ラ變の撥音便……………二五
 らむ(推量)……………四、四四、五二、五七
 「らむ」と「らし」……………五二、五二
 「らむ」のついでる動詞……………五四
 「らむ」の二種……………五五
 「らむ」「めり」「らし」けむ……………五二
 「らむ」「べし」「べかり」の活用と連續……………五二
 ら(助動詞)……………四九、四五
 られる……………四一
 られる(受身)……………五六
 られる(敬語)……………五七、六〇
 られる(自發)……………五七
 られる(可能)……………五九、五七
 らる……………四三、四一
 らる(受身)……………四八
 らる(可能)……………四〇
 らる(自發)……………四一
 らる(敬語)……………四三、四五
 らん(推量)……………一六、一四、七三

【リ】
 り(完了)……………三〇、四一、四二、
 五〇、五〇、五五
 「琉球語文典及び字彙」……………一九
 琉球方言……………三三
 「り」たり」の發達……………四
 立派な……………六一
 「り」と「たり」との區別……………五九
 「り」の用例……………五八
 り(完了)の連續……………一七、二〇、
 二六
 兩……………二六
 量數詞……………一〇、一一
 略せる……………五七
 理論的文法……………一三

【ル】
 る……………四三、四五、四一、四三
 る(受身)……………四八
 る(可能)……………四〇
 る(自發)……………四一
 る(敬語)……………四三、四五
 「る」「らる」が敬語に用ひ……………七五

- られる理由……………四〇〇
 - 「る」の活用と連続表……………四〇九
 - 累加的(添加的)接続詞……………四二〇
 - ルキス・イエルクムスレウ……………二〇
 - 類推作用……………三〇四、四七五、五一九、六〇九
- 【ニ】**
- れ(接尾語)……………八四、九七、九九(接頭語)……………六七
 - 例外……………六
 - 例の……………三六、三五九、三六四、三六七
 - 歴史的假名遣……………二二八
 - 歴史的文法(Historical Grammar)……………一六〇、一六九
 - れり……………五〇八
 - れる……………四一
 - れる(受身)……………五〇六
 - れる(可能)……………五〇九
 - れる(自發)……………五〇九
 - れる(敬語)……………五七四、六〇
 - 「れる」られる」の活用と……………四七
- 連続表……………五六
 - 連結動詞……………二五
 - 連語……………三〇、四〇、三三、三三〇、四〇〇、五〇八、五〇九、五九
 - 連語の連続関係……………四一
 - 連詞……………八八、九一、三六四
 - 連詞的副詞……………三九三
 - 連続した二個の數詞……………二八
 - 連續用法……………一五一、一六〇、一六二、一七六、一七三、一七六
 - 連續用法に立つ活用形……………一七六
 - 連續拾……………六二、六八、三四、五〇
 - 連續格準備言……………二六三
 - 連續格に立つ副詞……………三九九
 - 連續格副詞……………三三三、三六六、三六九、三九五
 - 連續格副詞の終止法……………二六六
 - 連體形(動詞)……………一四七、一五二、一六二
 - 連體形(形容詞)……………二九〇、三〇一
 - 連體形(口語形容動詞)……………一三三
 - 連體形語……………一八
 - 連體形の本義……………一六七
 - 連體形の用法……………一六三、一六七
 - 連體言……………四七
- 連體語……………五七、五九、六九、二五六、三三三
 - 連體詞(第二編第七章)……………三三
 - 連體詞……………七〇、七六、九一、九六、二五六、三三三、三三三、三五八、三六二、三六三、三五五、三九五、六七五
 - 「連體詞と形容動詞」……………三六四、三五
 - 連體詞と副詞との相違……………三三三、三三九
 - 連體詞でない體言の形修……………三五三、三五九
 - 連體詞に関する研究史……………三五三
 - 連體詞の職能……………三五三
 - 連體詞の特設……………三五七
 - 連體詞の本義(第二編第七章第二節)……………三五三
 - 連體詞否定説……………三五五
 - 連體修飾……………一〇六、一〇三、一〇七、一〇九
 - 連體修飾語……………一八三
 - 連體論……………一七五
 - 連體的修飾……………一八八
- 連體止……………一六四、二二七、四〇八、四二七
 - 連體的用法……………三三
 - 連體法(Verbal adjective)……………一五〇
 - 連體形(動詞)……………一四八、一五二、一五三、一六〇
 - 連體形(形容詞)……………二八二、三三三、二七、二九七
 - 連體形(口語形容動詞)……………三三三
 - 連體形といふ名稱……………一五三
 - 連體形とも終止形ともつ……………一五三
 - かぬ「す」……………五五九
 - 連用形(中止法)……………一五五
 - 連用形の並列……………二九一
 - 連用形の名詞法……………一六六
 - 連用語……………一五七、一五三
 - 連用語……………一三二、一三三、一三五
 - 連用詞……………一三三
 - 連用修飾……………一六六、一七三、一六三
 - 連用修飾語……………一六六
 - 連用的修飾……………一三三
 - 連用的用法……………一六一
 - 連用法(Compound form)……………一三一

- ろ(動詞の語尾)……………一五
 - ろ(間投助詞)……………三三、三七、七五、二三八
 - ロードリゲーズ……………三〇
 - 六種の活用形の識別法……………一七五
 - long long ago……………六五
 - ロンドン語……………二〇
 - 論理的範疇(Logical category)……………二
 - 論理的範疇と文法的範疇……………四四
 - 論理的法則……………二五
- 【ワ】**
- わ(代名詞)……………八三、八四、八六、五五、三五五、三五六
 - わ(係助詞)……………七四五、七四六
 - わい……………九三
 - わい(係助詞)……………七四六
 - 王朝語法……………一九五、一六六
 - わが……………八五、八八、三五四、三五五、三五六、七四四
- 「我が國の方言區劃」……………三三
 - 我輩……………八六、八三
 - ワ行の活用……………二二
 - 分く……………一八二
 - 譯……………七
 - わごぜ……………一七
 - 「倭語通音」……………一四九
 - わごとの……………三〇、三三
 - 業をしまさじ……………五〇
 - わし……………九二、九四、六
 - 「和字正濫鈔」……………五
 - 「忘れう」と「忘れよう」……………六四
 - わたい……………九三
 - わたき……………九三
 - わたくし……………九二、九四、九五
 - 私……………八〇、九四
 - わたくしたち……………九四
 - わたくしども……………九四
 - わたくし……………九四
 - わたし……………九二、九六
 - わたらひ……………五一
 - 僅か……………七四四
- わつち……………九三
 - 「煩ふ」と「煩はし」……………一四三
 - わて……………九三
 - わどの……………八七
 - わぬし……………八七
 - わらは……………八六
 - 笑へる……………五七三
 - わり……………一〇
 - われ……………三三、九四、一〇〇、三五四
 - われわれ……………八二、九三、九四
- 【井】**
- る(動詞)……………二九
 - 位格……………三〇
 - 居やはる……………五八〇
 - る(補助動詞)……………六〇七
 - 院……………五八四
 - 院政以後の「らう」……………五五
 - 院政・鎌倉以後の書簡文……………四三三
- 【五】**
- る(間投助詞)……………八五
 - るまひ……………五一
- 【六】**
- を(接頭語)……………九〇
 - を(格助詞)……………九一、一〇四、一〇五、五
 - を……………六、一四、三五、六六、六七、七一、六六、六七、六九、七四、六、八三
 - を(接續助詞)……………三九、九九、六六、七、一〇三、一〇三、一〇三、一〇四
 - を(間投助詞)……………八五、八五、八五、九
 - をかした……………三一
 - をかした……………三一
 - をかした……………三一、三四、三六、三七
 - 获生徂徠……………一三三
 - 乎古止點……………六五三
 - をか……………三九三
 - 敬へさしめ……………三六
 - をしむらくは……………二五六
 - 男らしい……………六〇九
 - 「を」に通ふ「に」……………六七八
 - 「を」に通ずる「が」……………六七、六七四
 - 「を」の起源……………六七
 - 叔母ちや人……………五五九
 - 叔母なる人……………五五九

索引

居り…………… 一〇七、一〇八
 折口信夫…………… 二六六
 をる(動詞)…………… 一三六
 をる(補助動詞)…………… 一〇七
 「を」を伴つてゐる構言…………… 一三〇
 女らしい…………… 一〇九
 〽…………… 一〇九

【終】

—終—

昭和十二年二月二十日 印刷
 昭和十二年二月二十五日 發行

高等國文法新講
 品詞篇

著者所有



【定價五圓五拾錢】

<p>著者 木枝 増一</p>	<p>發行者 永田 與三郎 東京市神田區神保町一丁目六十七番地</p>	<p>印刷者 永田 耕作 東京市牛込區赤城下町六十六番地</p>	<p>發行所 東洋圖書株式會社 東京 東京市神田區神保町一丁目六十七番地 大阪 振替東京一〇三七番・電話神田(25)三七四五番 大阪店 大阪市南區・内安堂寺町一丁目二十八番地 振替大阪三九五六番・電話東(94)二八六八番</p>
------------------------	---	--	--

大賣捌所

(東京) 上田屋書店・東京
 堂・東海堂・北隆館・大東
 館・林平書店・大阪屋
 澤見文林堂・京都書肆
 (名古屋) 寶文館・盛文堂
 (大阪) 新書館・新書館
 (京都) 川島・新書館
 (神戶) 川島・新書館
 (東京) 大塚書店・東京
 (京都) 大塚書店・京都
 (大阪) 大塚書店・大阪

東京市神田區神保町一丁目六十七番地
 振替東京一〇三七番・電話神田(25)三七四五番
 大阪市南區・内安堂寺町一丁目二十八番地
 振替大阪三九五六番・電話東(94)二八六八番

本社編輯中。所本製 所圖印 社文京社會式株

東洋山は富士

(最新出版)

高等程度參考書

著者	書名	型	定價	送料	特	徵
理第二高等学校教授 一	代數	菊	〇・三〇	〇・一〇	著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二、實際の兩方面に全五冊互に相連關する。統一、内容特色が得易く、相違なく、而も各教科書に準じて、文部省令に適合する。最新、新著を最も参考せしめ、題切し、内容を豊富に、五、大學入試の要諦を、大、大學生の自習に、四、切實に解説し、三、五、大學生の自習に、二、大、大學生の自習に、	一流著者は東洋圖書に集まる (徳島・古川眞太郎)……讀者の聲
理第二高等学校教授 治	三角	菊	〇・三〇	〇・一〇	著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二、實際の兩方面に全五冊互に相連關する。統一、内容特色が得易く、相違なく、而も各教科書に準じて、文部省令に適合する。最新、新著を最も参考せしめ、題切し、内容を豊富に、五、大學入試の要諦を、大、大學生の自習に、四、切實に解説し、三、五、大學生の自習に、	
理第二高等学校教授 房	座標幾何學	菊	〇・三〇	〇・一〇	著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二、實際の兩方面に全五冊互に相連關する。統一、内容特色が得易く、相違なく、而も各教科書に準じて、文部省令に適合する。最新、新著を最も参考せしめ、題切し、内容を豊富に、五、大學入試の要諦を、大、大學生の自習に、四、切實に解説し、三、五、大學生の自習に、	
理第二高等学校教授 寛	微分積分學	菊	〇・四〇	〇・一〇	著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二、實際の兩方面に全五冊互に相連關する。統一、内容特色が得易く、相違なく、而も各教科書に準じて、文部省令に適合する。最新、新著を最も参考せしめ、題切し、内容を豊富に、五、大學入試の要諦を、大、大學生の自習に、四、切實に解説し、三、五、大學生の自習に、	
理第二高等学校教授 寛	微分積分學	菊	〇・四〇	〇・一〇	著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二、實際の兩方面に全五冊互に相連關する。統一、内容特色が得易く、相違なく、而も各教科書に準じて、文部省令に適合する。最新、新著を最も参考せしめ、題切し、内容を豊富に、五、大學入試の要諦を、大、大學生の自習に、四、切實に解説し、三、五、大學生の自習に、	
理第二高等学校教授 重	商業數學	菊	〇・三〇	〇・一〇	著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二、實際の兩方面に全五冊互に相連關する。統一、内容特色が得易く、相違なく、而も各教科書に準じて、文部省令に適合する。最新、新著を最も参考せしめ、題切し、内容を豊富に、五、大學入試の要諦を、大、大學生の自習に、四、切實に解説し、三、五、大學生の自習に、	
理第二高等学校教授 重	商業數學	菊	〇・三〇	〇・一〇	著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二、實際の兩方面に全五冊互に相連關する。統一、内容特色が得易く、相違なく、而も各教科書に準じて、文部省令に適合する。最新、新著を最も参考せしめ、題切し、内容を豊富に、五、大學入試の要諦を、大、大學生の自習に、四、切實に解説し、三、五、大學生の自習に、	
東京女高師教授 田中増太郎	微分積分綱要	菊	〇・二〇	〇・一〇	著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二、實際の兩方面に全五冊互に相連關する。統一、内容特色が得易く、相違なく、而も各教科書に準じて、文部省令に適合する。最新、新著を最も参考せしめ、題切し、内容を豊富に、五、大學入試の要諦を、大、大學生の自習に、四、切實に解説し、三、五、大學生の自習に、	

一流著者は東洋圖書に集まる (徳島・古川眞太郎)……讀者の聲

【土富は山洋東は本】

刊新	版六	版五	版七	版四	版四	版四	版四	版四	版六
長倉快一	長倉快一	長倉快一	吉田貞士	大田貞士	藤井勇美	青島新士	東山新士	清水與三郎	奈良女高師教授
動物學圖集	動物學汎論	動物學汎論	動物學	動物學	動物學	動物學	動物學	動物學	動物學
菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇
動物學圖集	動物學汎論	動物學汎論	動物學	動物學	動物學	動物學	動物學	動物學	動物學
動物學圖集	動物學汎論	動物學汎論	動物學	動物學	動物學	動物學	動物學	動物學	動物學

東洋圖書は飛躍日本に嚴たる存在 (秋田・戸澤勝郎)……讀者の聲

【書圖洋東は書育教】

版七	版二十	版四	版四	版四	版四	版一	版二	版二十	版五	版五
山下誠太郎	横濱高等工業教授	名古屋博士	野島博士	野島博士	野島博士	野島博士	野島博士	野島博士	野島博士	野島博士
内燃機	高等物理學講義	高等電磁氣學	波動論音響學光學	力學・物性・熱學	物理學	物理學	物理學	物理學	物理學	物理學
菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇	菊三〇・二〇〇
内燃機	高等物理學講義	高等電磁氣學	波動論音響學光學	力學・物性・熱學	物理學	物理學	物理學	物理學	物理學	物理學
内燃機	高等物理學講義	高等電磁氣學	波動論音響學光學	力學・物性・熱學	物理學	物理學	物理學	物理學	物理學	物理學

常に新生命に充滿せる教育書籍の發行に感謝します (三重・北川重一)……讀者の聲

【書圖洋東は書育教】

版五	刊新	版四	版十	版十	版六	版十	版四	版五	刊新	版四	
文部省嘱託 佐藤富治	工第二 神門久太郎	工第二 神門久太郎	工第二 神門久太郎	工第二 神門久太郎	工第二 神門久太郎	工第二 神門久太郎	工第二 神門久太郎	工第二 神門久太郎	工第二 神門久太郎	工第二 神門久太郎	
工場管理學	立體圖學	平面圖學	世界地理圖集	日本地理圖集	日本地理圖集	日本地理圖集	日本地理圖集	日本地理圖集	日本地理圖集	日本地理圖集	
菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	
著者が實地に工場を経営した経験から、工場管理の諸問題を、理論と実践の両面から詳しく解説している。著者は、工場の管理に必要とする知識を、豊富な事例と図表を用いて、わかりやすく説明している。本書は、工場管理者や関係者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、立體圖學の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、立體圖學の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、平面圖學の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、平面圖學の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、世界地理の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、世界地理の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、日本地理の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、日本地理の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、日本地理の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、日本地理の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、日本地理の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、日本地理の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、日本地理の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、日本地理の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、日本地理の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、日本地理の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、日本地理の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、日本地理の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、日本地理の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、日本地理の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、日本地理の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、日本地理の学習者にとって、大変参考になる一冊である。
阪大 社 會 資 合 式 株 書 圖 洋 東 京 東											

結構なる圖書を低廉に出版せられるのに敬意を表す (富山・高廣英吉)……讀者の聲

【本は東洋山は富】

版五	版四	版十	版三	版二	版四	版八	版三	版十	版三	版五
文部省嘱託 田中義能	早稲田大學 小澤恒一	東京帝國大學 春山博作	東京帝國大學 小泉卓藏	東京帝國大學 鈴木木	東京帝國大學 鈴木木	東京帝國大學 鈴木木	東京帝國大學 鈴木木	東京帝國大學 鈴木木	東京帝國大學 鈴木木	東京帝國大學 鈴木木
系統的西洋教育史(昭和版)	教育學新講	教育學講義	アチニス	コレッチ	ガイルス	アチニス	コレッチ	ガイルス	アチニス	コレッチ
菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇	菊 〇・四八〇
本書は、西洋教育史の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、西洋教育史の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、教育學の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、教育學の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、教育學の基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、教育學の学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、アチニスの基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、アチニスの学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、コレッチの基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、コレッチの学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、ガイルスの基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、ガイルスの学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、アチニスの基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、アチニスの学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、コレッチの基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、コレッチの学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、ガイルスの基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、ガイルスの学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、アチニスの基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、アチニスの学習者にとって、大変参考になる一冊である。	本書は、コレッチの基礎知識を、豊富な図表と事例を用いて、わかりやすく説明している。本書は、コレッチの学習者にとって、大変参考になる一冊である。
阪大 社 會 資 合 式 株 書 圖 洋 東 京 東										

書籍豊富にして送本迅速確實に敬意を表す (岡山・三木正)……讀者の聲

【書圖洋東は書育教】

Table listing educational books with columns for author, title, and price. Includes titles like '女子法制・經濟學' and '西洋倫理學史'.

貴社の發行書を糧として日々の道に働いてゐます (高知・幸川三郎)……讀者の聲

六

【士富は山洋東は本】

Table listing educational books with columns for author, title, and price. Includes titles like '宗教文化史' and '實業補習教育史'.

東洋圖書は學界關心の焦點出版界の第一位 (宮城・大友貞行)……讀者の聲

七

【書 圖 洋 東 は 書 育 教】

名部文 ⑥ ⑥ ⑥ (刊新最は◎)

版七廿	版四	版四	版二十	版十二	版十二	新	新	新	新	新	数版	
奈良女 小川 正行 教授	研究室 見 延 綱 士	東京帝大 春 田 博 作 士	東京帝大 藤 五 郎 教授	教育週報社 藤 五 郎	日本國 加藤 完 治 校長	農 佐 藤 寛 次 博士	東京帝大 眞田 幸 憲 教授	眞田 幸 憲 教授	眞田 幸 憲 教授	眞田 幸 憲 教授	眞田 幸 憲 教授	眞田 幸 憲 教授
郷土の本質と郷土教育	近小 學教育の諸問題	現代人の修養と教育	現代農村の教育	日本農村教育	新興農村教育	農村の郷土・勞作・公民教育	青年學校原論	青年學校原論	青年學校原論	青年學校原論	青年學校原論	青年學校原論
四 〇・二 六〇	菊 〇・四 〇・三〇	興 〇・三 〇・六〇	興 〇・二 〇・六〇	興 〇・二 〇・六〇	興 〇・二 〇・六〇	菊 〇・四 〇・〇〇	菊 〇・三 〇・八〇	菊 〇・三 〇・八〇	菊 〇・三 〇・八〇	菊 〇・三 〇・八〇	菊 〇・三 〇・八〇	菊 〇・三 〇・八〇
士點先 教育を 明示し その上 に立 てて 郷土 教育の 本質を 明らかに し、 郷土 教育の 重要性 を論ず る。	初め 教育の 内外に 關し、 其の 重要 問題を 論ずる。	東京 帝大 教授 の著 書。現 代教育 の重要 問題を 論ずる。	即一段 高所 より 現代 農村 の教育 を論ず る。	行詰 り。國 定教科 書に 關し、 其の 重要性 を論ず る。	不實 際と 懸念 を論ず る。日 本農村 教育の 現狀を 論ずる。	文檢 査。農 村教育 の現 狀を論 ずる。	著者 は、農 村教育 の現 狀を論 ずる。	近一 如的 に、農 村教育 の現 狀を論 ずる。	原論 に、農 村教育 の現 狀を論 ずる。	原論 に、農 村教育 の現 狀を論 ずる。	原論 に、農 村教育 の現 狀を論 ずる。	原論 に、農 村教育 の現 狀を論 ずる。
東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東												

教育教授参考書

一般教育書

●●● 權威ある著者
●●● 精選された内容
●●● 必要不可欠の良書

御社の新味ある出版には絶えず感謝して居ります (愛知・西山貞良)……讀者の聲

815

Ki 14

終